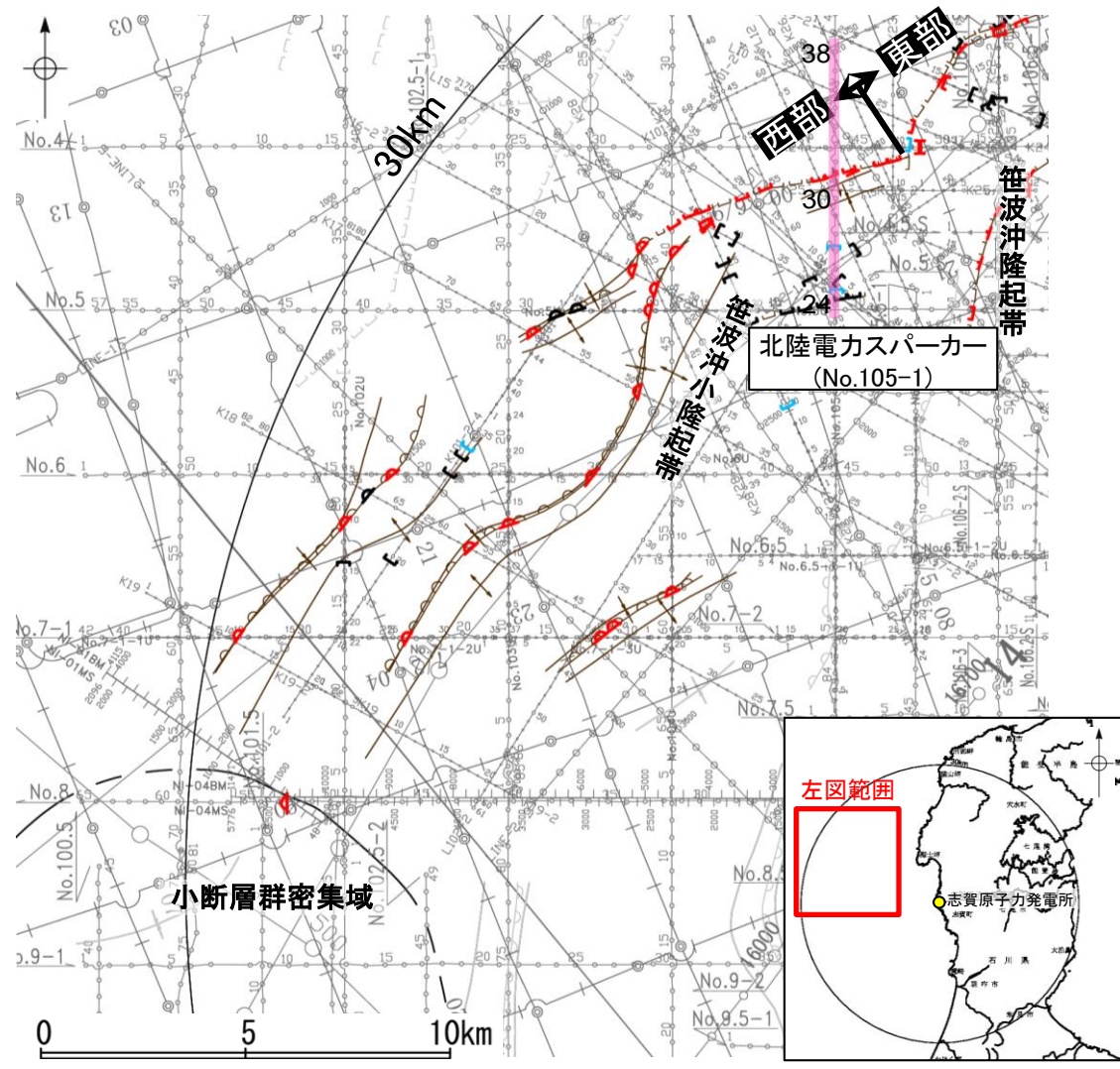


# 2.4.2(5) 笹波沖断層帯(西部)の活動性 -No.105-1測線-

○No.105-1測線において、測点31付近でB<sub>1</sub>層下部、B<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層、C<sub>1</sub>層、C<sub>2</sub>層、D<sub>1</sub>層及びD<sub>2</sub>層に北落ちの変位が認められることから断層を推定した。変位、変形はA層及びB<sub>1</sub>層上部に及んでいないが、B<sub>1</sub>層下部まで変位が及んでいることから、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められると判断した。

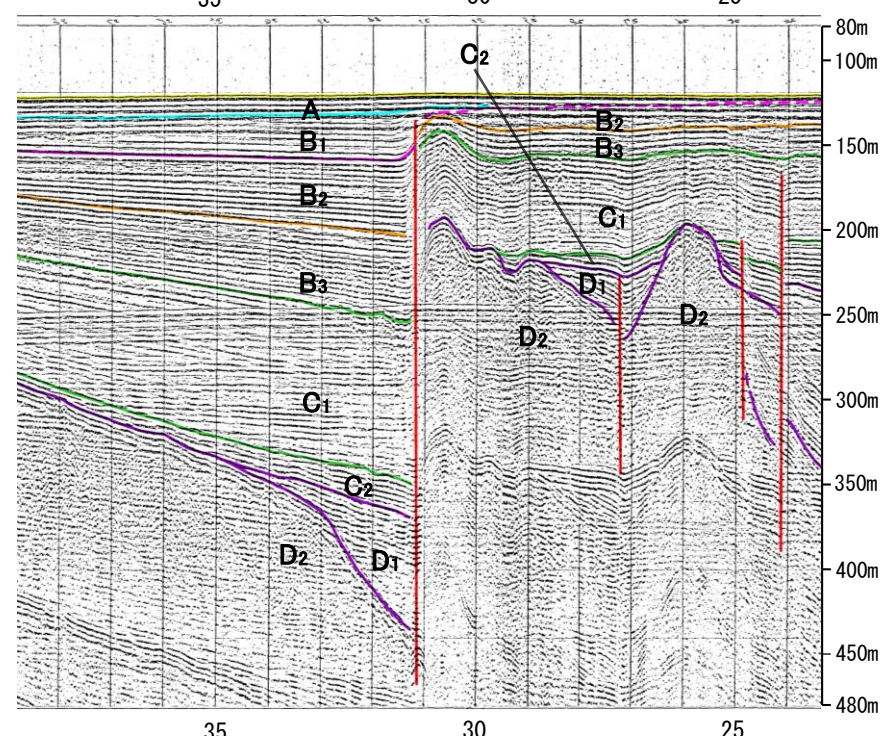
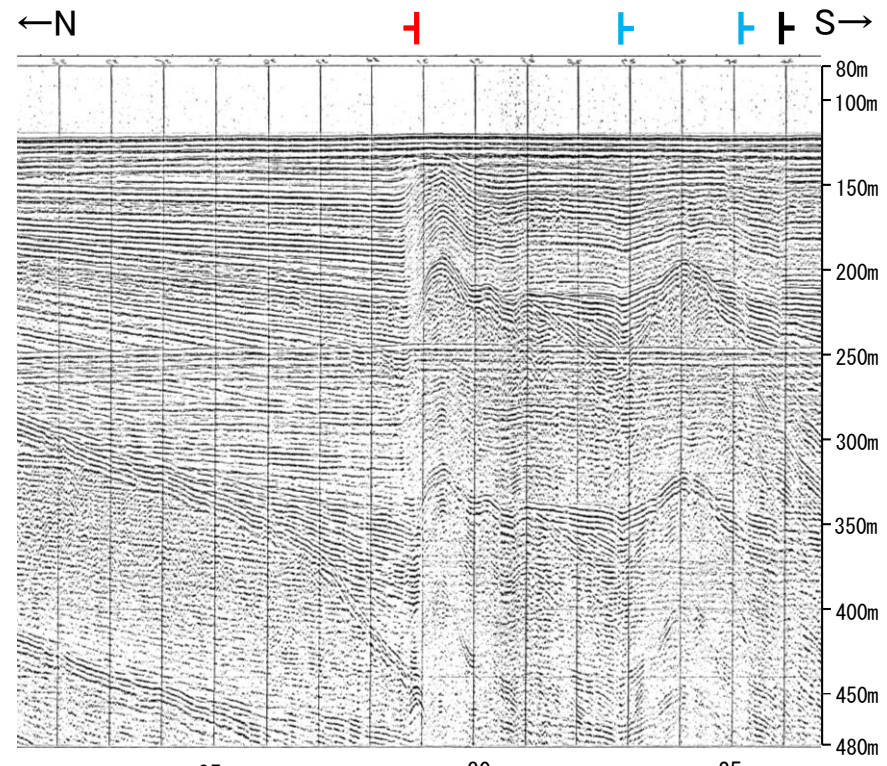
○また、測点27付近でD<sub>1</sub>層及びD<sub>2</sub>層に南落ちの変位が認められ、測点25付近、測点24付近でC<sub>1</sub>層下部、C<sub>2</sub>層、D<sub>1</sub>層及びD<sub>2</sub>層に南落ちの変位が認められることから断層を推定した。変位は測点27付近の断層はC<sub>2</sub>層以上、測点25付近の断層はC<sub>1</sub>層上部以上に及んでいないことから、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形は認められないと判断した。測点24付近の断層はB<sub>1</sub>層の層厚が薄く、内部構造を確認できないため、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できないと判断した。



位置図

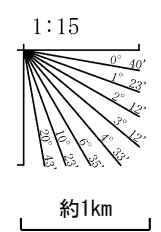
<p>対象断層</p> <p>( )断層 (伏在断層) 背斜軸</p> <p>〓 拗曲 向斜軸</p> <p>┆ 断層 連続性のない断層</p> <p>┆ 伏在断層 (連続性のない断層)</p> <p>----- 小断層群密集域</p> <p>(測線位置における活動性)</p> <p>┆ B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる</p> <p>┆ B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない</p> <p>┆ B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められない</p> <p>----- 右図記録範囲</p>	<p>例</p> <p>No. 4 調査測線 (北陸電力: スパーカー・シングルチャンネル・約2450ジュール)</p> <p>No. 4-S 調査測線 (北陸電力: スパーカー・シングルチャンネル・約360ジュール)</p> <p>No. 6U 調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)</p> <p>LINE-1 調査測線 (東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)</p> <p>K22 調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)</p> <p>L10 調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)</p> <p>N1-04BM 調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)</p> <p>N1-04MS 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)</p> <p>N-120 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)</p> <p>I4 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)</p> <p>H73-1 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)</p> <p>SJ1407 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)</p>
---	--

枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。



地質時代	地層名		
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
		前期	B <sub>3</sub> 層
	新第三紀	鮮新世	C <sub>1</sub> 層
		中新世	C <sub>2</sub> 層
古第三紀	D層	D <sub>1</sub> 層	
		D <sub>2</sub> 層	
先第三紀			

断層





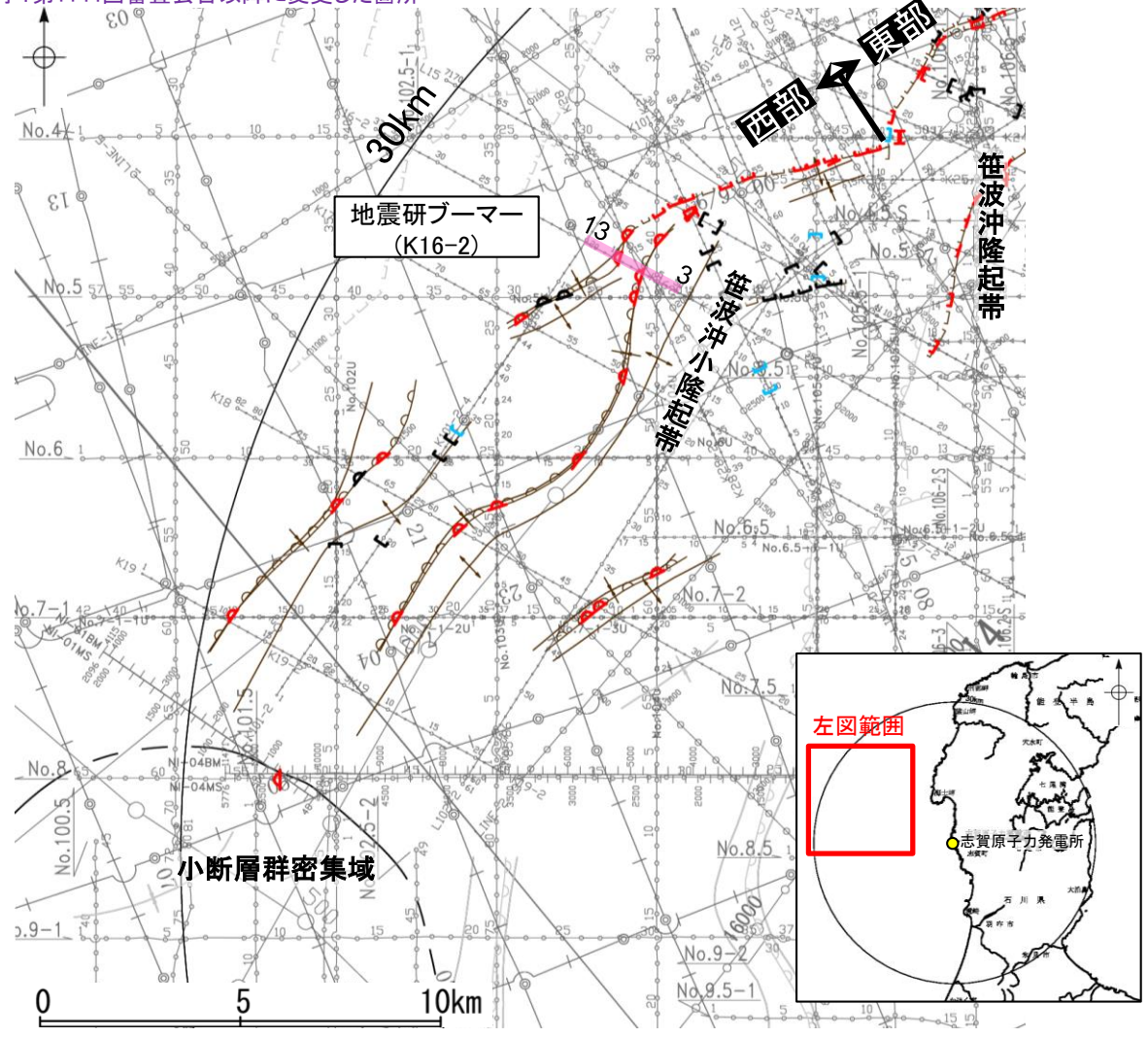
# 2.4.2(5) 笹波沖断層帯(西部)の活動性 - K16-2測線 -

○K16-2測線において、測点7付近でB<sub>1</sub>層、B<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層、C<sub>1</sub>層、C<sub>2</sub>層及びD<sub>1</sub>層に北西落ちの変形が認められることから、撓曲を推定した。変形はB<sub>1</sub>層まで及んでいることから、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められると判断した。

○また、測点9付近でもB<sub>1</sub>層、B<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層、C<sub>1</sub>層、C<sub>2</sub>層及びD<sub>1</sub>層に北西落ちの変形が認められることから撓曲を推定した。変形はB<sub>1</sub>層まで及んでいることから、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められると判断した。

○これらの撓曲は西翼が急傾斜で幅が狭く、東翼が緩傾斜で幅が広い非対称な褶曲であり、南東傾斜の逆断層が伏在することが推定される。

紫字:第1144回審査会合以降に変更した箇所

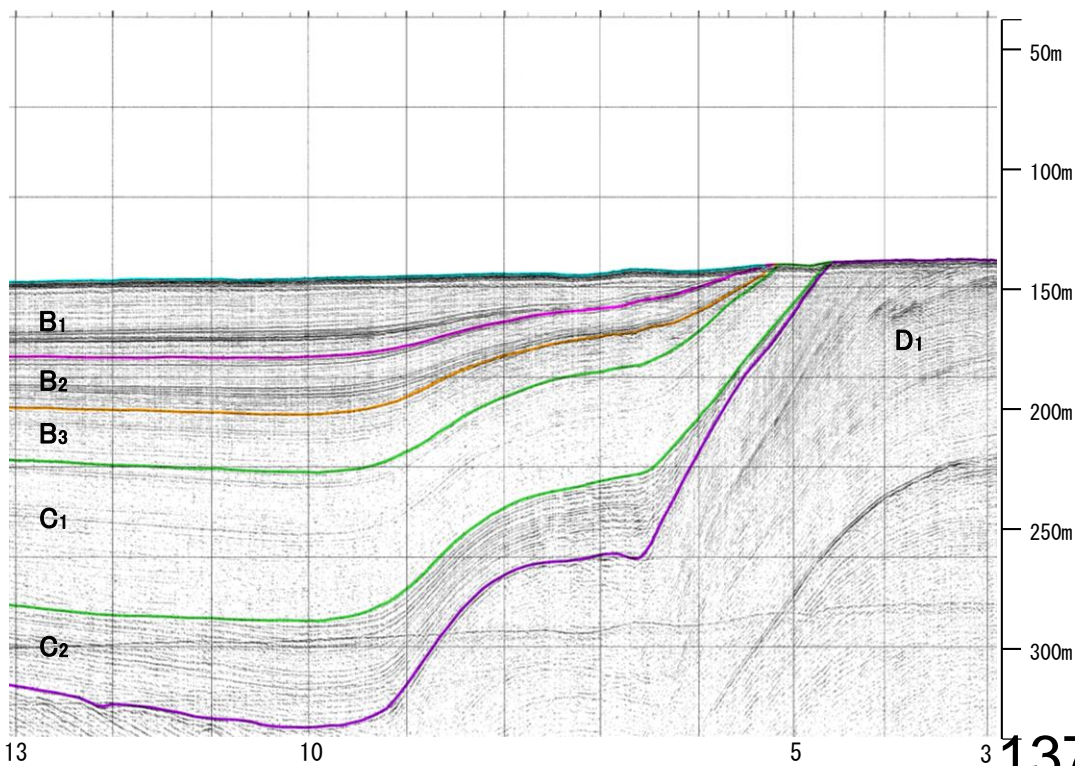
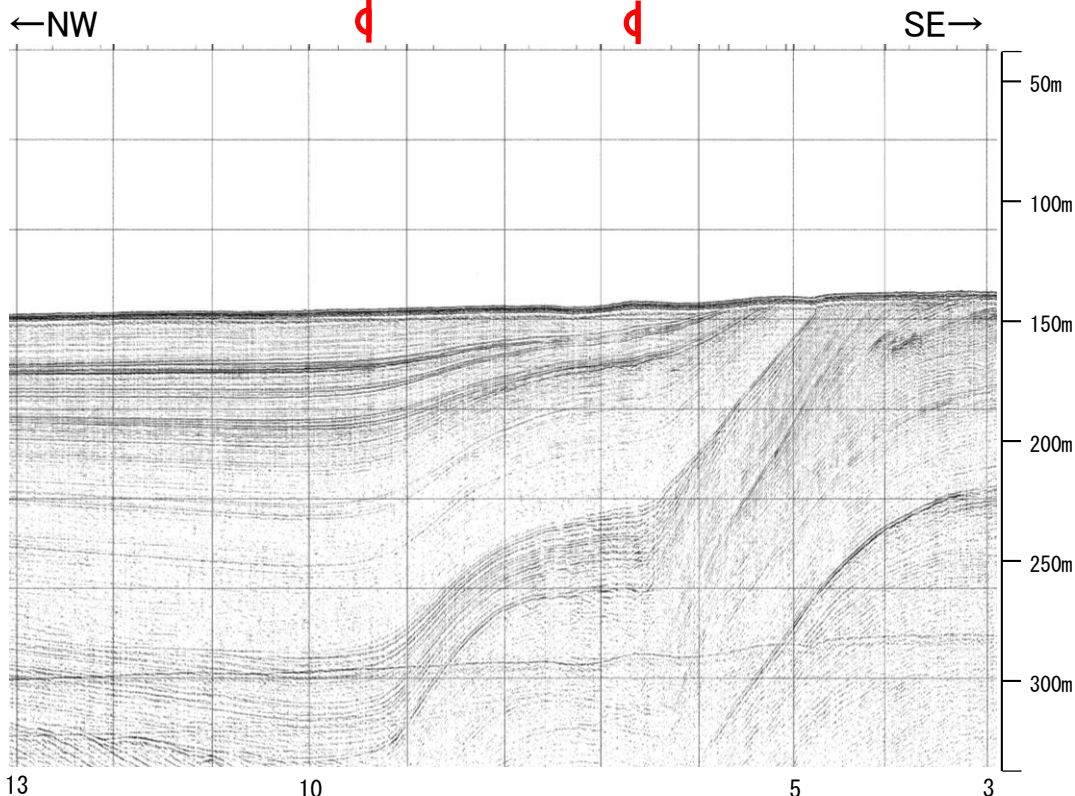


位置図

<p>対象断層</p> <p>断層 (伏在断層) 背斜軸</p> <p>撓曲 向斜軸</p> <p>断層 連続性のない断層</p> <p>伏在断層 (連続性のない断層)</p> <p>小断層群密集域</p> <p>(測線位置における活動性)</p> <p>B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる</p> <p>B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない</p> <p>B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められない</p> <p>右図記録範囲</p>	<p>例</p> <p>No. 4 調査測線 (北陸電力: スーパーカー・シングルチャンネル・約2450ジュール)</p> <p>No. 4-S 調査測線 (北陸電力: スーパーカー・シングルチャンネル・約360ジュール)</p> <p>No. 6U 調査測線 (北陸電力: ブーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)</p> <p>LINE-1 調査測線 (東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)</p> <p>K22 調査測線 (東京大学地震研究所: ブーマー・マルチチャンネル)</p> <p>L10 調査測線 (産業技術総合研究所: ブーマー・マルチチャンネル)</p> <p>N1-04BM 調査測線 (原子力安全・保安院: ブーマー・マルチチャンネル)</p> <p>N1-04MS 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)</p> <p>N-120 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)</p> <p>14 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)</p> <p>H73-1 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)</p> <p>SJ1407 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)</p>
--	--

枠囲みの内容は機密事項に属しますので  
公開できません。

地質時代	地層名		
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B層
		中期	B層
	鮮新世	前期	C層
中期		C層	
古第三紀	D層	D層	
		D層	

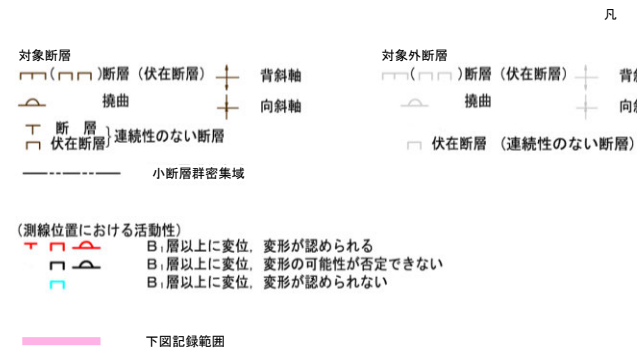
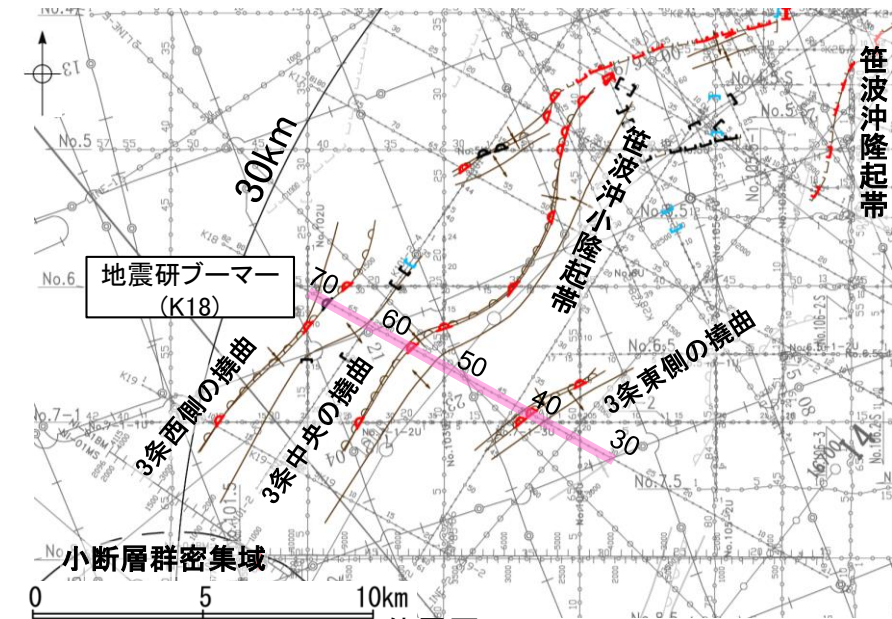


この図面は、東京大学地震研究所の海上音波探査の記録を北陸電力が独自に解析・作成したものである。



# 2.4.2(5) 笹波沖断層帯(西部)の活動性 -K18測線-

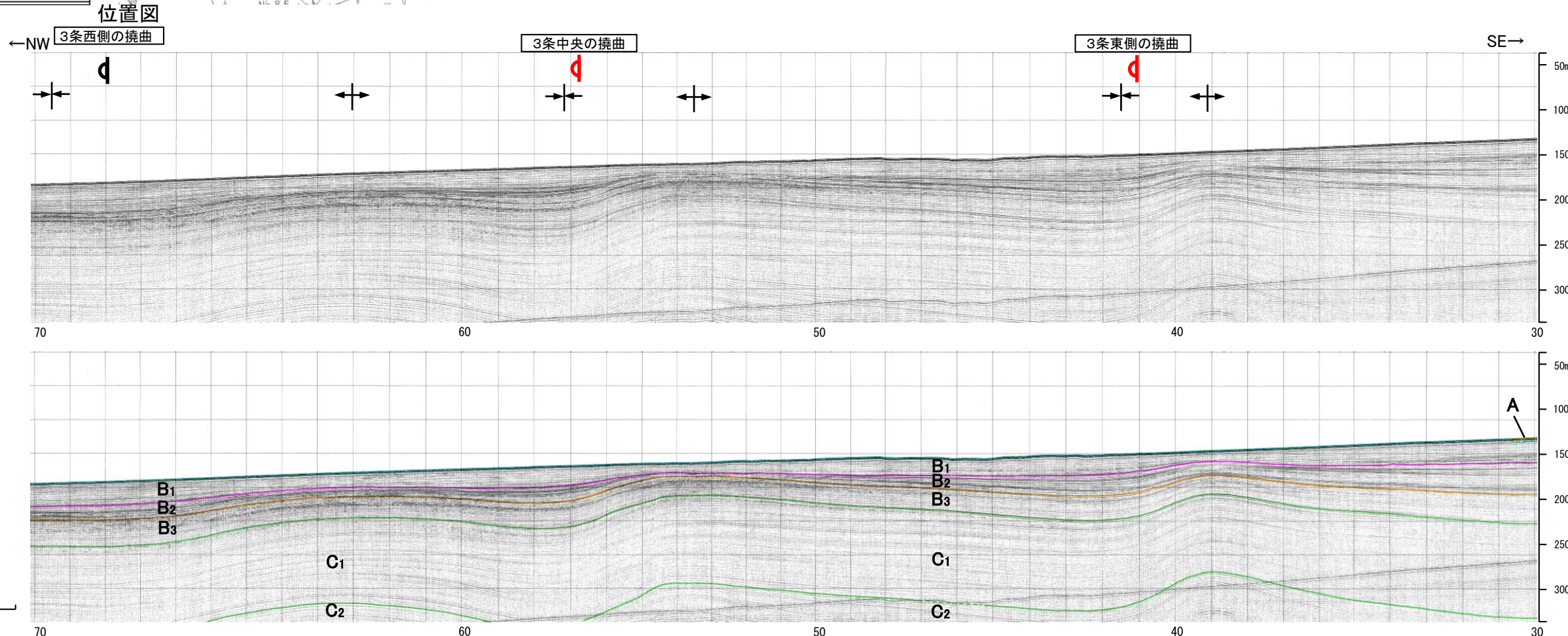
○K18測線において、測点41付近でB<sub>1</sub>層、B<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層、C<sub>1</sub>層及びC<sub>2</sub>層に北西落ちの変形が認められ、測点57付近でB<sub>1</sub>層、B<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層及びC<sub>1</sub>層に北西落ちの変形が認められ、測点68付近でB<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層及びC<sub>1</sub>層に北西落ちの変形が認められることから3条の撓曲を推定した(東側、中央、西側)。測点41付近、測点57付近の撓曲は変形がB<sub>1</sub>層まで及んでいることから、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められると判断した。また、測点68付近の撓曲は、変形はB<sub>1</sub>層内部に及んでいないが、B<sub>1</sub>層基底に及んでいる可能性が否定できないことから、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できないと評価した。これらの撓曲は西翼が急傾斜で幅が狭く、東翼が緩傾斜で幅が広い非対称な褶曲であり、南東傾斜の逆断層が伏在することが推定される。



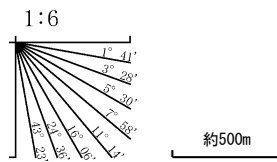
紫字: 第1144回審査会合以降に変更した箇所

凡	例
No. 4	調査測線 (北陸電力: スーパー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
No. 4-S	調査測線 (北陸電力: スーパー・シングルチャンネル・約360ジュール)
No. 6U	調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
LINE-1	調査測線 (東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
K22	調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
L10	調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
NI-04BM	調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
NI-04MS	調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
N-120	調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
I4	調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
H73-1	調査測線 ( ) エアガン・マルチチャンネル
SJ1407	調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。



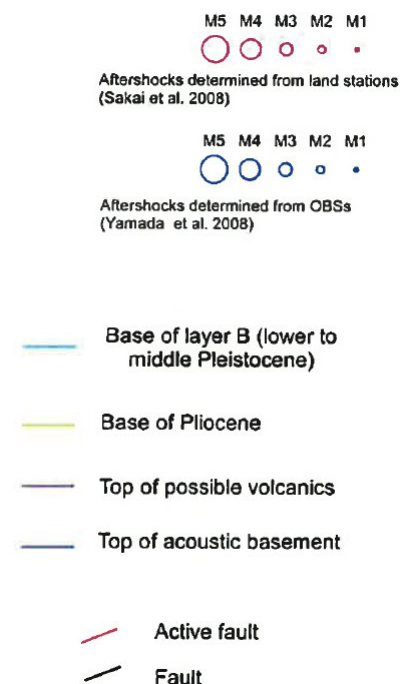
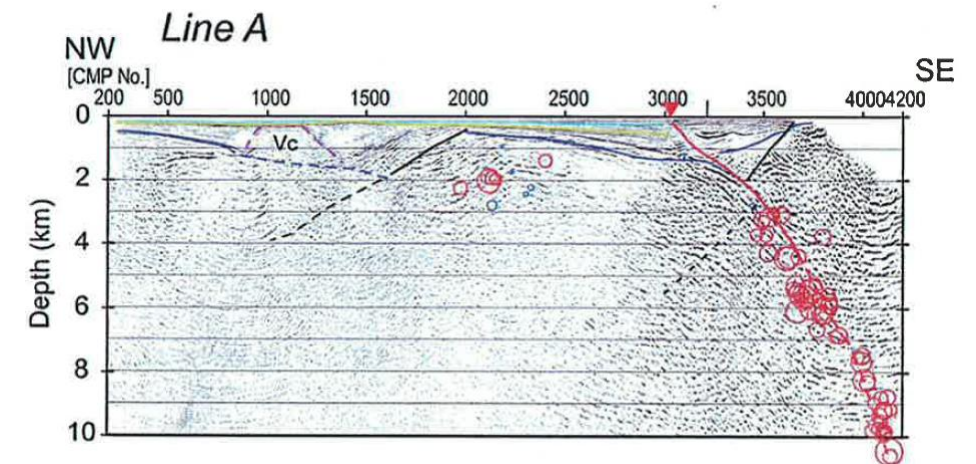
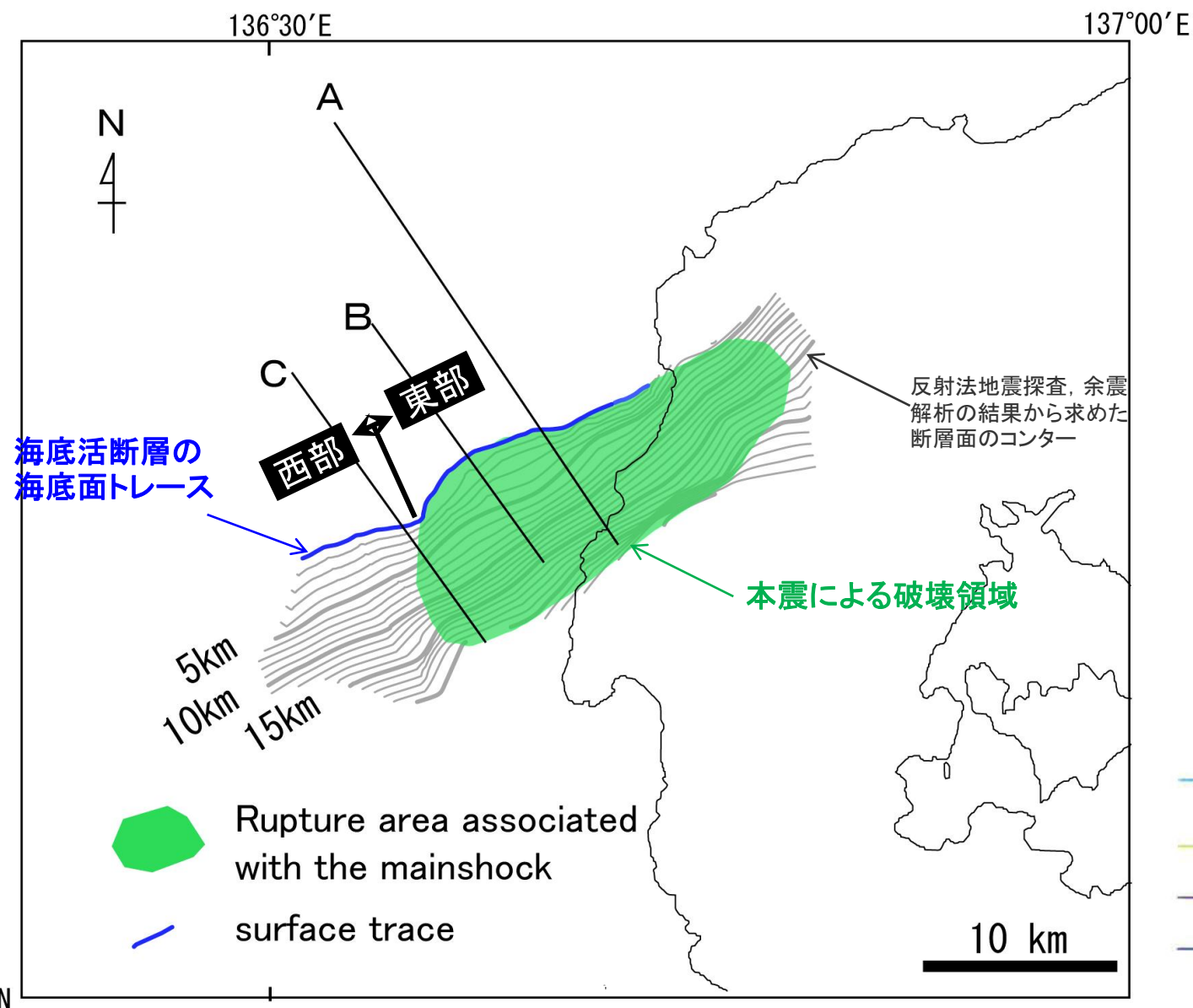
地質時代	地層名		
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
		前期	B <sub>3</sub> 層
新第三紀	鮮新世	C <sub>1</sub> 層	
	中新世	D <sub>1</sub> 層	
古第三紀		D <sub>2</sub> 層	
	先第三紀		





## 2.4.2(6) 笹波沖断層帯(西部)の端部 —北東端調査—

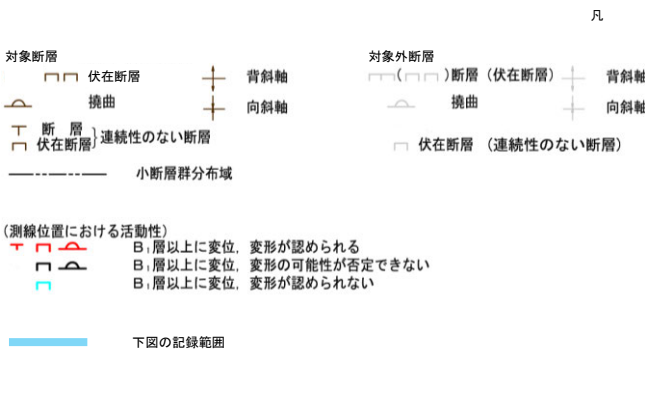
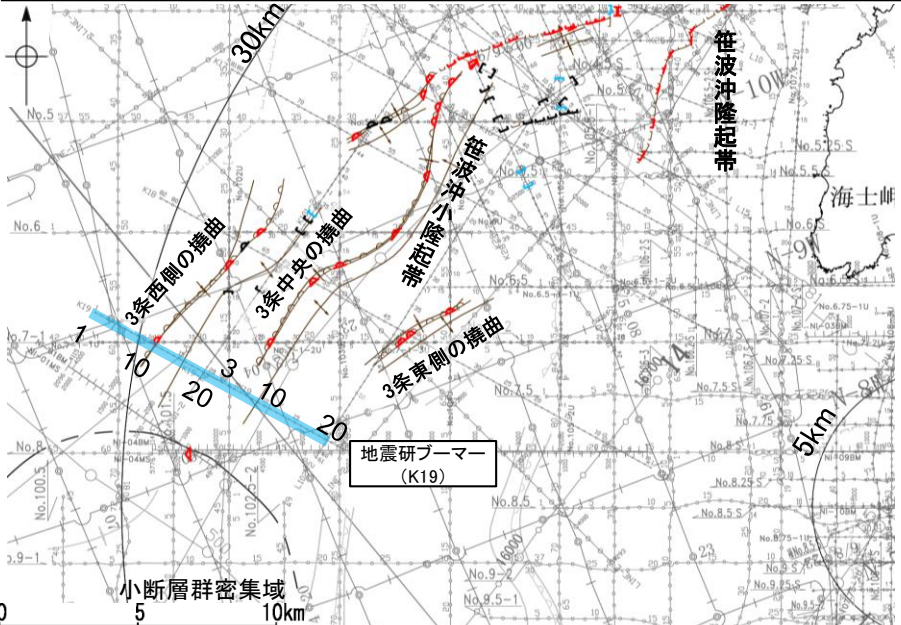
- 笹波沖断層帯(東部)の西方は、断層トレースが大きく南北方向に走向が変化することが報告されている(片川ほか(2005), 岡村(2007a), 井上ほか(2007))。
- 笹波沖断層帯(西部)に隣接して分布する笹波沖断層帯(東部)は、2007年能登半島地震の震源断層であり、走向が屈曲する位置がその西端であるとされている(佐藤ほか(2007a), 下図)。
- 以上のことから、笹波沖断層帯(西部)の北東端は、2007年能登半島地震の震源断層の西端である断層の走向が屈曲する位置と評価した。





# 2.4.2(6) 笹波沖断層帯(西部)の端部 - 南西端調査 K19測線 -

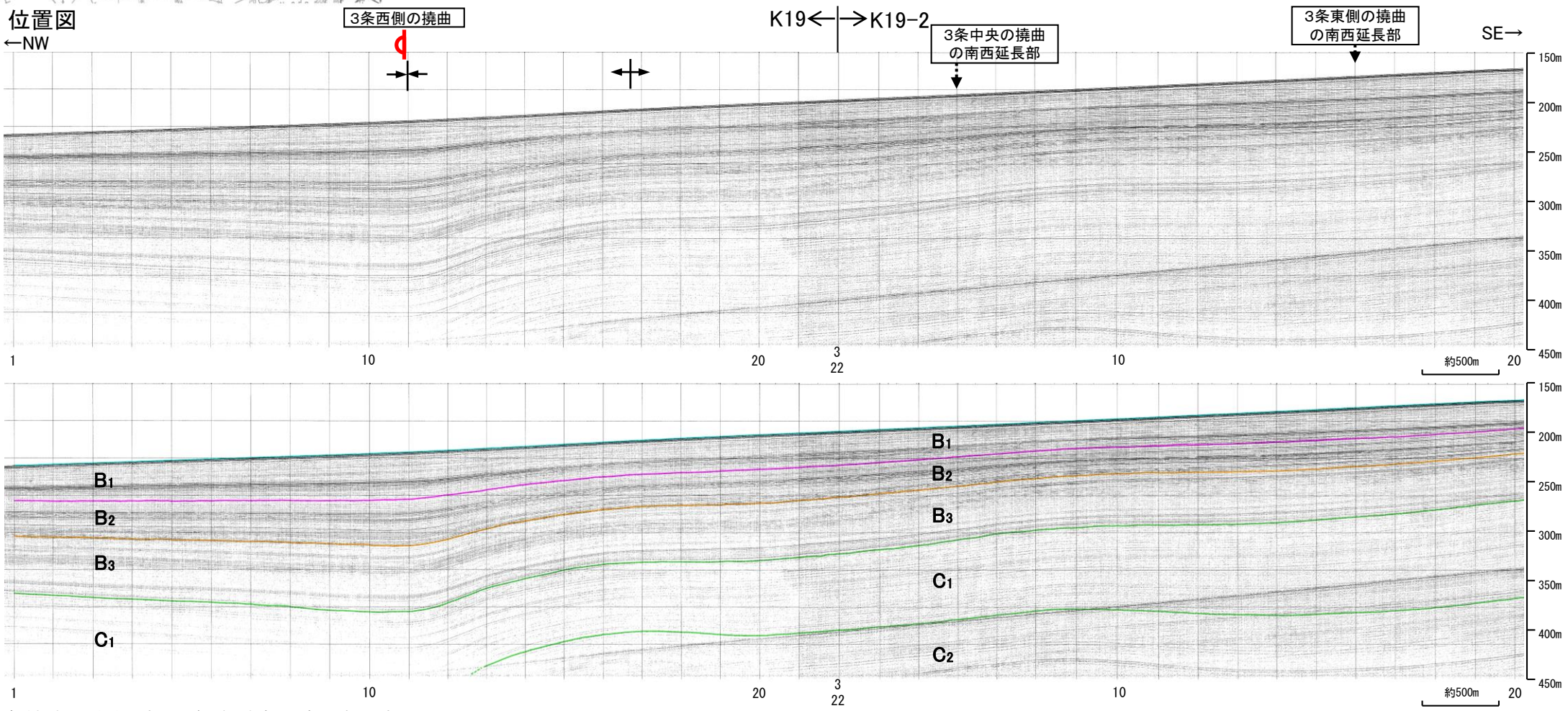
○K18測線で推定した3条の撓曲の南西方延長にあたるK19測線において、3条の撓曲のうち、中央、東側の2条の撓曲については、南西延長部はわずかな背斜状を示すものの、撓曲を示唆するような変位、変形は認められない。  
 ○なお、西側の撓曲の南西延長部である測点11付近では、B<sub>1</sub>層下部、B<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層及びC<sub>1</sub>層に北西落ちの変形が認められたことから撓曲を推定した。変形はB<sub>1</sub>層上部に及んでいないが、B<sub>1</sub>層下部に及んでいることから、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められると判断した。この撓曲は西翼が急傾斜で幅が狭く、東翼が緩傾斜で幅が広い非対称な褶曲であり、南東傾斜の逆断層が伏在することが推定される。



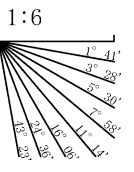
凡 例

No. 4	調査測線 (北陸電力: スーパーカー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
No. 4-S	調査測線 (北陸電力: スーパーカー・シングルチャンネル・約360ジュール)
No. 6U	調査測線 (北陸電力: ブーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
LINE-1	調査測線 (東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
K22	調査測線 (東京大学地震研究所: ブーマー・マルチチャンネル)
L10	調査測線 (産業技術総合研究所: ブーマー・マルチチャンネル)
NI-04BM	調査測線 (原子力安全・保安院: ブーマー・マルチチャンネル)
NI-04MS	調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
N-120	調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
I4	調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
H73-1	調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)
SJ1407	調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。



地質時代		地層名	
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
第三紀	新第三紀	前期	C <sub>1</sub> 層
		鮮新世	C <sub>2</sub> 層
	古第三紀	D層	D <sub>1</sub> 層
先第三紀	D <sub>2</sub> 層	D <sub>3</sub> 層	

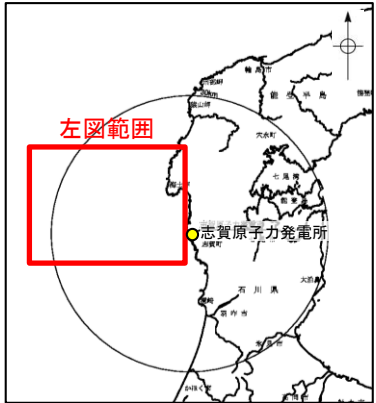
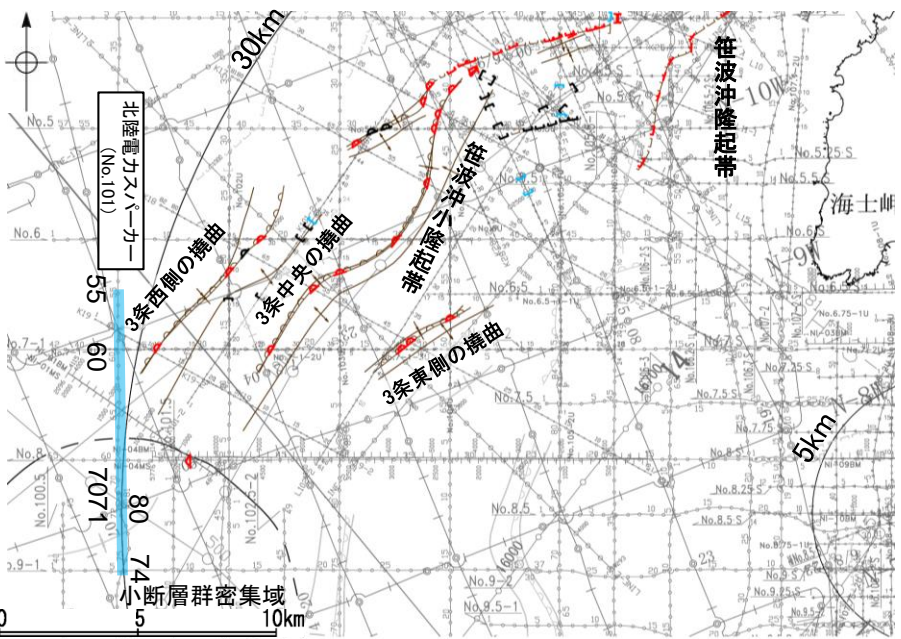


・この図面は、東京大学地震研究所の海上音波探査の記録を北陸電力が独自に解析・作成したものである

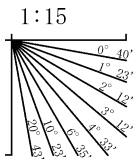


# 2.4.2(6) 笹波沖断層帯(西部)の端部 -南西端調査 No.101測線-

○K19測線で推定した西側の撓曲の南西方延長にあたるNo.101測線において、撓曲を示唆するような変位、変形は認められない。  
 ○なお、No.101-1測線の測点66~71, No.101-2測線の測点74~80付近で認められるわずかな地層の変位、変形は、深部方向に連続しない小断層(以下、「小断層群」と称する)であり、隆起運動に伴い、表層付近に生じた局所的な応力により形成されたものと推定され(P.337)、笹波沖断層帯(西部)に関連する構造ではないと判断した。



地質時代	地層名		
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
	鮮新世	前期	C層
中期		D層	
古第三紀	D層		
先第三紀	D層		



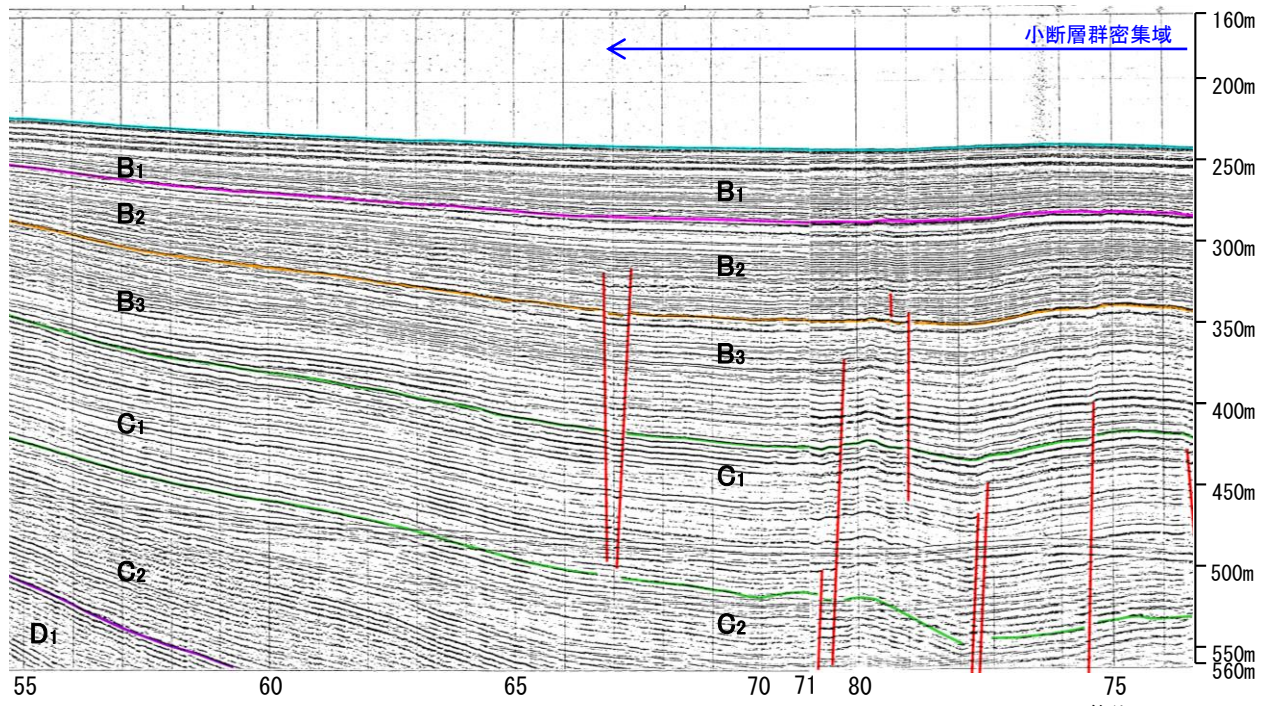
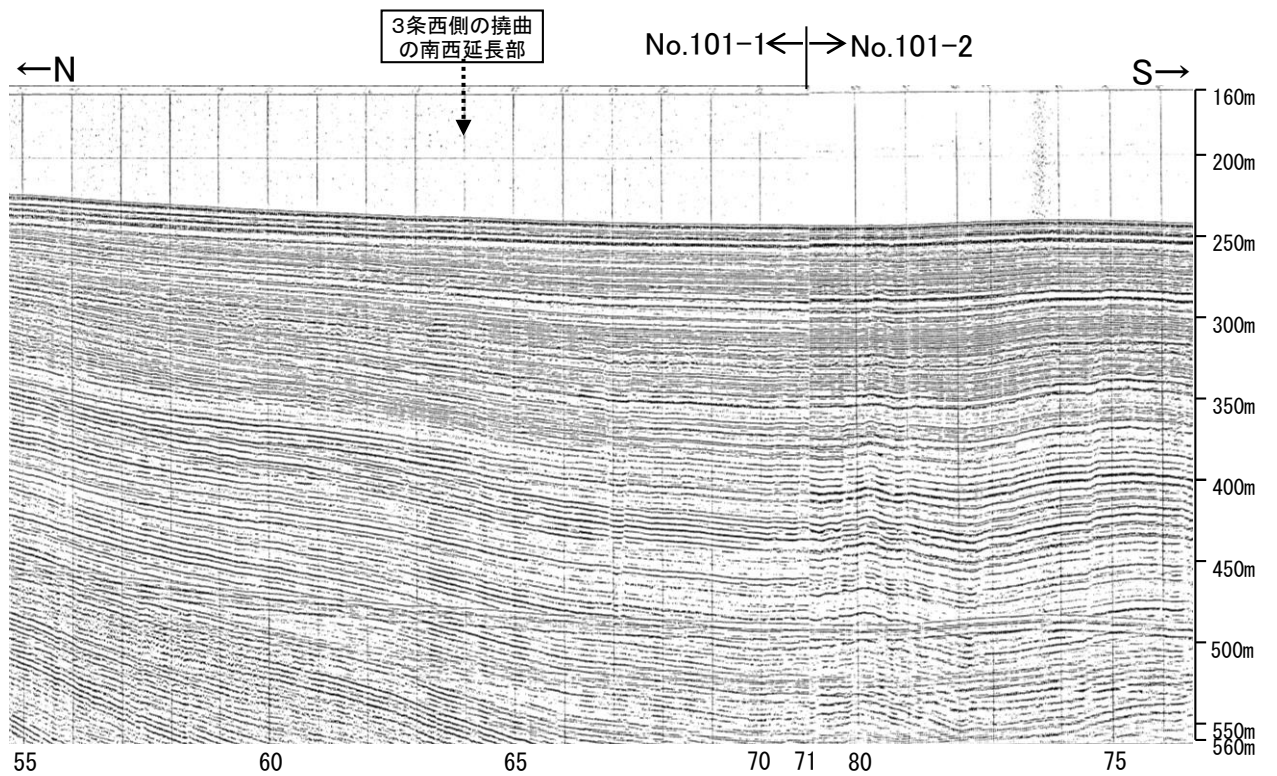
断層

対象断層	凡	例
伏在断層	+	No. 4 35° 調査測線(北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
撓曲	+	No. 4-S 5° 調査測線(北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約360ジュール)
断層(連続性のない断層)	+	No. 6U 5° 調査測線(北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
伏在断層(連続性のない断層)	+	L1NE-1 2000° 調査測線(東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
小断層群分布域	+	K22 35° 調査測線(東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
		L10 25° 調査測線(産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
		N1-04BM 調査測線(原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
		N1-04MS 調査測線(原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
		N-120 調査測線(地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
		I4 1800° 調査測線(文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
		H73-1 75° 調査測線( ) エアガン・マルチチャンネル)
		SJ1407 調査測線(海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

(測線位置における活動性)  
 B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる  
 B<sub>2</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない  
 B<sub>3</sub>層以上に変位、変形が認められない

右図の記録範囲

枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。



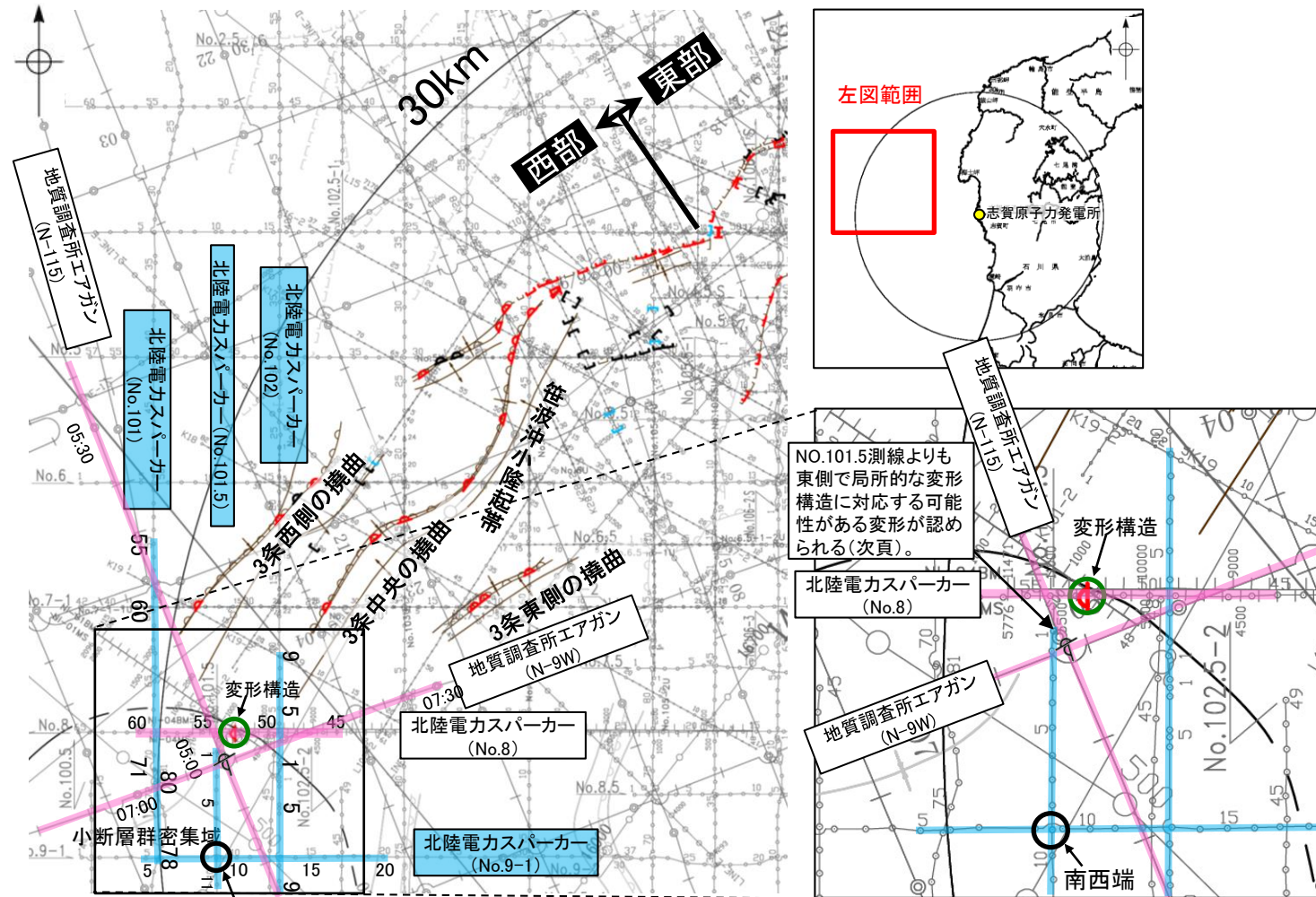


# 2.4.1(6) 笹波沖断層帯(西部)の端部 - 南西端調査 No.8測線 -

○褶曲の西端付近の後翼側であるNo.8測線において、測点52.5付近でB<sub>1</sub>層下部、B<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層、C<sub>1</sub>層及びC<sub>2</sub>層に西落ちの変形構造が認められる。変形はB<sub>1</sub>層下部に及んでいることから、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められると判断した(下図)。また、3条中央の撓曲がこの変形構造の位置まで連続、通過すると評価し、更なる南西方の連続性と端部を確認した。

○確認の結果、その南南西の地質調査所エアガン記録(N-115測線及びN-9W測線の交点付近)において、西落ちの変形が認められる(次頁)ことから、この変形構造は当該位置を通過すると評価した。その上で、その周辺の測線(No.101測線(前頁)、No.9-1測線、No.102測線及びNo.101.5測線(次々頁))で断層が認められないことから、この変形構造の南西方延長にあたるNo.9-1測線とNo.101.5測線が交差する位置を笹波沖断層帯(西部)の南西端と評価した。

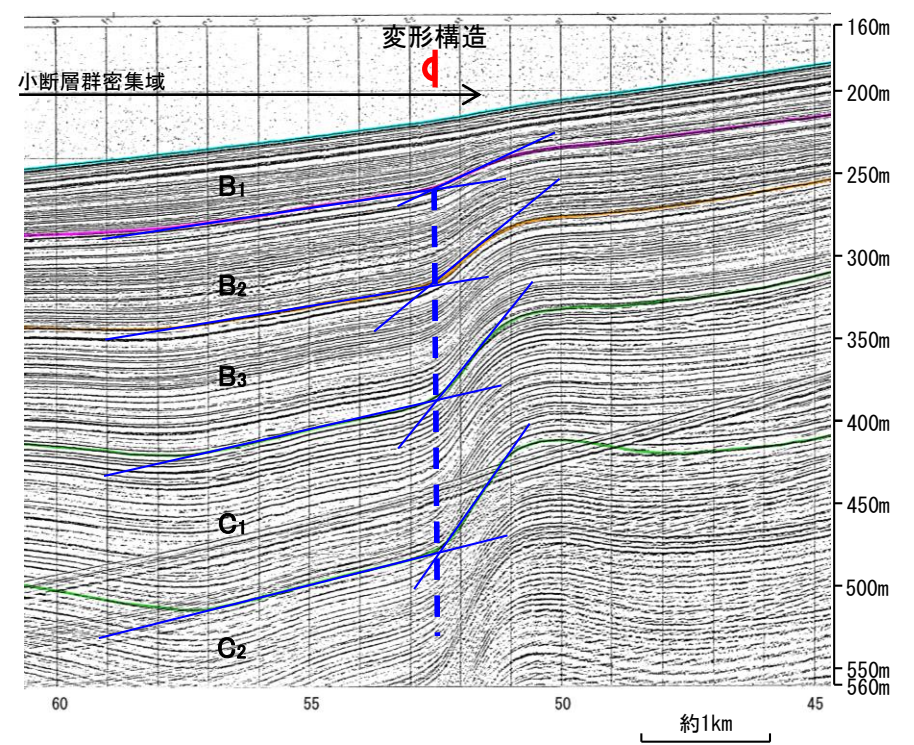
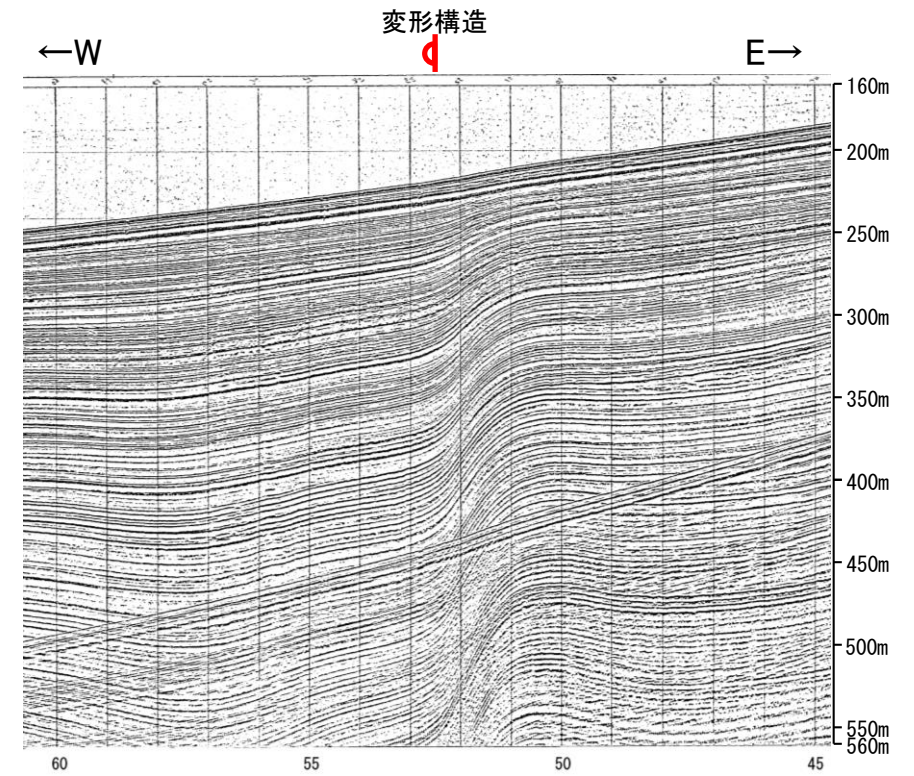
紫字: 第1144回審査会合以降に変更した箇所



枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。

地質時代		地層名	
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
		前期	B <sub>3</sub> 層
第三紀	新第三紀	C層	
		D層	
	古第三紀	D層	
		先第三紀	D層

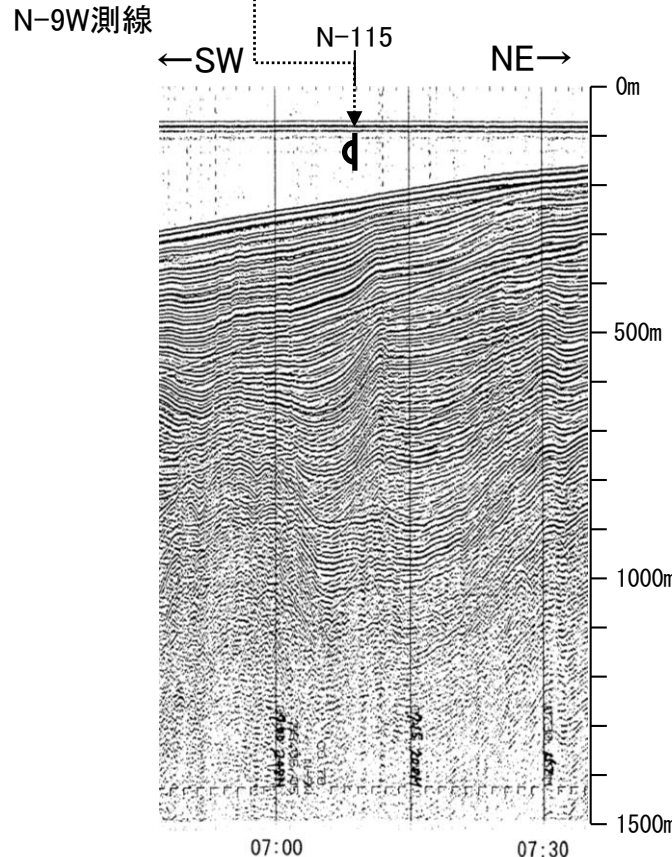
--- 撓曲の位置 (岡村(2000)を参考に、反射面に系統的な曲がりがある場合には、傾斜変換点を繋いだ線の頂部に撓曲を示す。)



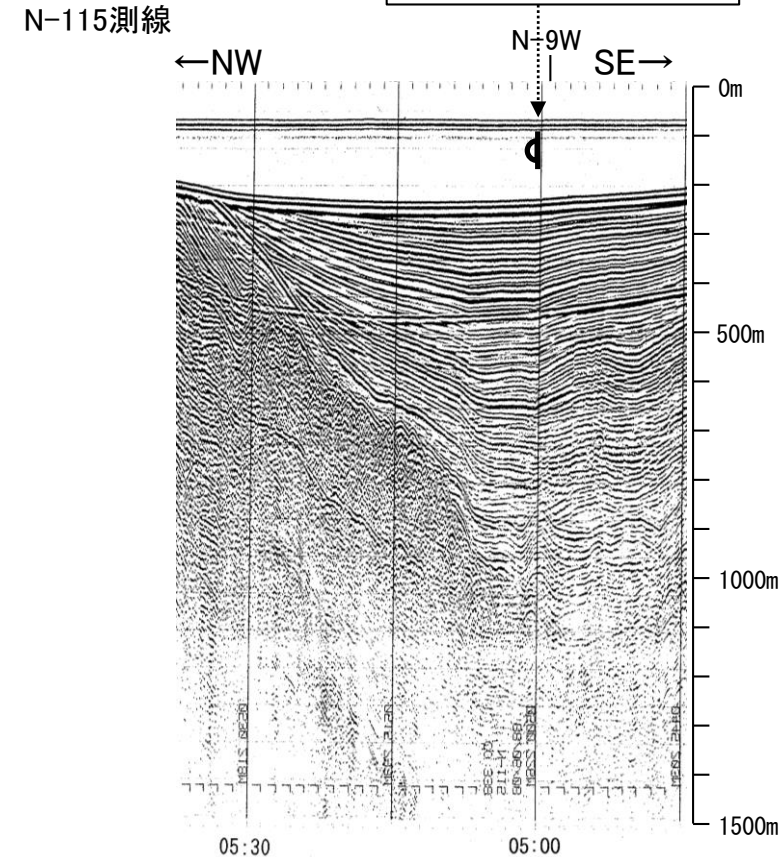


【N-9W測線, N-115測線】

局所的な変形構造と連続する  
可能性のある西落ちの変形

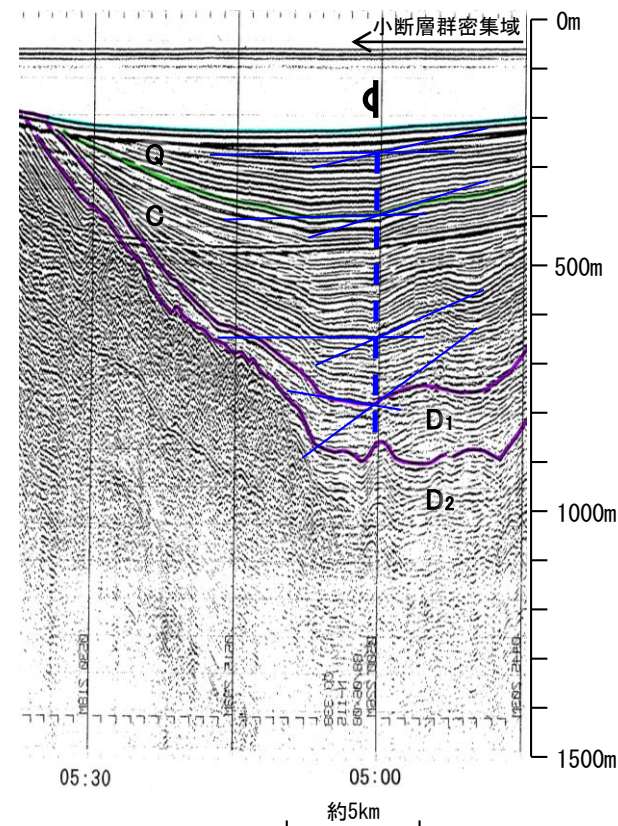
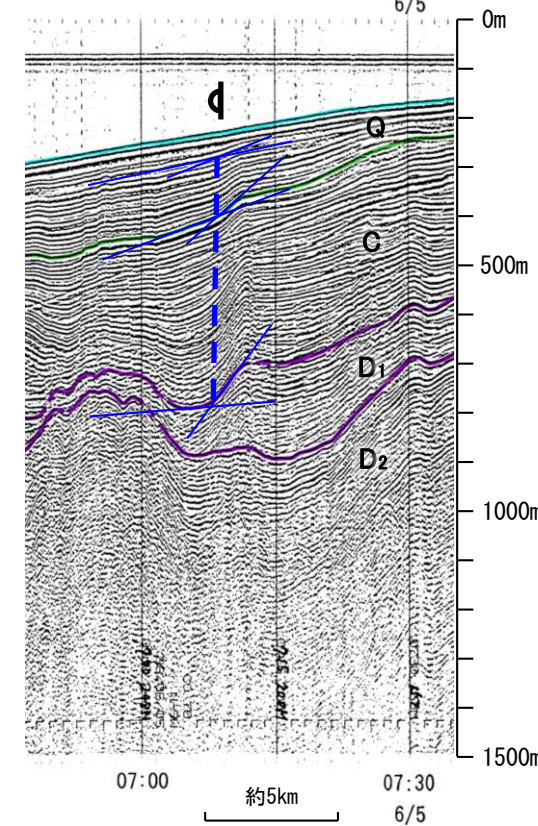
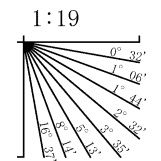


局所的な変形構造と連続する  
可能性のある西落ちの変形



地質時代		地層名	
第四紀	完新世	Q層	A層
	後期		B <sub>1</sub> 層
			B <sub>2</sub> 層
	中期		B <sub>3</sub> 層
前期	C層		
新第三紀	鮮新世	D層	C層
	中新世		D <sub>1</sub> 層
	D <sub>2</sub> 層		
古第三紀			D層
先第三紀			

A層とB層の細区分ができない層は、Q層と称する。



--- 撓曲の位置  
(岡村(2000)を参考に、反射面に系統的な曲がりがある場合には、傾斜変換点を繋いだ線の頂部に撓曲を示す。)

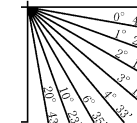
・No.8測線で推定した局所的な変形構造の南方延長にあたるN-115測線, N-9W測線において、西落ちの変形が認められる。

・この図面は、地質調査所(現 産業技術総合研究所)の海上音波探査の記録を北陸電力が独自に解析・作成したものである



# 【No.9-1測線, No.102測線, No.101.5測線】

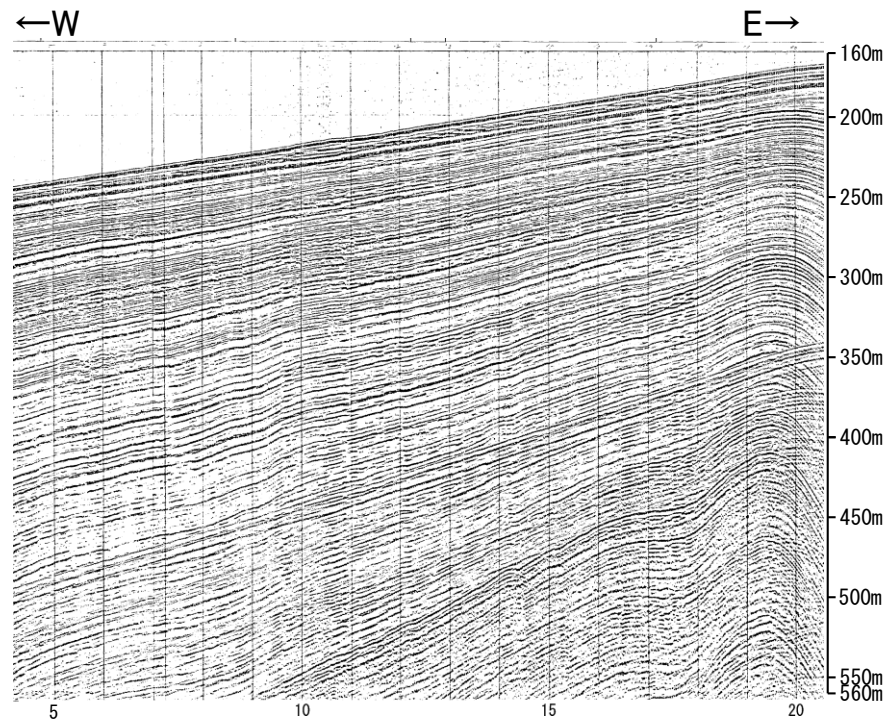
1:15



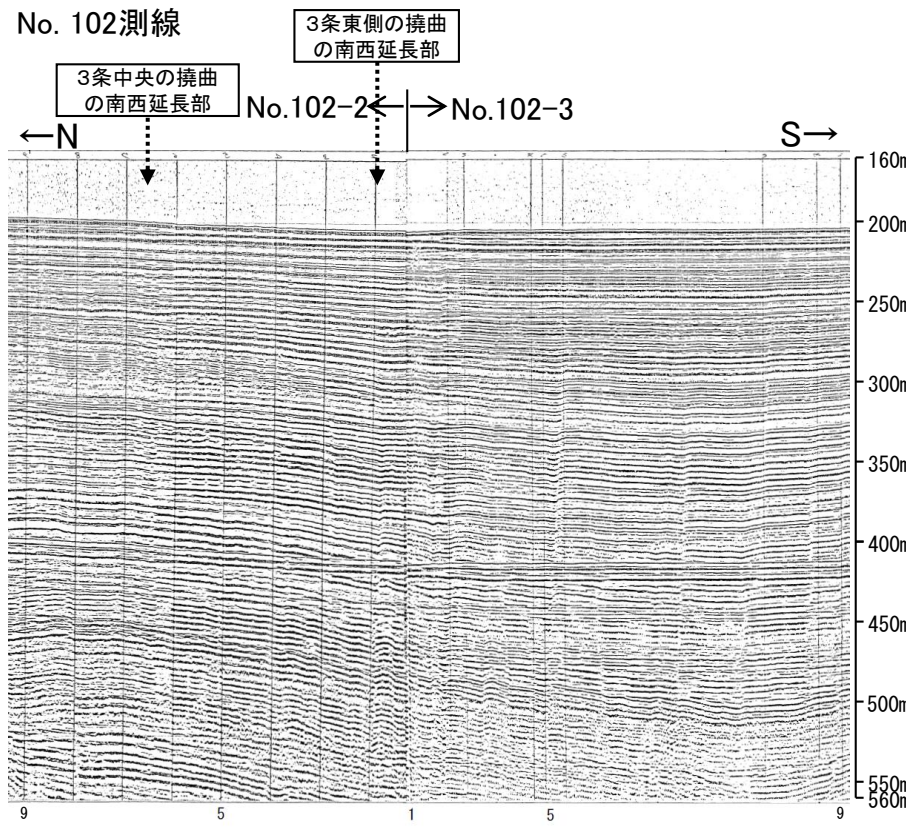
地質時代	地層名	
完新世	A層	
更新世	後期	B層
	中期	B層
	前期	B層
新第三紀	鮮新世	C層
	中新世	C層
古第三紀	D層	
	D層	
先第三紀	D層	

断層

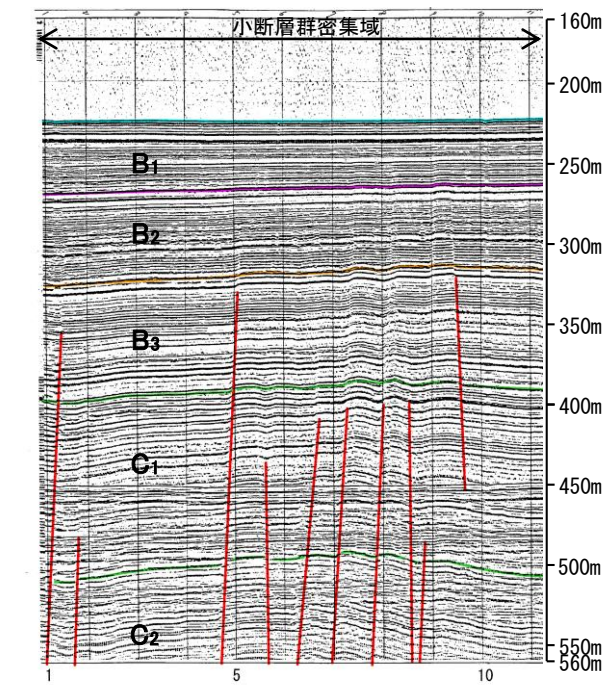
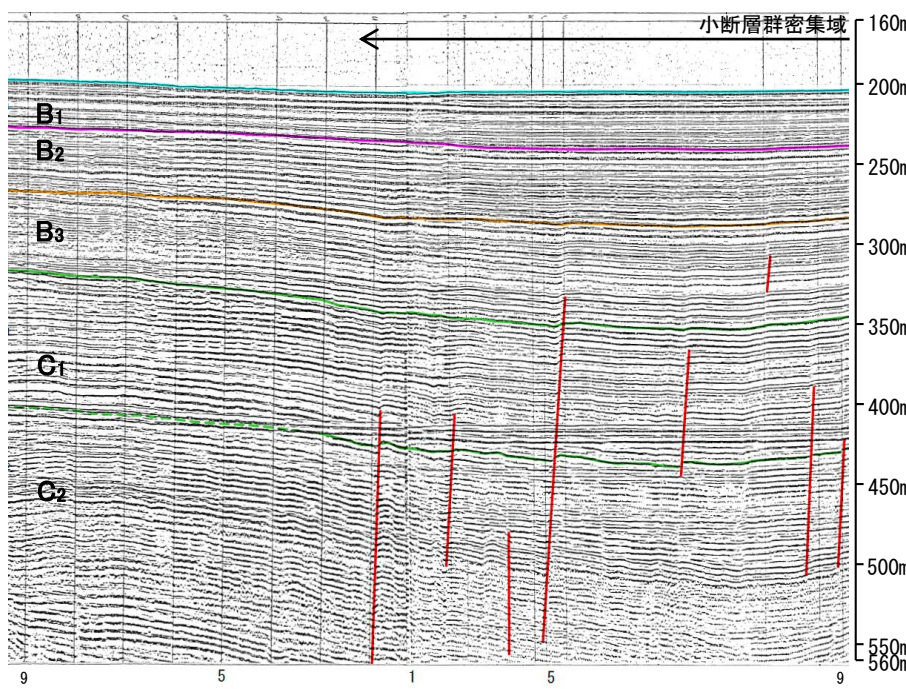
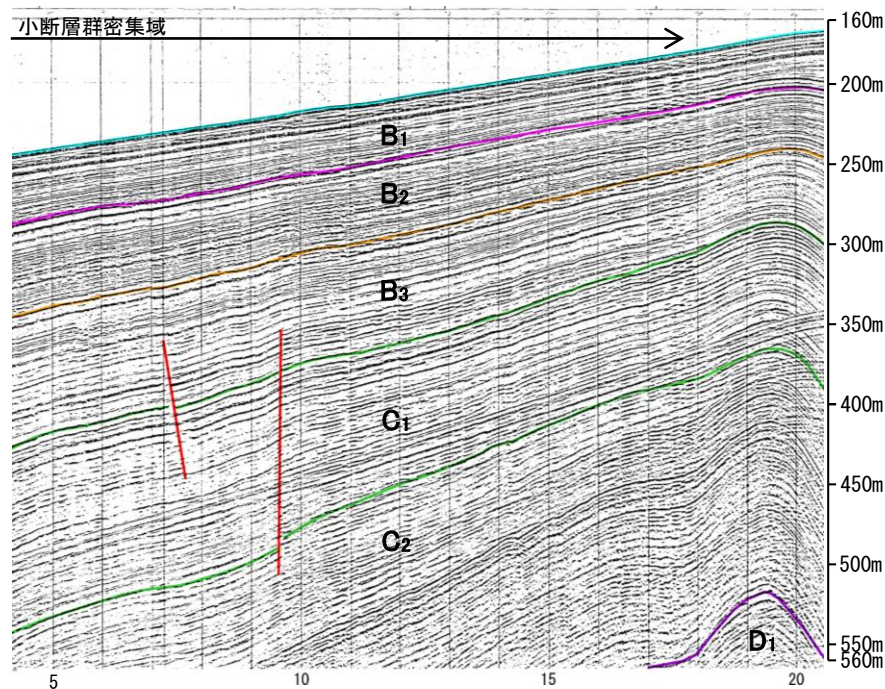
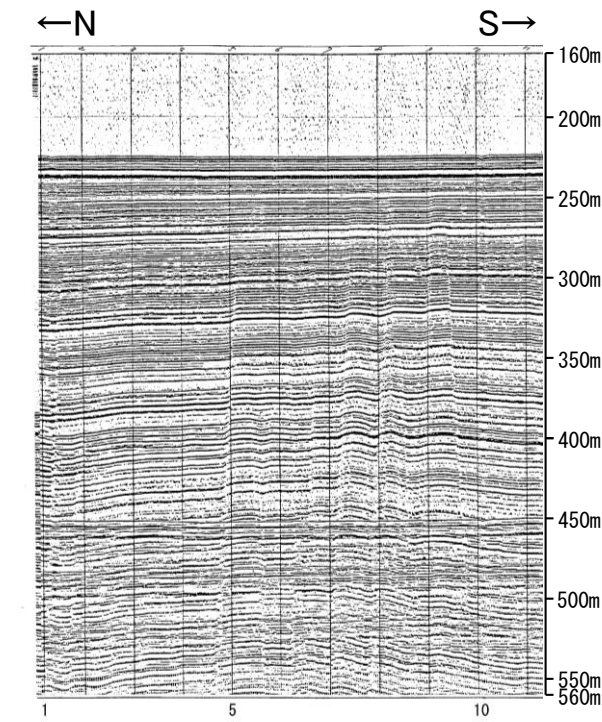
No.9-1測線



No. 102測線



No. 101.5測線



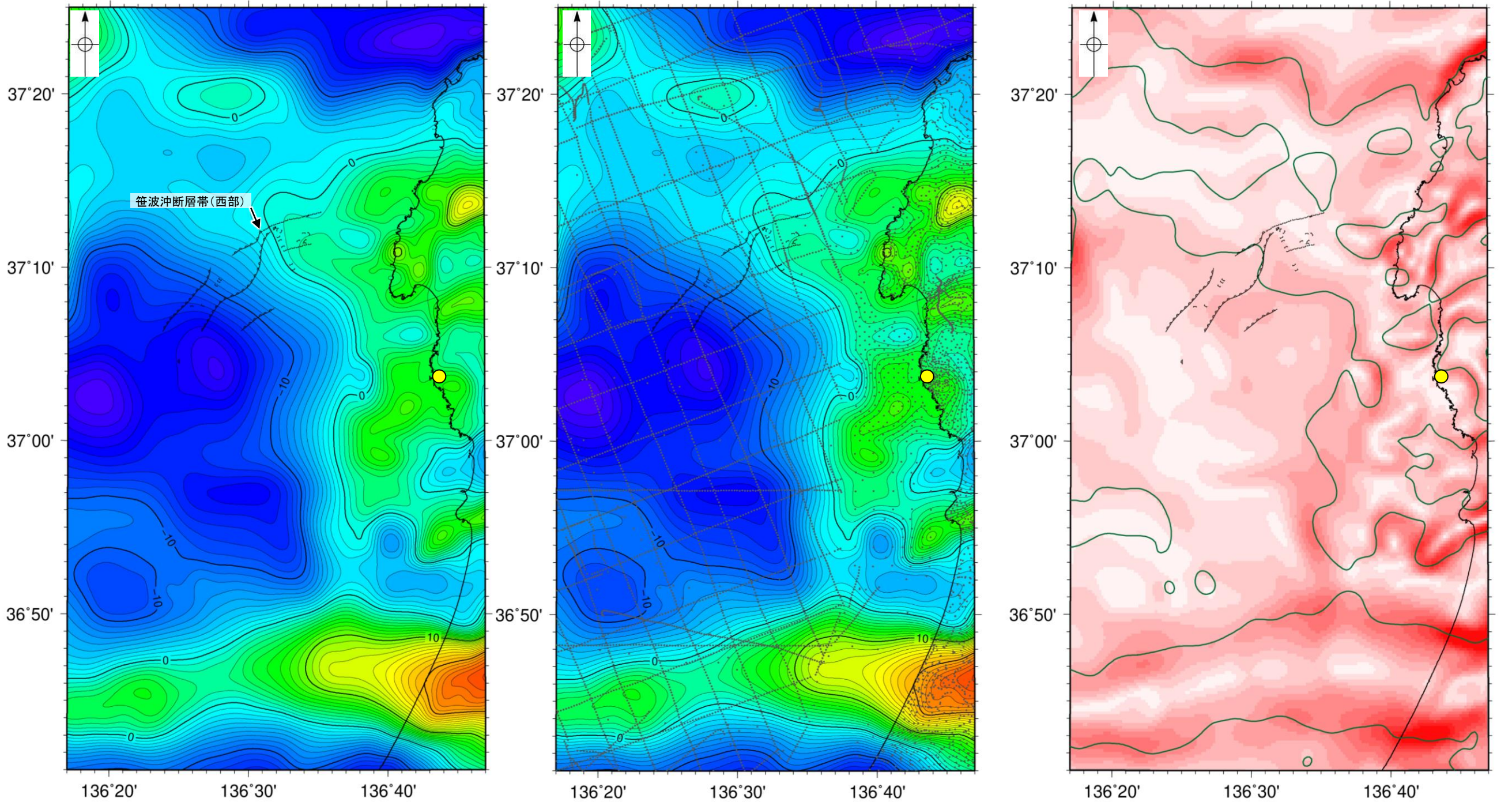
・いずれの測線にも局所的な変形構造に対応する変位、変形は認められない。  
 ・No.9-1測線, No.102測線及びNo.101.5測線に認められるわずかな地層の変位、変形は、小断層群(P.337)であり、隆起運動に伴い、表層付近に生じた局所的な応力により形成されたものと推定され、局所的な変形構造に関連する構造ではないと判断している。



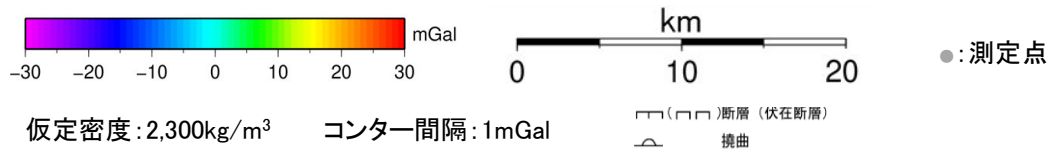
# 2.4.2(7) 笹波沖断層帯(西部)周辺の重力異常

- 笹波沖断層帯(西部)の深部構造を確認するため、ブーゲー異常図及び水平一次微分図を作成した。
- ブーゲー異常図及び水平一次微分図によれば、笹波沖断層帯(西部)に対応するNE-SW走向の重力異常急変部は認められない。

● 志賀原子力発電所

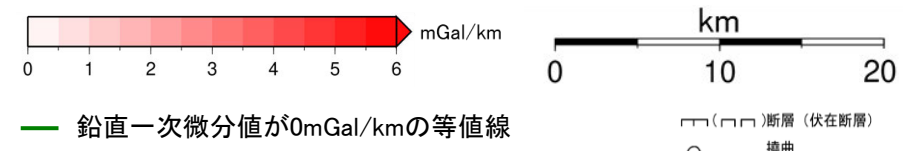


・上図は、陸域は本多ほか(2012), 国土地理院(2006), The Gravity Research Group in Southwest Japan (2001), Yamamoto et al. (2011), Hiramatsu et al. (2019), 澤田ほか(2021), 海域は産業技術総合研究所地質調査総合センター(2013), 石田ほか(2018)を用いて、金沢大学・当社が作成した。



ブーゲー異常図(左図:測定点なし, 右図:測定点あり)

・ブーゲー異常図は、対象とする断層の規模、調査密度を考慮し、平面トレンド成分の除去及び遮断波長4kmのローパスフィルター処理を行っている。



水平一次微分図

・水平一次微分図は、左のフィルター処理後のブーゲー異常図を基に作成した。



## 2.4.2(8) 笹波沖断層帯(東部)と笹波沖断層帯(西部)の連動評価

○文献調査の結果、文科省ほか(2015)は笹波沖断層帯(東部)に対応するNT8と笹波沖断層帯(西部)に対応するNT10を示し、NT8とNT10の連動性を否定するものではないとしている(P.119, 次頁)。

○以下に両断層の連動に関する詳細調査の結果を示す。

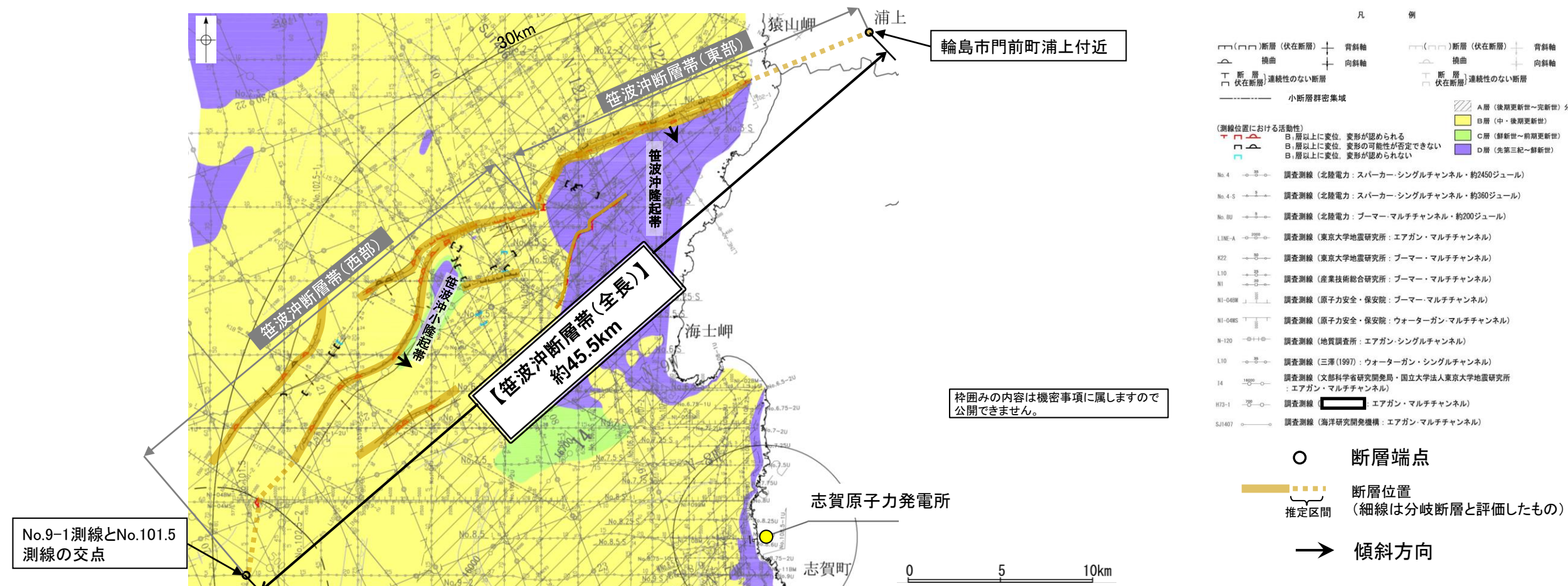
- ・笹波沖断層帯(東部)と笹波沖断層帯(西部)はいずれも南東傾斜(約60°)で、断層面の傾斜方向は同じである(下図, P.116, 117)。
- ・笹波沖断層帯(東部)と笹波沖断層帯(西部)は連続して分布するが、その境界で走向が大きく屈曲する(下図, P.135)。
- ・笹波沖断層帯(東部)は笹波沖隆起帯北縁に分布している断層である。笹波沖断層帯(西部)は笹波沖小隆起帯北縁に沿って断層が分布し、その南西方では断層形態が変わり、笹波沖小隆起帯の北西縁に沿って撓曲群が分布しており、分布する隆起帯が異なるものの、断層が不連続となる箇所に、断層同士を遮るような別の隆起帯が認められない(下図, P.116, 117)。
- ・断層周辺の重力異常を比較した結果、重力異常の等重力線に対して、笹波沖断層帯(東部)の走向はほぼ一致しているが、笹波沖断層帯(西部)の走向はほぼ直交している(P.148)。
- ・佐藤ほか(2007a)によれば、2007年能登半島地震は笹波沖断層帯(東部)の最新活動によるものである。笹波沖断層帯(西部)の最新活動は不明であり、活動履歴が異なる(P.118, 119)。
- ・2007年能登半島地震の震源断層である笹波沖断層帯(東部)の余震活動が笹波沖断層帯(西部)に拡大しているか確認した結果、本震発生から最大余震までの期間に発生した余震の分布は笹波沖断層帯(東部)の範囲に集中しているが、地震発生から約2ヵ月間の余震分布からは、笹波沖断層帯(西部)の北東側にも一部余震の発生が認められる(P.149)。

○上記のうち、文科省ほか(2015)による連動の評価は専門家により詳細に検討された結果であることから、重要な知見と位置づけ、当社の評価に反映する。

○したがって、笹波沖断層帯(東部)と笹波沖断層帯(西部)は連動を考慮し、「笹波沖断層帯(全長)」として走向がNE-SW方向、南東傾斜(約60°)の逆断層と評価した。

○断層長さは、笹波沖断層帯(東部)の北東端(輪島市門前町浦上付近)から笹波沖断層帯(西部)の南西端(No.9-1測線とNo.101.5測線の交点)までの約45.5km区間を評価した。

○なお、連動に関する詳細調査の結果を踏まえると、断層面の傾斜方向が同じであること、両断層が連続して分布していること及び2007年能登半島地震の余震分布が笹波沖断層帯(西部)の北東側にも認められることは、両断層の連動を考慮するとして上記評価と整合する。

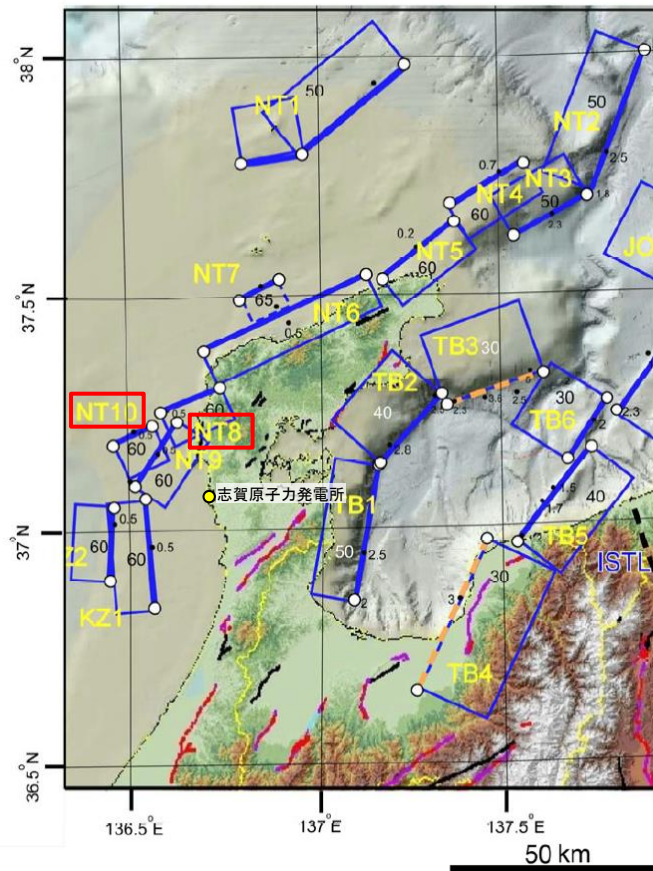


地質図



## 【国による連動評価 ー文献調査ー】

- 笹波沖断層帯(東部)と笹波沖断層帯(西部)の連動に関する文献調査を行った。
- 文科省ほか(2015)は, 笹波沖断層帯(東部)に対応するNT8と笹波沖断層帯(西部)に対応するNT10を示している。NT8とNT10はほぼ同一の走向であるが南にステップすることから, 独立させて記述したとしているが, NT8とNT10の連動性を否定するものではないとしている。
- 一方, 文科省ほか(2016)は, 連動する可能性がある断層の組合せとして, NT8とNT10を選定していない。

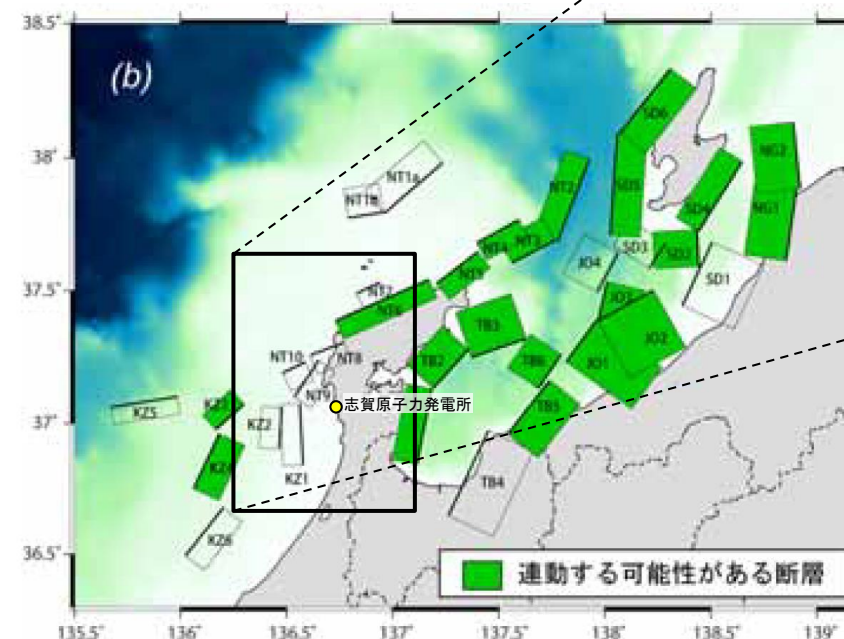


能登半島沖～富山湾周辺の断層矩形モデル  
文科省ほか(2015)に一部加筆

・ 笹波沖断層帯(東部)に対応するNT8と笹波沖断層帯(西部)に対応するNT10に関する記載を, 文科省ほか(2015)から抜粋。

NT8: 岡村(2002)<sup>9)</sup>による。2007年に発生したM6.9の能登半島沖地震の震源断層である。断層の形状は余震分布や制御震源探査によって明らかにされている<sup>14)</sup>。日本海形成時に正断層として形成された傾斜60度の断層であり、能登半島地震の際には右横ずれ成分をもつ逆断層として活動した。

NT10: 岡村ほか(2007)<sup>4)</sup>、井上(2010)<sup>14)</sup>による。佐藤ほか(2007)<sup>5)</sup>の二船式反射法地震探査によって、60度の東傾斜の断層と判断される。断層NT08とは、ほぼ同一の走向であるが南にステップするため、独立させて記述した(図20、21)。NT8との連動性を否定するものではない。



連動する可能性が考えられる21断層(緑色)  
文科省ほか(2016)を編集, 一部加筆



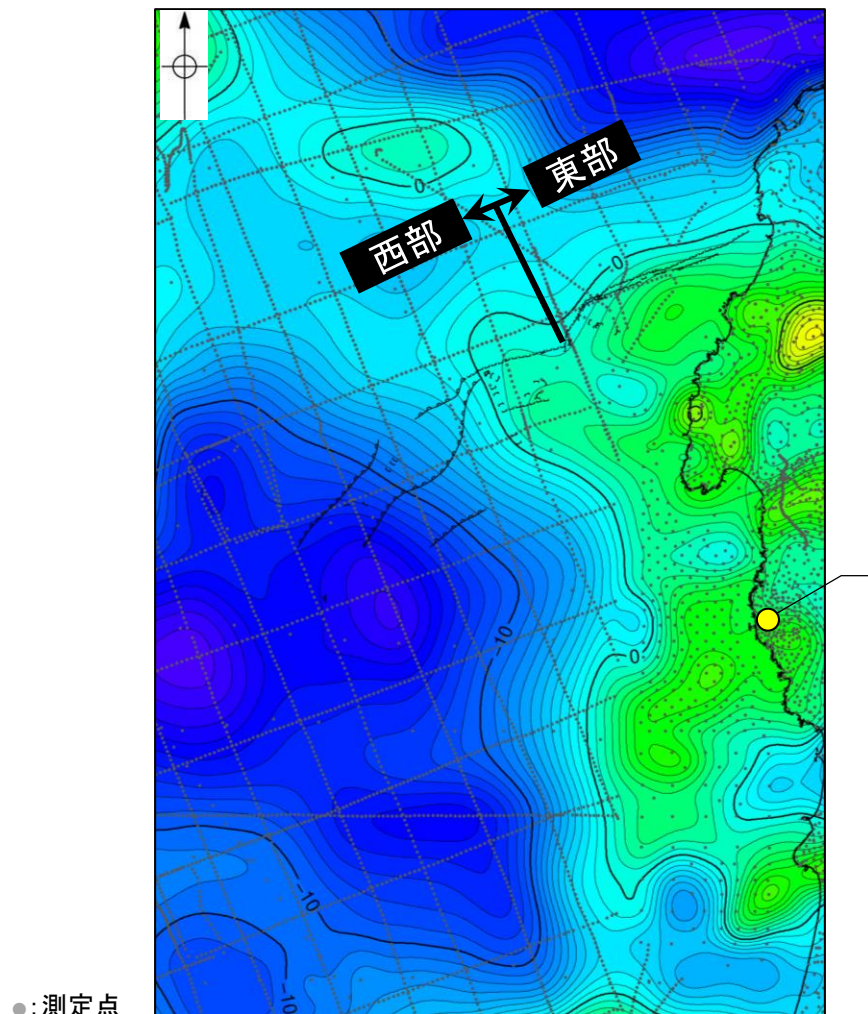
・ 連動する可能性がある断層の組合せとして, NT8とNT10を選定していない。



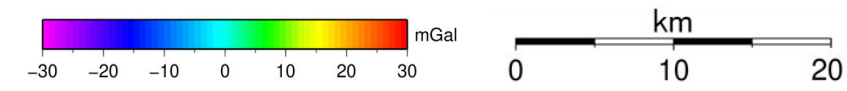
## 【笹波沖断層帯(東部)と笹波沖断層帯(西部)周辺の重力異常】

- 笹波沖断層帯(東部)と笹波沖断層帯(西部)の深部構造を比較するため、断層周辺の重力異常を比較した。
- 重力異常の等重力線に対して、笹波沖断層帯(東部)の走向はほぼ一致しているが、笹波沖断層帯(西部)の走向はほぼ直交しており、両断層で重力異常の連続性は認められない。

・右図は、陸域は本多ほか(2012)、国土地理院(2006)、The Gravity Research Group in Southwest Japan (2001)、Yamamoto et al. (2011)、Hiramatsu et al. (2019)、澤田ほか(2021)、海域は産業技術総合研究所地質調査総合センター(2013)、石田ほか(2018)を用いて、金沢大学・当社が作成した。



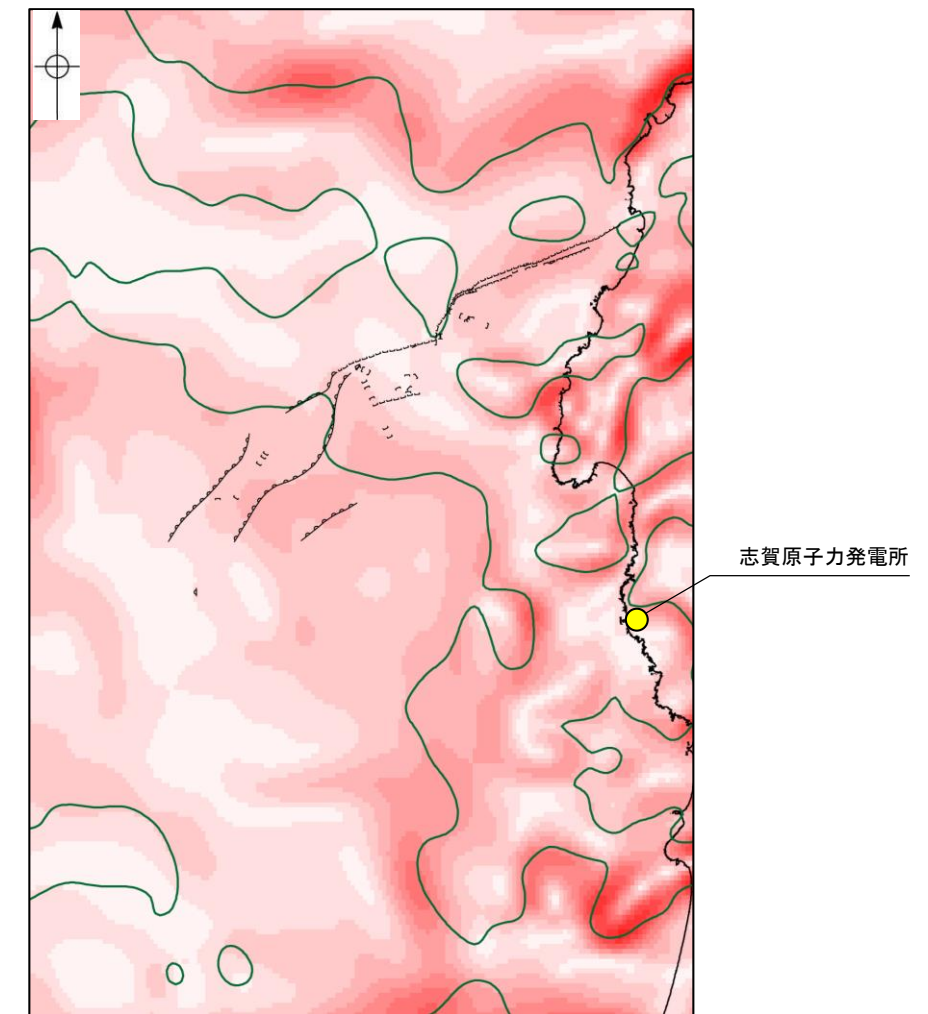
●: 測定点



仮定密度: 2,300kg/m<sup>3</sup>    コンター間隔: 1mGal    ( ) 断層 (伏在断層)    撓曲

ブーゲー異常図

・ブーゲー異常図は、対象とする断層の規模、調査密度を考慮し、平面トレンド成分の除去及び遮断波長4kmのローパスフィルター処理を行っている。



鉛直一次微分値が0mGal/kmの等値線    ( ) 断層 (伏在断層)    撓曲

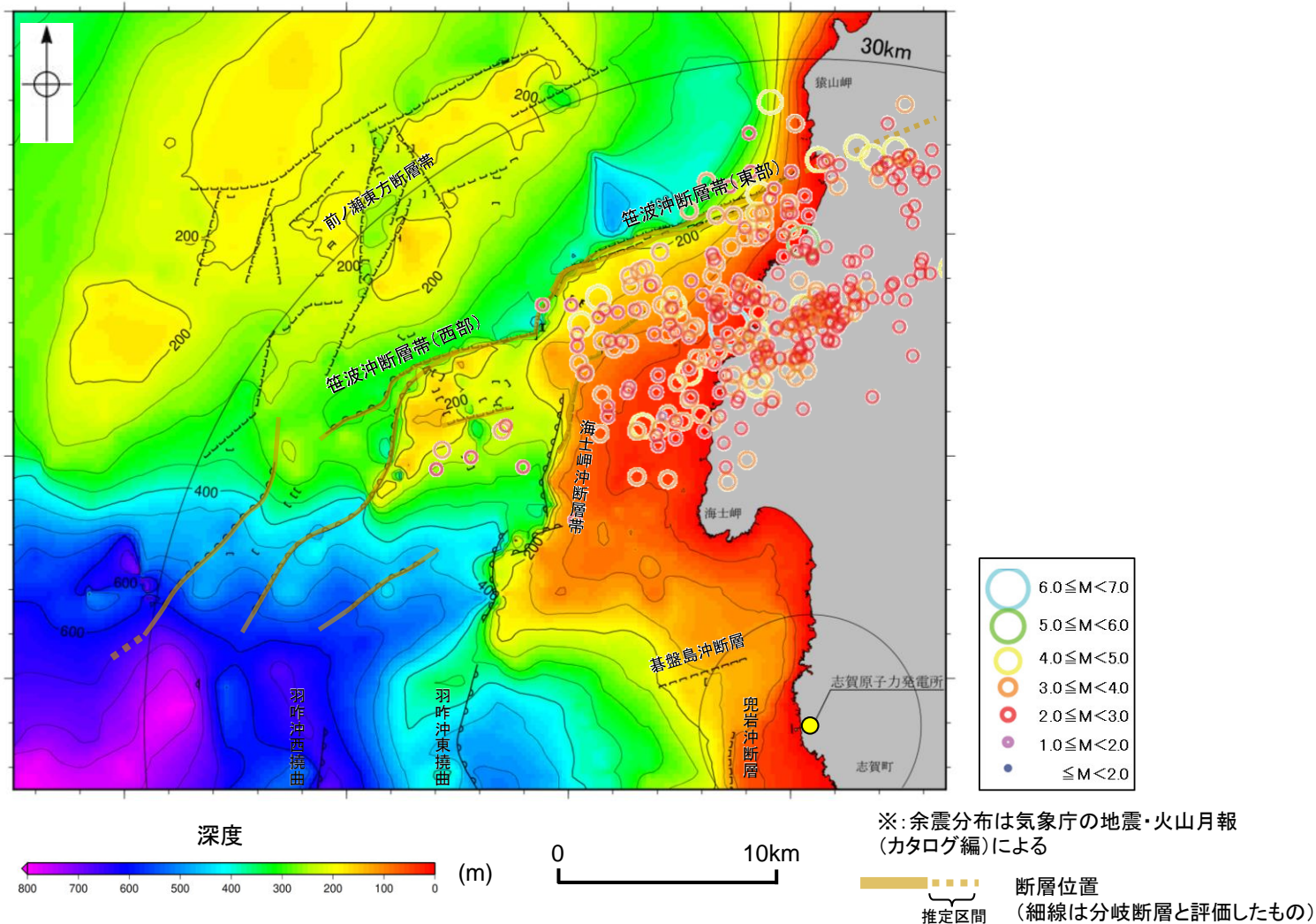
水平一次微分図

・水平一次微分図は、左のフィルター処理後のブーゲー異常図を基に作成した。



## 【笹波沖断層帯(東部)と笹波沖断層帯(西部)周辺の地震活動】

○2007年能登半島地震の震源断層である笹波沖断層帯(東部)の余震活動が笹波沖断層帯(西部)に拡大しているか確認した結果, 本震発生から最大余震までの期間に発生した余震の分布は笹波沖断層帯(東部)の範囲に集中している(左図)が, 地震発生から約2カ月間の余震分布(Yamada et al.(2008))からは, 笹波沖断層帯(西部)の北東側にも一部余震の発生が認められる(右図)。



・上図は, 澤田ほか(2022)を基に, 金沢大学・当社が作成したものである。  
 ・D<sub>2</sub>層の補間処理にあたっては, 水深, Q層(A層+B層), C層, D<sub>1</sub>層, D<sub>2</sub>層の地層境界深度データから, 各層の厚さ分布を作成し, GMT(The Generic Mapping Tools)のsurfaceコマンド(Smith and Wessel, 1990)を使用し, 隣接する測線の層厚情報を用いて計算を行った。  
 ・D層の上面深度0mの位置は, D層に対応する陸域の地質境界線を0mとした。

### D層等深線図

(音波探査測線, 余震分布※(H19.3.25 18:11最大余震前まで)等を加筆)

・本震発生から最大余震までの期間に発生した余震の分布は笹波沖断層帯(東部)の範囲に集中している。

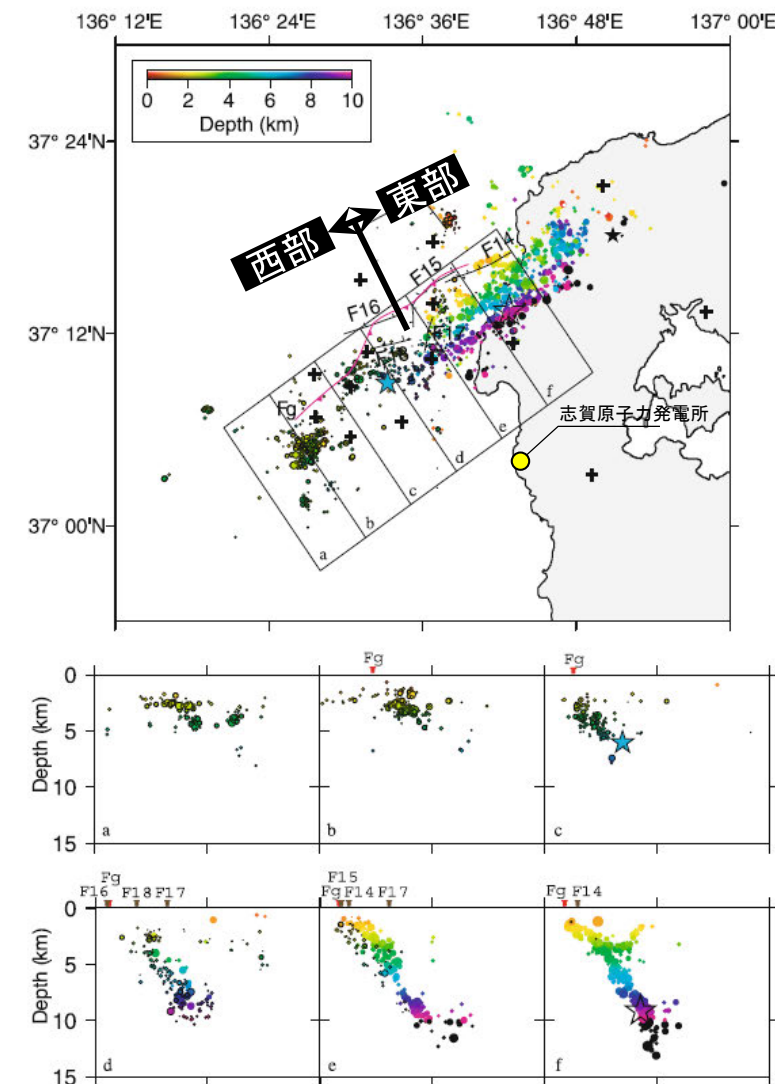


Fig. 6. Comparison between surface traces of active faults revealed by a previous marine survey (Katagawa *et al.*, 2005; Okamura, 2008) and the hypocenter distribution, which is a combined result by a temporal land seismic network (Sakai *et al.*, 2008) and our results. Size of circles corresponds to magnitude, and focal depths are distinguished by a color code. Crosses indicate positions of seismic stations. Upper: Distribution of epicenters of the aftershocks. Black lines named as F14, F15, F16 show active faults by Katagawa *et al.* (2005), and pink line shows active faults by Okamura (2008). Open and solid black stars indicate epicenter of the mainshock and a largest aftershock in onshore region determined by Sakai *et al.* (2008), respectively. Blue star denotes relocated the epicenter of the largest aftershock in offshore region. Lower: Depth distributions of the hypocenters in the rectangles in the upper figure. Brown and red inverted triangles indicate seafloor positions of active faults by Katagawa *et al.* (2005) and Okamura (2008), respectively.

### 余震分布図

(Yamada et al.(2008)に一部加筆)

・臨時陸上地震観測(2007年3月25日~5月末頃, Sakai et al.(2008)), 海底地震観測(2007年4月5日~5月8日, Yamada et al.(2008))による余震分布から, 笹波沖断層帯(西部)の北東側にも一部余震の発生が認められる。



---

### 2.4.3 羽咋沖東撓曲



# 2.4.3 (1) 羽咋沖東撓曲の評価結果

## 【文献調査】(P.152)

- 岡村(2007a)は、N-S方向に、第四紀向斜軸・背斜軸を図示し、ハーフグラベンが隆起した盆地反転構造であり、背斜構造の形状から、東翼基部に西傾斜の第四紀逆断層が伏在すると推定している。
- 国交省ほか(2014)は、羽咋沖東撓曲に対応する位置に、長さが26.0km、西傾斜の逆断層として、津波断層モデルF46を設定している。
- 文科省ほか(2015)は、羽咋沖東撓曲に対応する位置に震源断層モデルとしてKZ1(走向:177度、傾斜:60度、断層長さ:25.8km)を設定している。

紫字: 第1144回審査会合以降に変更した箇所

## 【活動性評価】

- 羽咋沖東撓曲は、東翼が急傾斜で幅が狭く、西翼が緩傾斜で幅が広い非対称な褶曲構造である(P.153)。
- 海上音波探査の結果、B<sub>1</sub>層、B<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層、C<sub>1</sub>層、C<sub>2</sub>層、D<sub>1</sub>層及びD<sub>2</sub>層に東落ちの変形が認められることから撓曲を推定し、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められると判断した(P.154~157)。

→羽咋沖東撓曲は、文献調査の結果、岡村(2007a)等から西傾斜(約60°)の逆断層と推定され、海上音波探査の結果からも、西傾斜の逆断層が伏在することが推定される。

⇒文献調査及び海上音波探査の結果、羽咋沖東撓曲は、走向がN-S方向、西傾斜(約60°)の逆断層と推定され、後期更新世以降の活動が否定できないと評価。

## 【長さの評価】

### ■北端(P.158, 159)

#### 【海上音波探査】

- K18測線において、羽咋沖東撓曲を示唆するような変位、変形は認められない。
- K18測線のさらに北方のNo.7測線には、海士岬沖断層帯に対応する変形は認められるが、羽咋沖東撓曲を示唆するような変位、変形は認められない。

→K18測線を北端と評価。

### ■南端(P.160, 161)

#### 【海上音波探査】

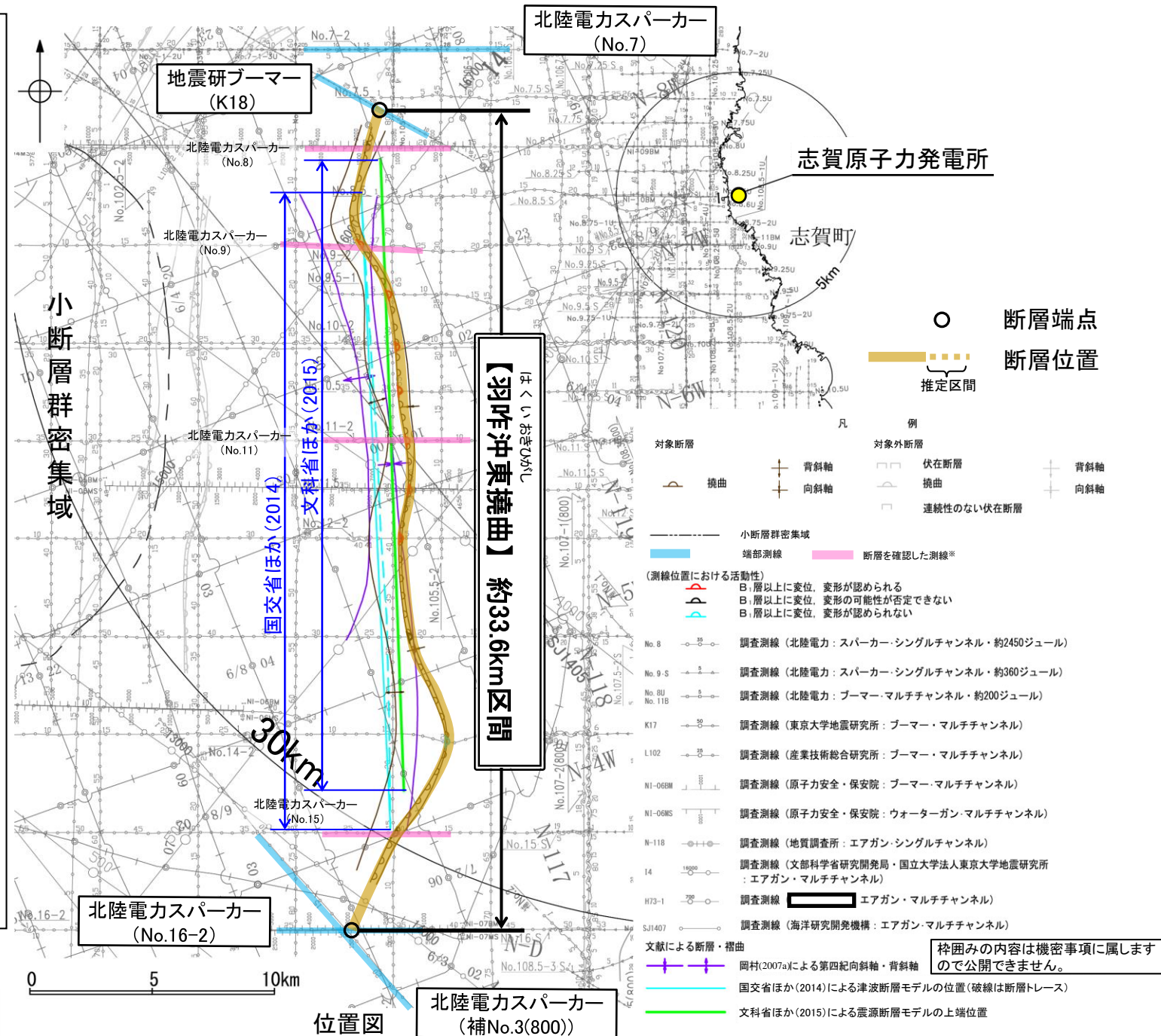
- No.16-2測線、補No.3(800)において、いずれの地層にも断層等を示唆するような変位、変形は認められない。

→No.16-2測線を南端と評価。

### ■重力探査(P.162)

- 重力異常の急変部は、海上音波探査で推定された羽咋沖東撓曲にほぼ対応している。

⇒K18測線(北端)からNo.16-2測線(南端)までの約33.6km区間を評価。

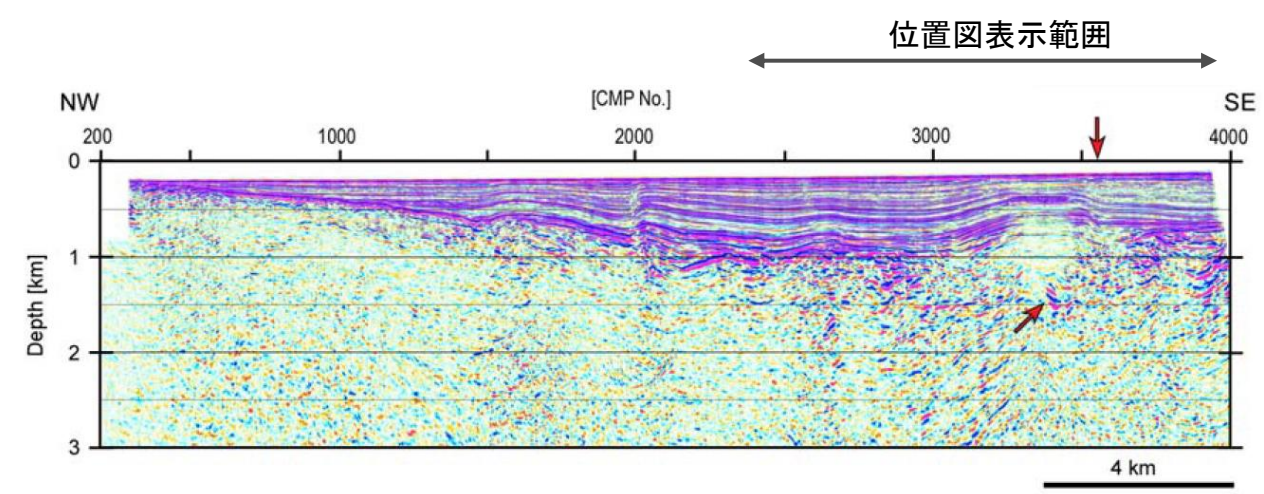
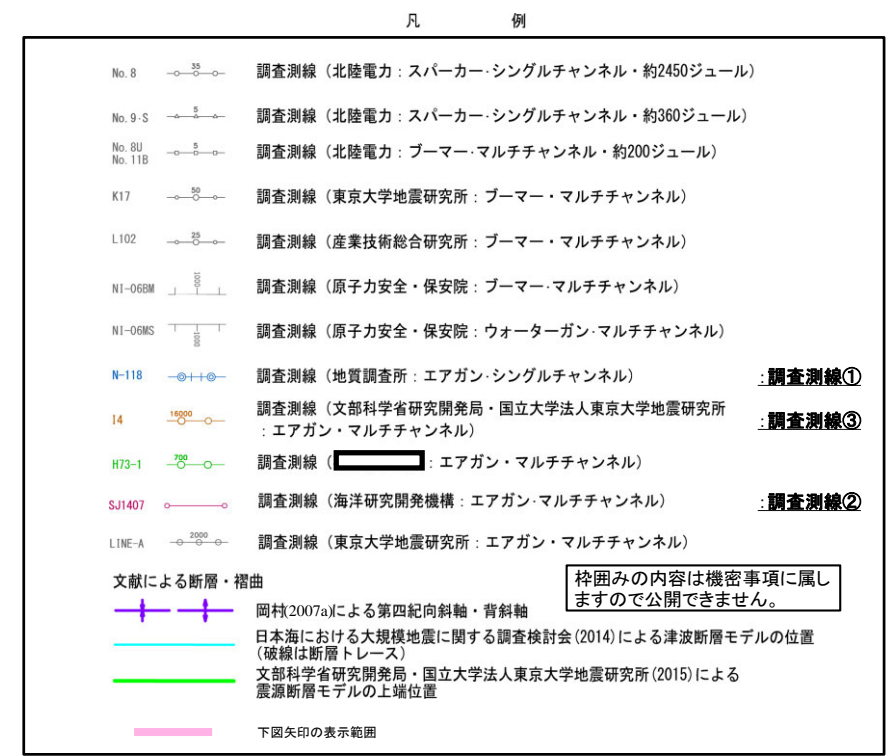
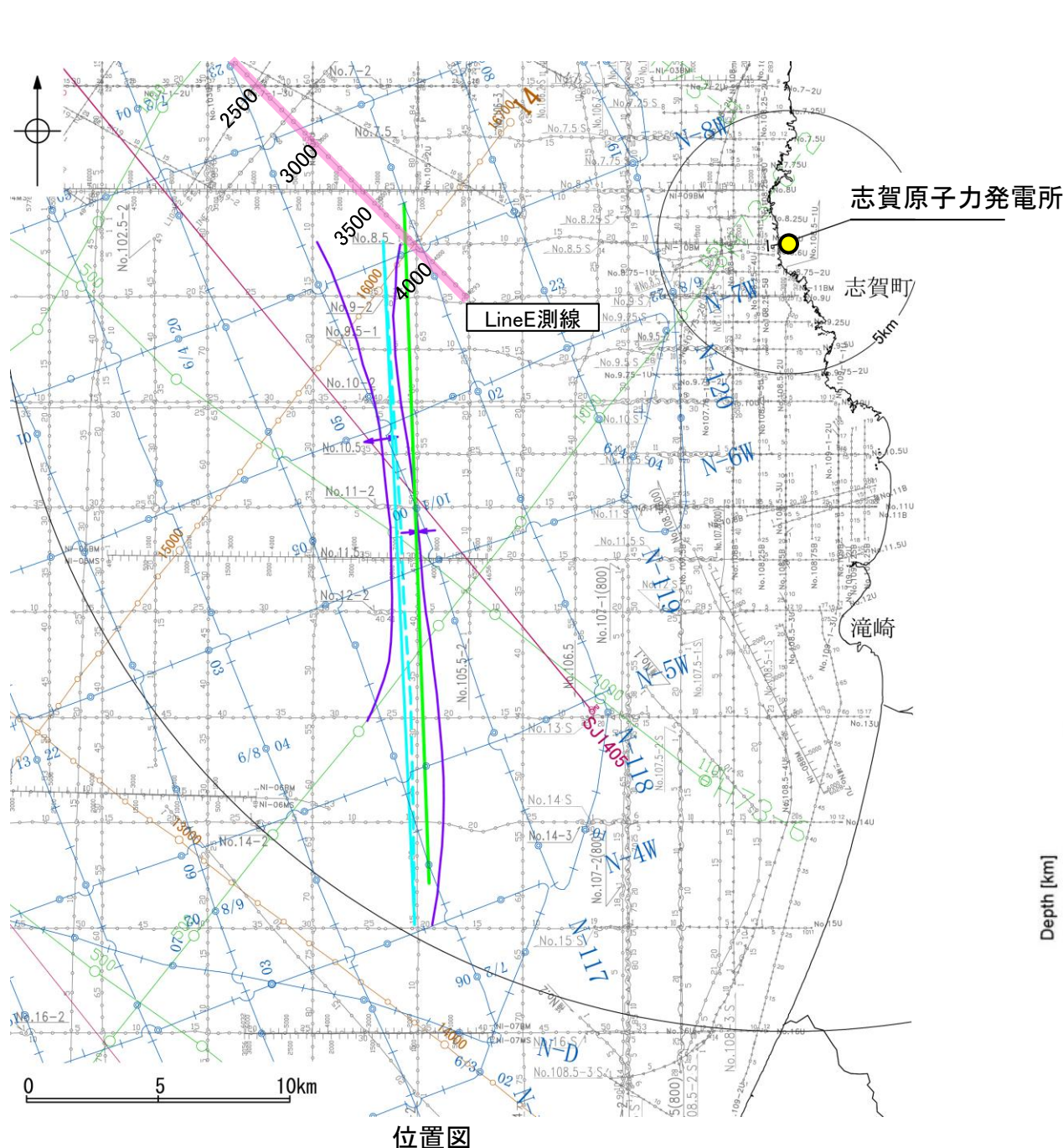


羽咋沖東撓曲は後期更新世以降の活動が否定できず、その長さとして約33.6km区間を評価する。



## 2.4.3 (2) 羽咋沖東撓曲の文献調査

- 岡村(2007a)は、産業技術総合研究所(旧地質調査所)による調査(調査測線①)から、N-S方向に、第四紀向斜軸・背斜軸を図示し、これらはかつてのハーフグラベンが隆起した盆地反転構造であり、背斜構造の形状から、東翼基部に西傾斜の第四紀逆断層が伏在すると推定している。また、岡村(2007b)は、この逆断層について、かつての正断層が逆断層として再活動した可能性が高いと記載している。
- 国交省ほか(2014)は、産業技術総合研究所による調査(調査測線①)及び海洋研究開発機構による調査結果(調査測線②)から、羽咋沖東撓曲に対応する位置に、断層モデルとしてF46(走向:177度、傾斜:60度、断層長さ:26.0km)を設定し、西傾斜の逆断層としている。
- 文科省ほか(2015)は、文科省ほか(2014)による調査(調査測線③)の他、産業技術総合研究所による調査(調査測線①)、石油開発公団による調査及び海洋研究開発機構による調査(調査測線②)の結果から、岡村(2007a)及び国交省ほか(2014)が示した構造に対応する位置に、震源断層モデルとしてKZ1(走向:177度、傾斜:60度、断層長さ:25.8km)を設定し、佐藤ほか(2007b)及び佐藤ほか(2014)から見かけ55°の西傾斜の逆断層と判断している。文科省ほか(2021)では、活動性の評価を確実性Cクラス(変形を受けている最新期の地層の年代が第四紀前期である可能性がある)としている。
- その他、桜井ほか(1971)は海上保安庁水路部によって実施された反射法地震探査、田中(1979)は通産省等により実施された反射法地震探査の解釈から、羽咋沖東撓曲の一部区間に断層を図示している。

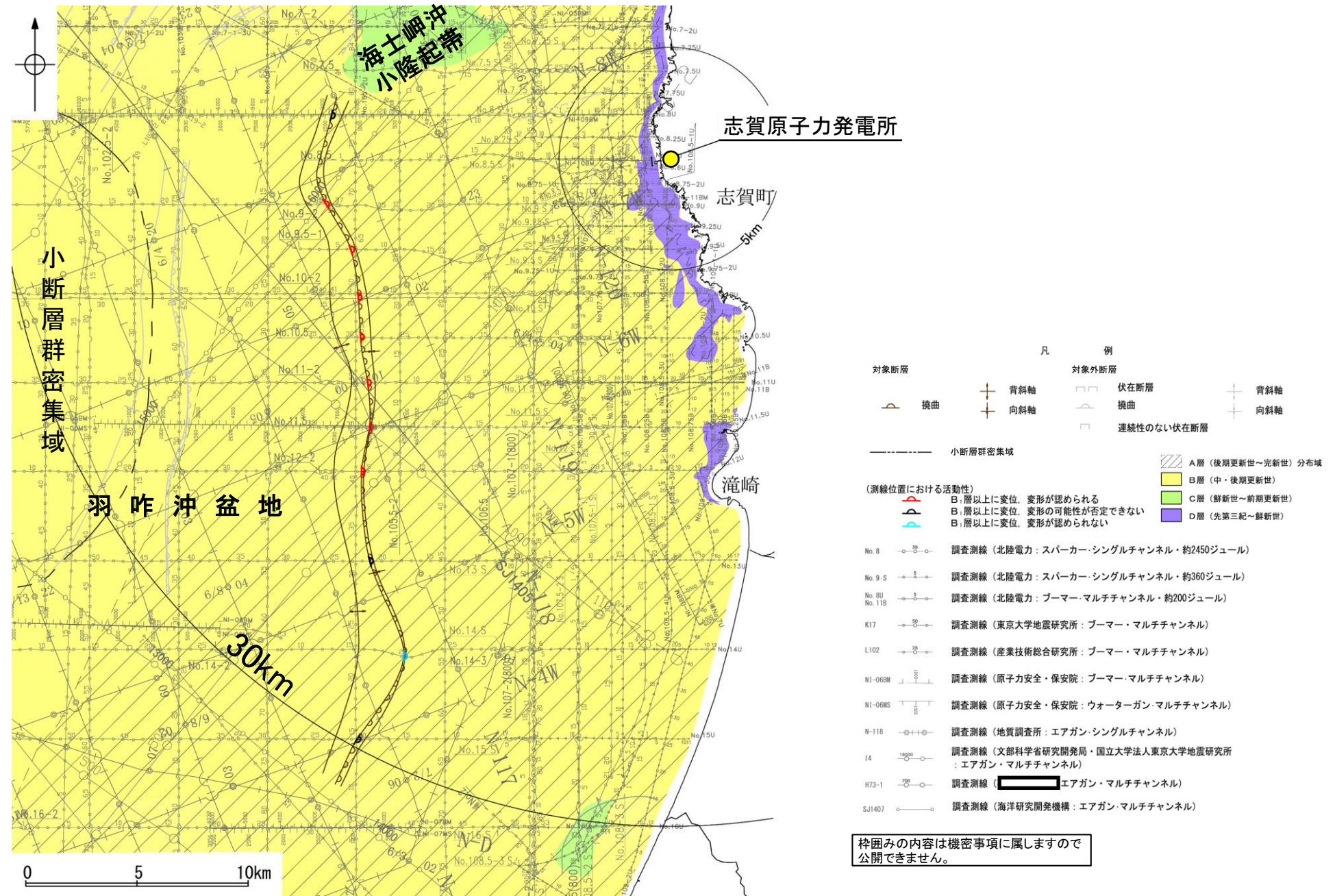


Line E測線 (赤矢印はKZ1とその延長)  
(文科省ほか, 2015)



## 2.4.3 (3) 羽咋沖東撓曲の活動性 –羽咋沖東撓曲周辺の地質図–

- 羽咋沖東撓曲は、羽咋沖盆地(岡村, 2007a)内に分布し、東翼が急傾斜で幅が狭く、西翼が緩傾斜で幅が広い非対称な褶曲構造である。
- 羽咋沖東撓曲周辺には、C層及びB層が厚く堆積し、羽咋沖東撓曲の北端付近には、C層の隆起(海士岬沖小隆起帯)が認められる。

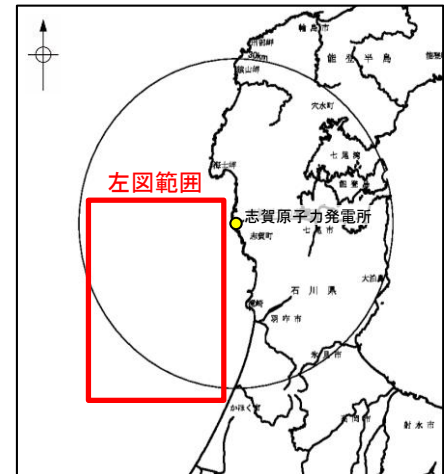
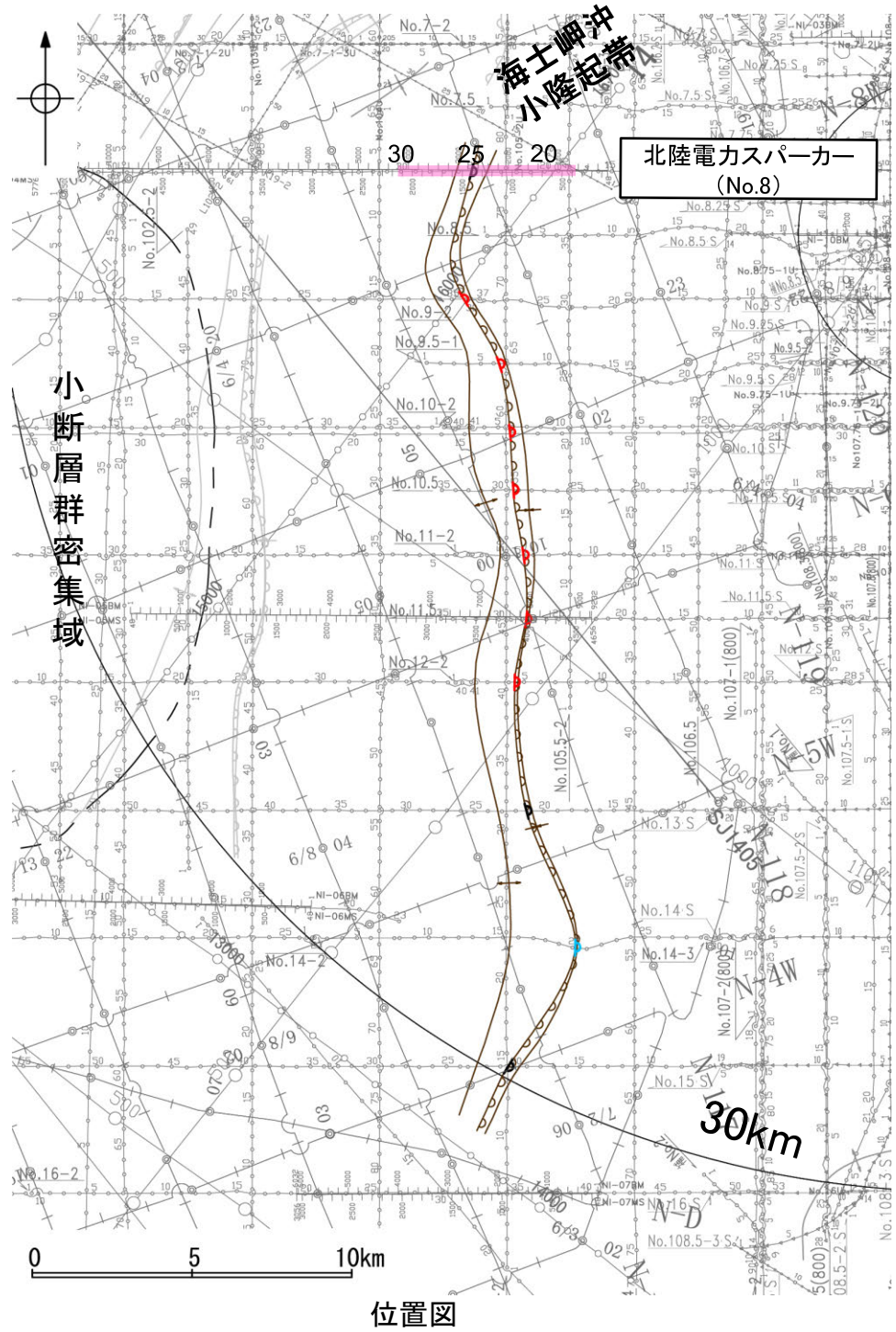


羽咋沖東撓曲周辺の地質図



# 2.4.3 (3) 羽咋沖東撓曲の活動性 —No.8測線—

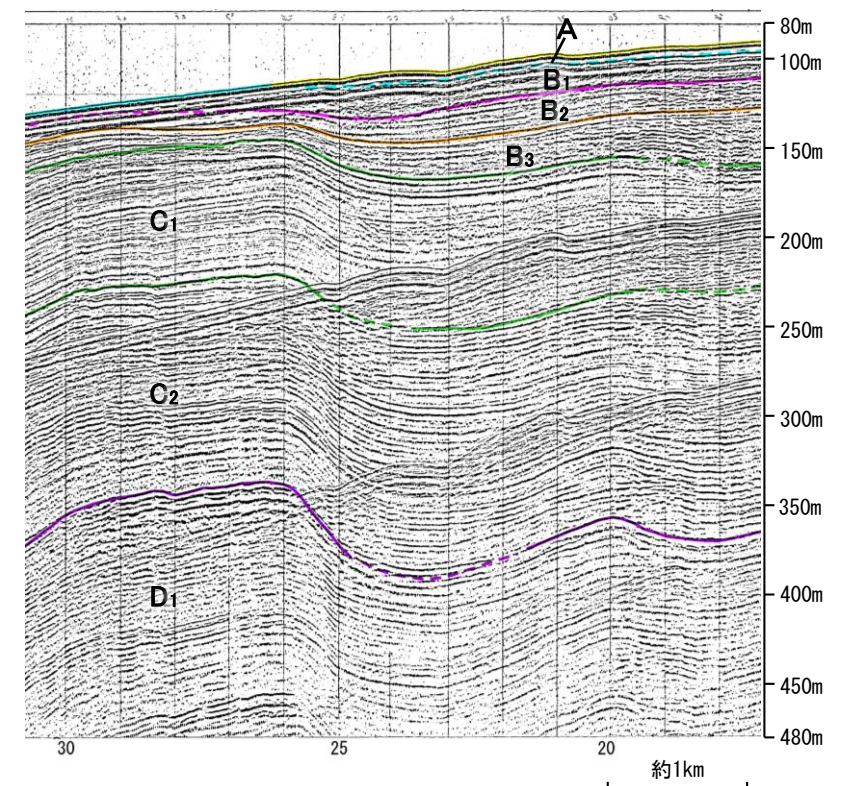
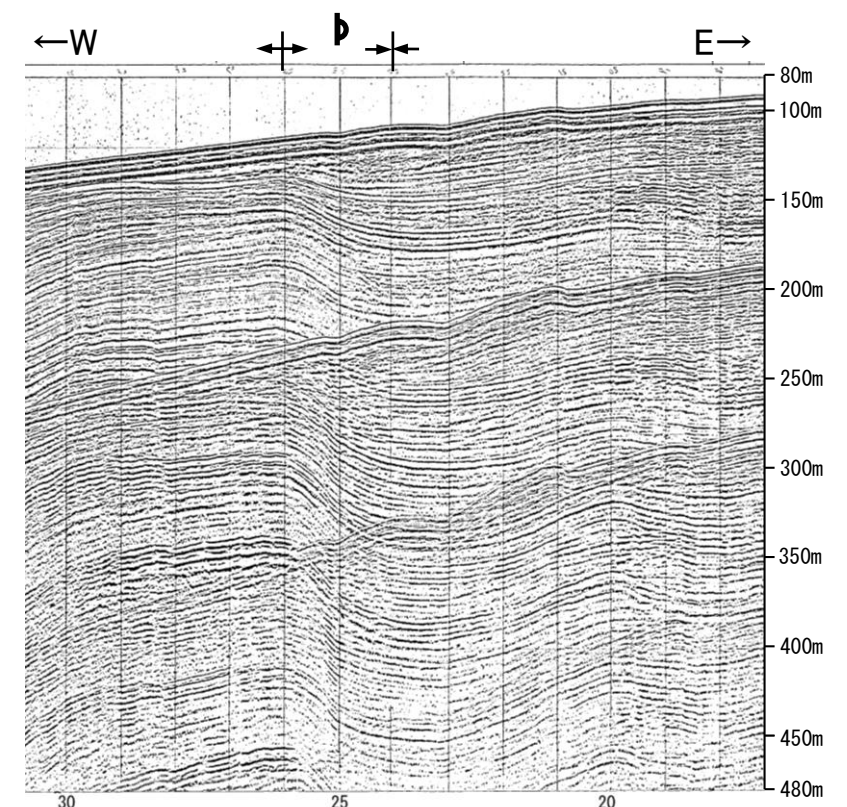
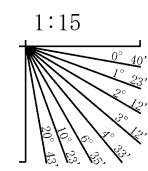
○No.8測線において、測点25付近でB<sub>1</sub>層基底、B<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層、C<sub>1</sub>層、C<sub>2</sub>層及びD<sub>1</sub>層に東落ちの変形が認められることから撓曲を推定した。変位、変形はA層及びB<sub>1</sub>層内部に及んでいないが、B<sub>1</sub>層基底まで変形は及んでいることから、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できないと判断した。



- 凡 例
- 対象断層: 撓曲 (Synclinal fold), 背斜軸 (Anticline axis), 向斜軸 (Syncline axis)
  - 対象外断層: 伏在断層 (Thrust fault), 連続性のない伏在断層 (Discontinuous thrust fault), 背斜軸 (Anticline axis), 向斜軸 (Syncline axis)
  - 小断層群密集域 (Dense fault zone)
  - 右図記録範囲 (Right figure recording range)
- (測線位置における活動性)
- Red arrow: B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる (Displacement and deformation recognized above B<sub>1</sub> layer)
  - Blue arrow: B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない (Displacement and deformation possibility cannot be denied above B<sub>1</sub> layer)
  - Green arrow: B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められない (Displacement and deformation not recognized above B<sub>1</sub> layer)
- 調査測線 (北陸電力: スパーカー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
- 調査測線 (北陸電力: スパーカー・シングルチャンネル・約360ジュール)
- 調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
- 調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
- 調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
- 調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
- 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
- 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
- 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
- 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)
- 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

地質時代		地層名
第四紀	完新世	A層
	後期	B <sub>1</sub> 層
		B <sub>2</sub> 層
		B <sub>3</sub> 層
	中期	C <sub>1</sub> 層
	前期	C <sub>2</sub> 層
第三紀	鮮新世	D <sub>1</sub> 層
	中新世	D <sub>2</sub> 層
古第三紀		D <sub>3</sub> 層
先第三紀		D <sub>4</sub> 層

枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。

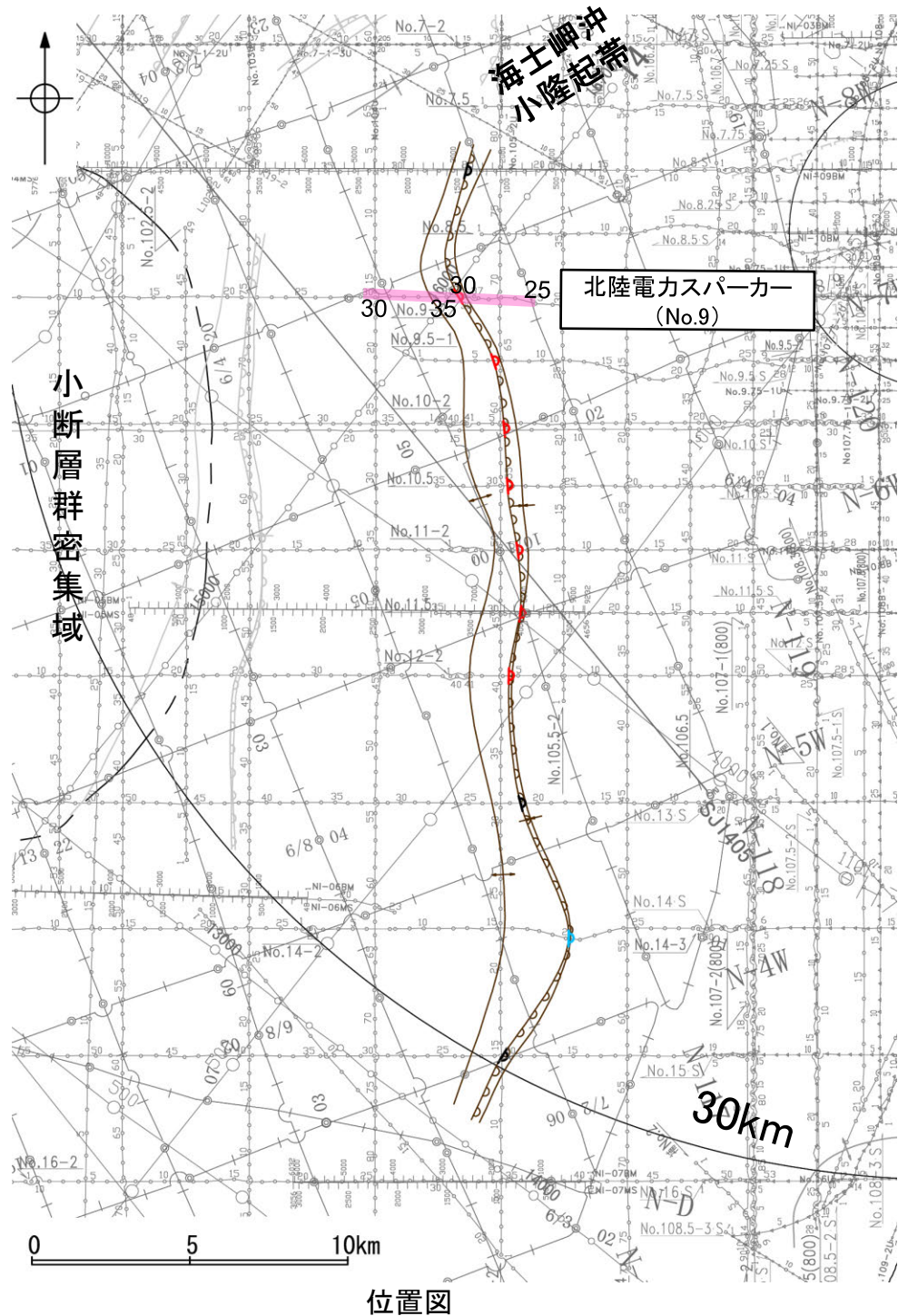




# 2.4.3 (3) 羽咋沖東撓曲の活動性 —No.9測線—

○No.9測線において、測点36付近(No.9-1測線)でB<sub>1</sub>層、B<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層、C<sub>1</sub>層及びC<sub>2</sub>層に東落ちの変形が認められることから撓曲を推定した。変形はA層に及んでいないが、B<sub>1</sub>層まで変形は及んでいることから、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められると判断した。本撓曲は東翼が急傾斜で幅が狭く、西翼が緩傾斜で幅が広い非対称な褶曲であり、西傾斜の逆断層が伏在することが推定される。

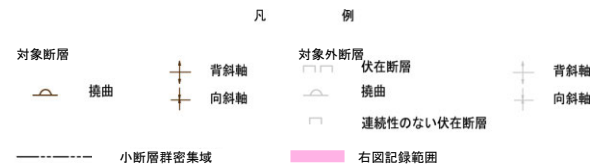
紫字: 第1144回審査会合以降に変更した箇所



位置図



左図範囲

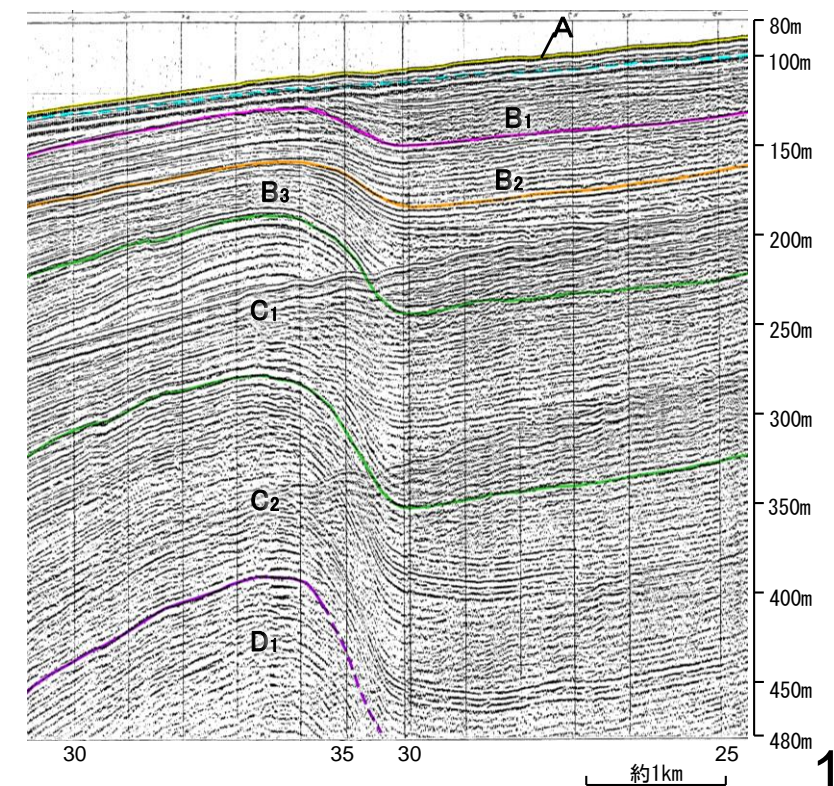
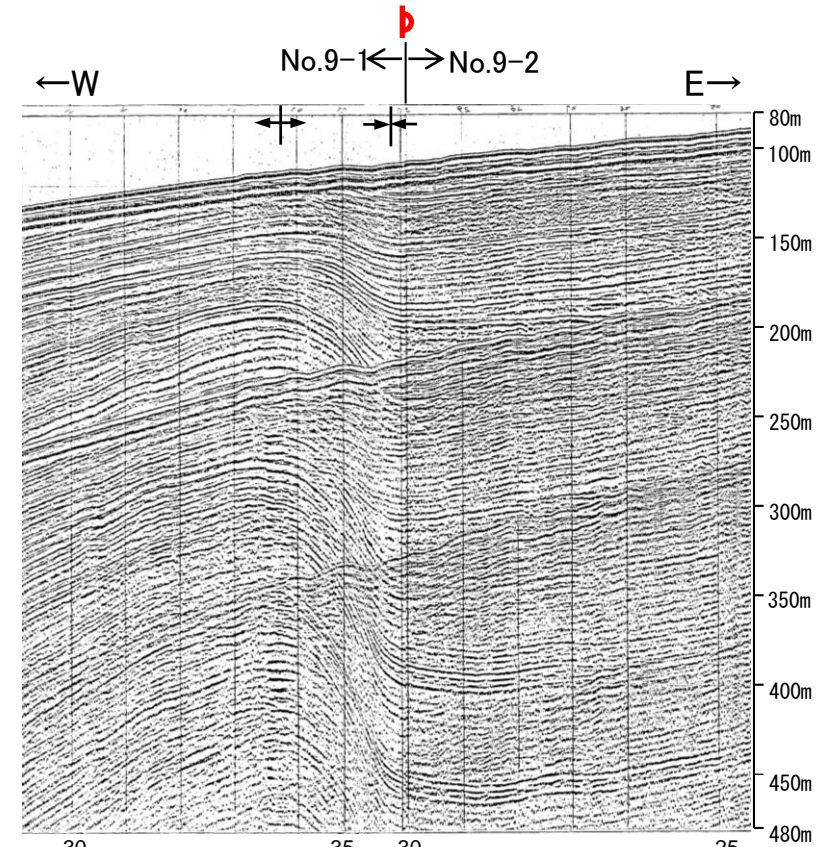
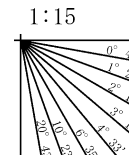


(測線位置における活動性)  
 赤P B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる  
 青P B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない  
 緑P B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められない

- No.8 調査測線 (北陸電力: スーパー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
- No.9-S 調査測線 (北陸電力: スーパー・シングルチャンネル・約360ジュール)
- No.8U No.11B 調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
- K17 調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
- L102 調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
- NI-06BM 調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
- NI-06MS 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
- N-118 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
- 14 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
- H73-1 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)
- SJ1407 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

地質時代	地層名		
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
		前期	B <sub>3</sub> 層
	第三紀	鮮新世	C <sub>1</sub> 層
中新世		C <sub>2</sub> 層	
古第三紀	D層	D <sub>1</sub> 層	
	先第三紀	D層	

枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。

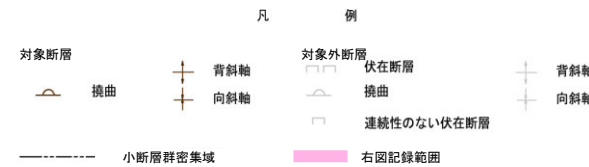
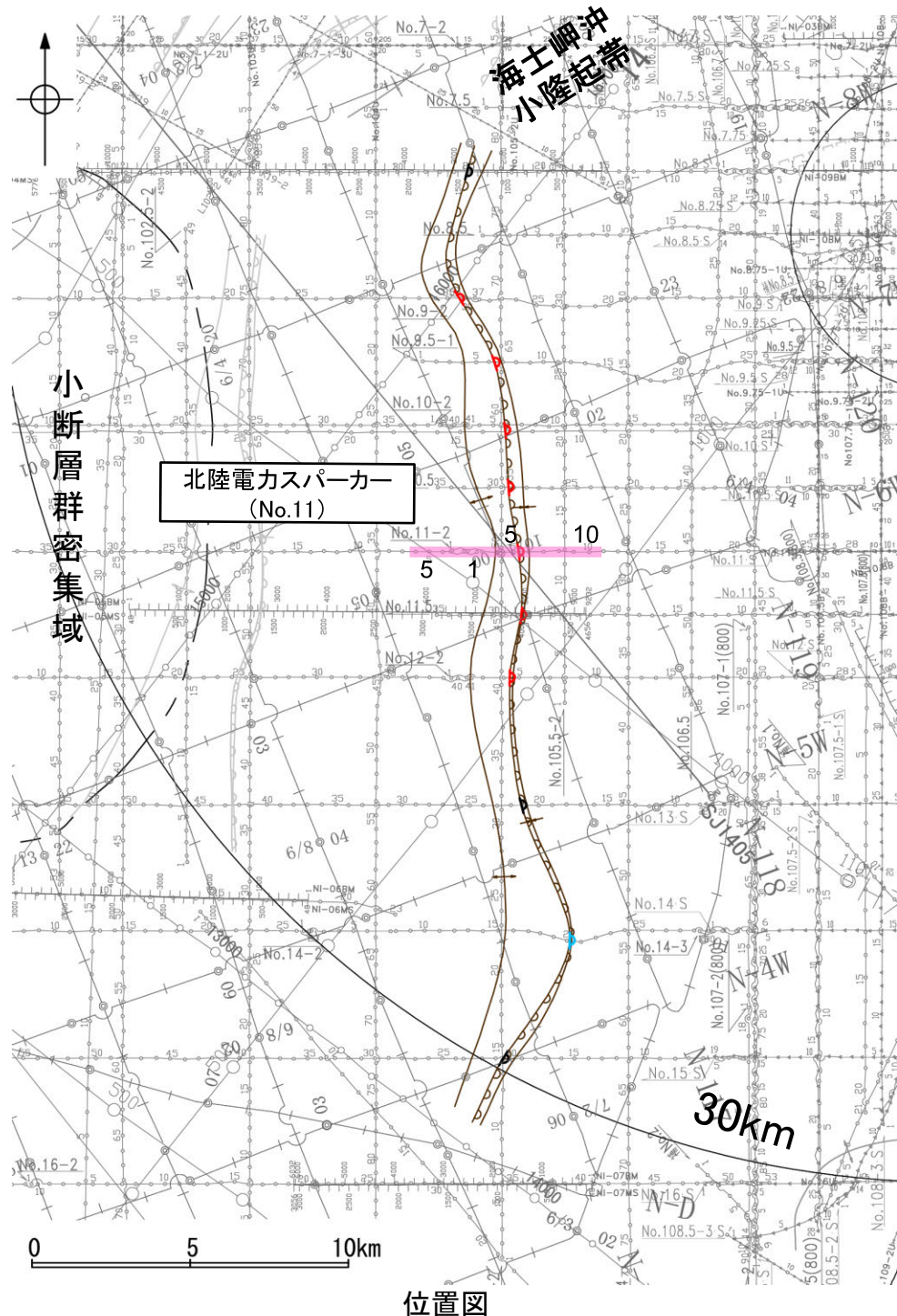




# 2.4.3 (3) 羽咋沖東撓曲の活動性 —No.11測線—

○No.11測線において、測点5付近(No.11-2測線)でB<sub>1</sub>層下部、B<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層、C<sub>1</sub>層及びC<sub>2</sub>層上部に東落ちの変形が認められることから撓曲を推定した。変形はA層及びB<sub>1</sub>層上部に及んでいないが、B<sub>1</sub>層下部まで変形は及んでいることから、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められると判断した。本撓曲は東翼が急傾斜で幅が狭く、西翼が緩傾斜で幅が広い非対称な褶曲であり、西傾斜の逆断層が伏在することが推定される。

紫字: 第1144回審査会合以降に変更した箇所



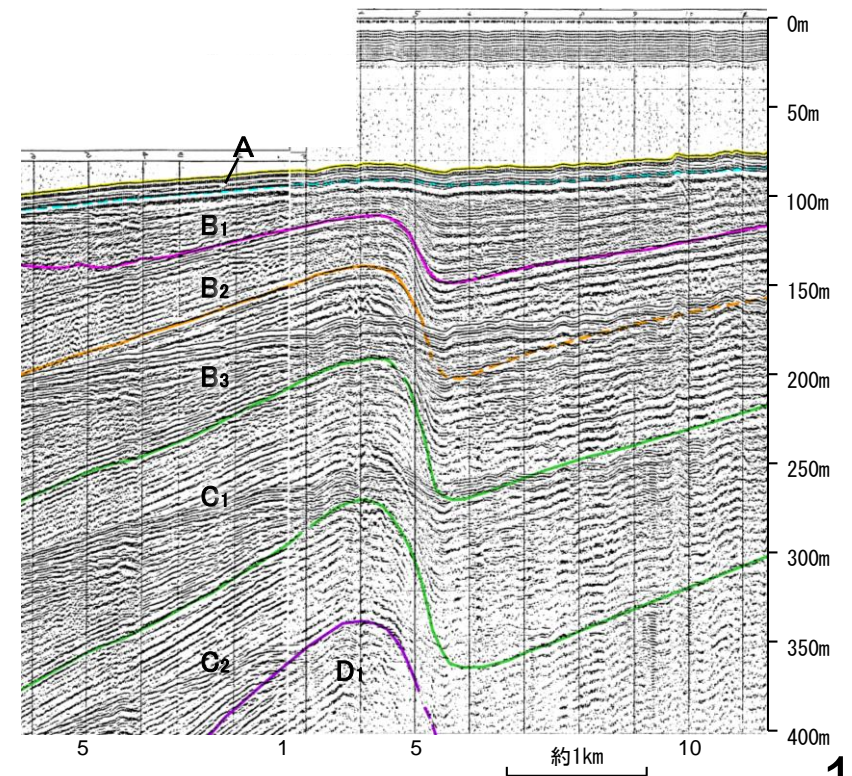
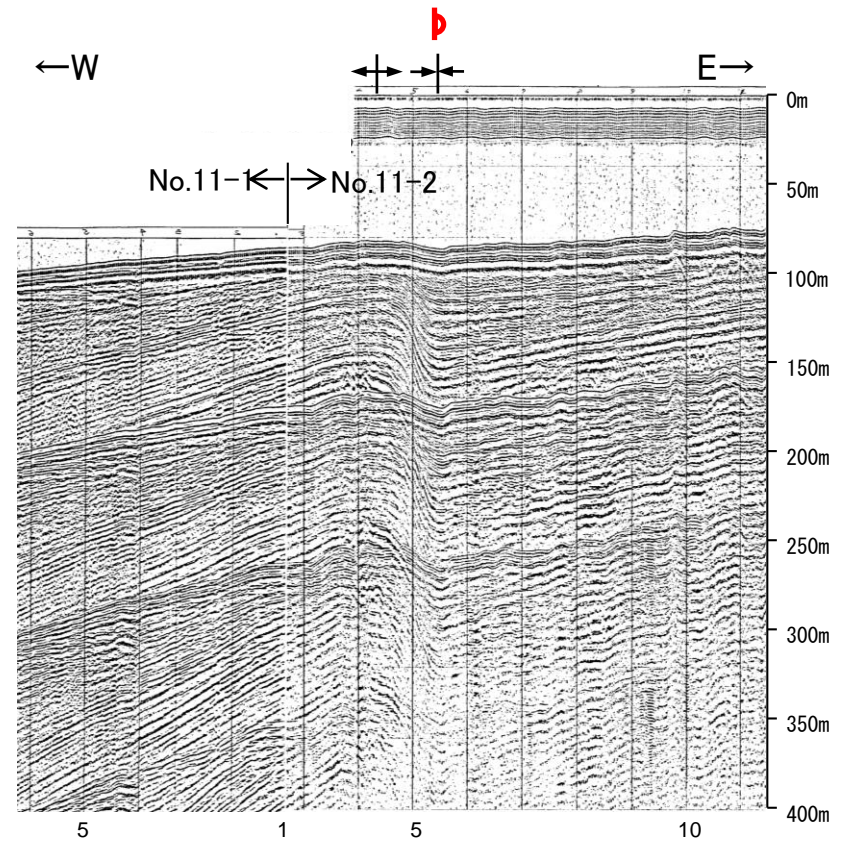
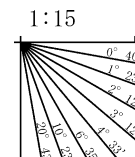
(測線位置における活動性)

- 赤いP: B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる
- 青いP: B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない
- 黒いP: B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められない

- No. 8: 調査測線 (北陸電力: スパーカー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
- No. 9-S: 調査測線 (北陸電力: スパーカー・シングルチャンネル・約360ジュール)
- No. 8U・No. 11B: 調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
- K17: 調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
- L102: 調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
- NI-06BM: 調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
- NI-06MS: 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
- N-118: 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
- 14: 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
- H73-1: 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)
- SJ1407: 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

地質時代		地層名	
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
		前期	B <sub>3</sub> 層
	鮮新世	C <sub>1</sub> 層	
		C <sub>2</sub> 層	
中新世	D <sub>1</sub> 層		
古第三紀	D <sub>2</sub> 層		
先第三紀	D <sub>3</sub> 層		

枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。

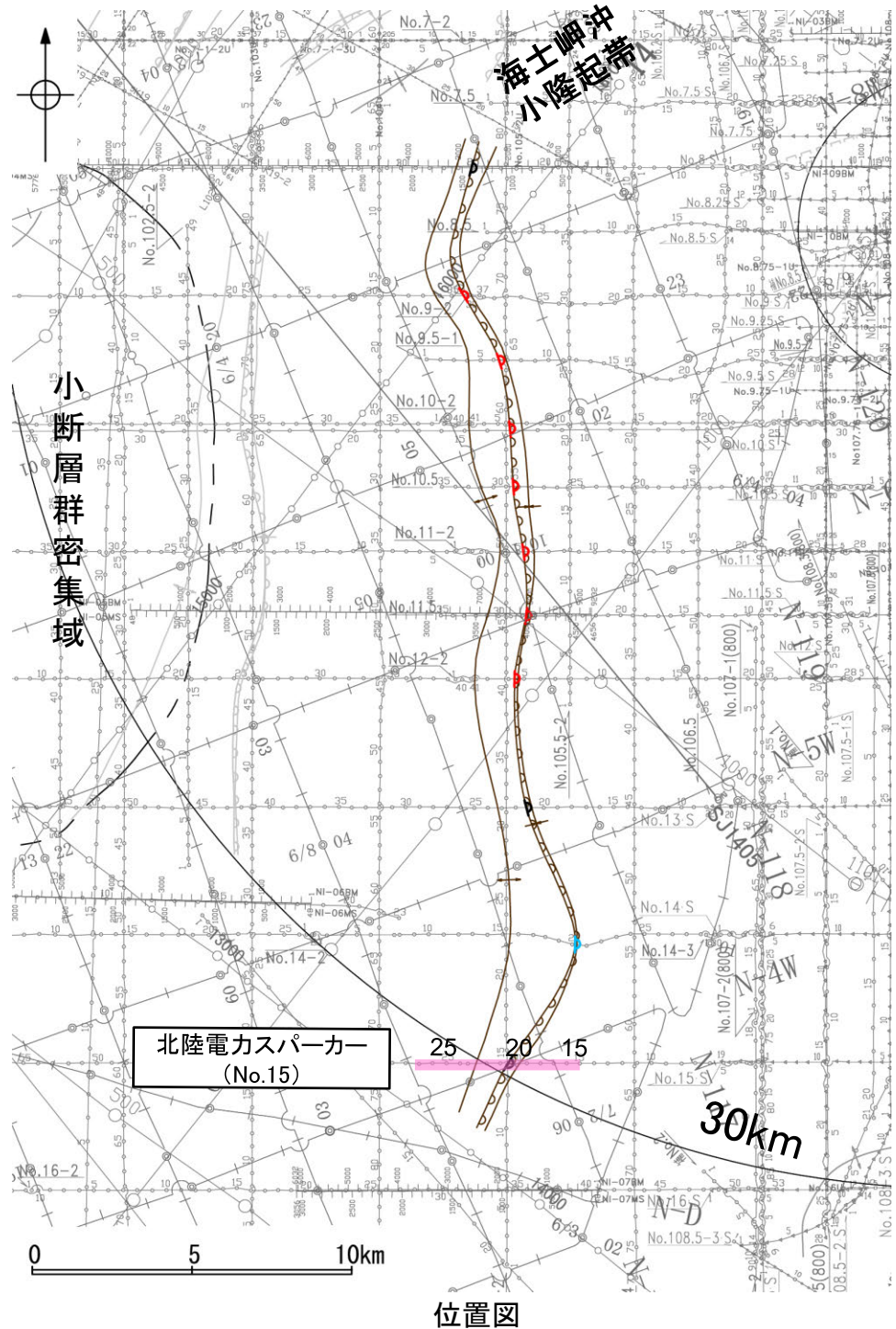




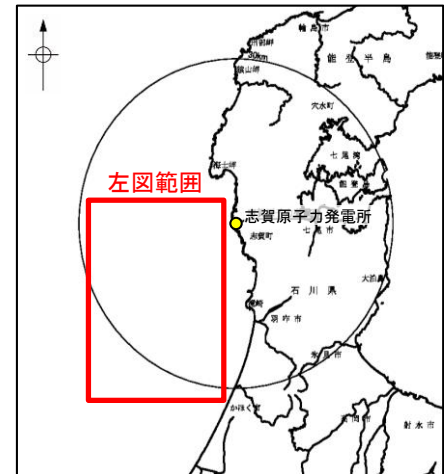
# 2.4.3 (3) 羽咋沖東撓曲の活動性 —No.15測線—

○No.15測線において、測点20付近でB<sub>1</sub>層基底、B<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層、C<sub>1</sub>層、C<sub>2</sub>層及びD<sub>2</sub>層に東落ちの変形が認められることから撓曲を推定した。変形はA層及びB<sub>1</sub>層内部に及んでいないが、B<sub>1</sub>層基底まで変形は及んでいることから、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できないと評価した。本撓曲は東翼が急傾斜で幅が狭く、西翼が緩傾斜で幅が広い非対称な褶曲であり、西傾斜の逆断層が伏在することが推定される。

紫字: 第1144回審査会合以降に変更した箇所



位置図

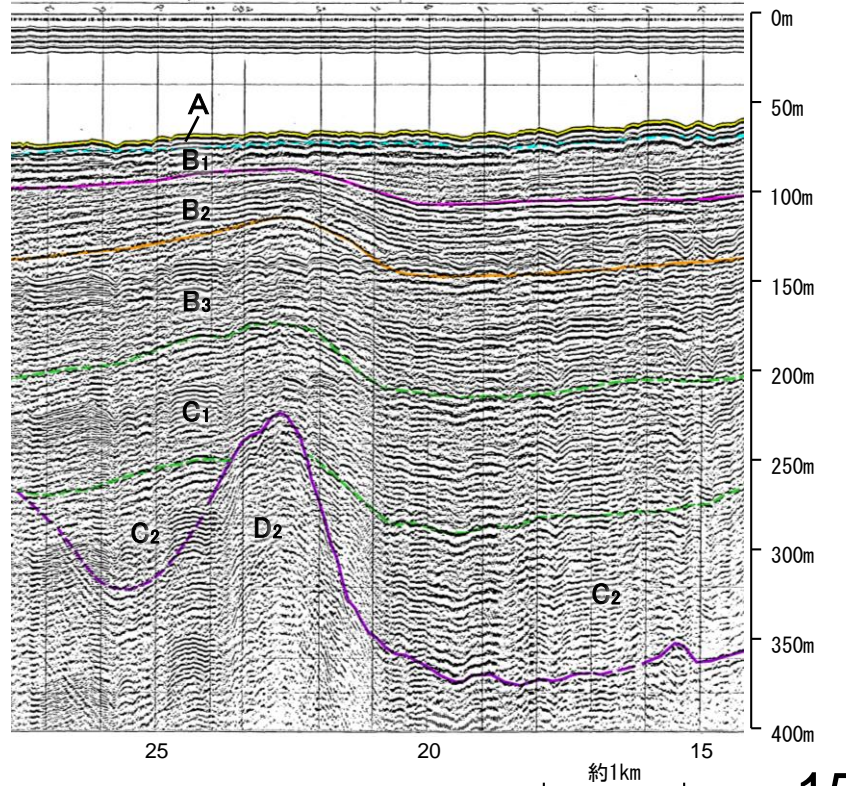
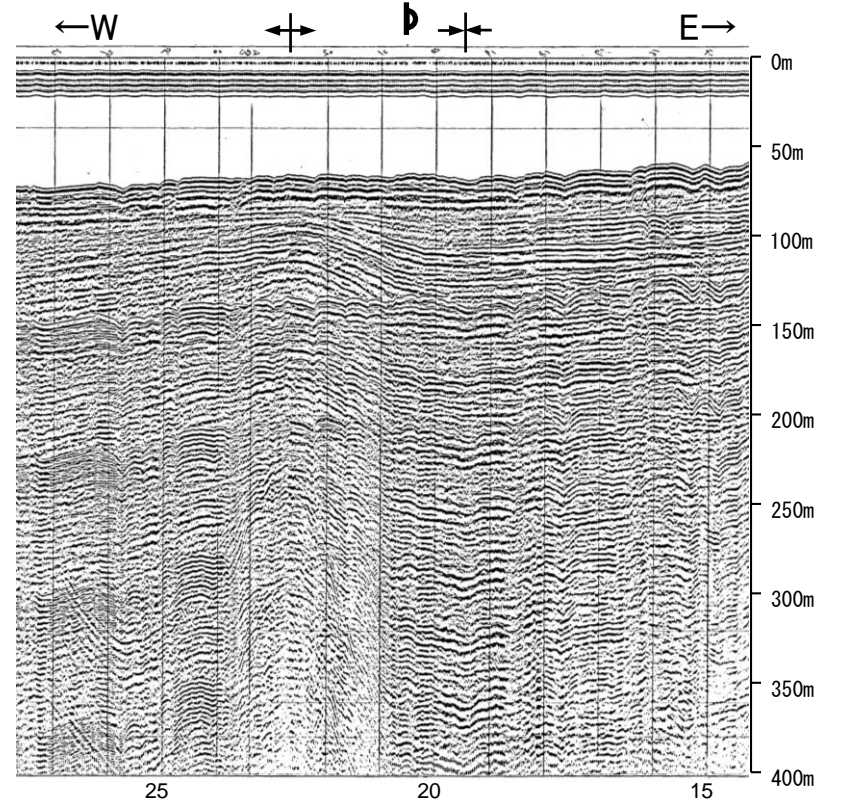
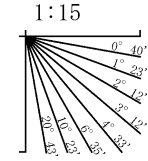


- 凡 例
- 対象断層: 撓曲 (curvature symbol), 背斜軸 (anticline axis symbol), 向斜軸 (syncline axis symbol)
  - 対象外断層: 伏在断層 (blind fault symbol), 撓曲 (curvature symbol), 連続性のない伏在断層 (discontinuous blind fault symbol), 右図記録範囲 (right figure recording range symbol)
  - 小断層群密集域 (dashed line symbol)

- (測線位置における活動性)
- Red arrow: B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる
  - Blue arrow: B<sub>2</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない
  - Green arrow: B<sub>3</sub>層以上に変位、変形が認められない
- No. 8: 調査測線 (北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
  - No. 9-S: 調査測線 (北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約360ジュール)
  - No. 8U, No. 11B: 調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
  - K17: 調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
  - L102: 調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
  - NI-06BM: 調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
  - NI-06MS: 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
  - N-118: 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
  - 14: 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
  - H73-1: 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)
  - SJ1407: 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

地質時代		地層名	
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
		前期	B <sub>3</sub> 層
	鮮新世	C層	C <sub>1</sub> 層
		D層	C <sub>2</sub> 層
古第三紀	D層	D <sub>1</sub> 層	
先第三紀	D層	D <sub>2</sub> 層	

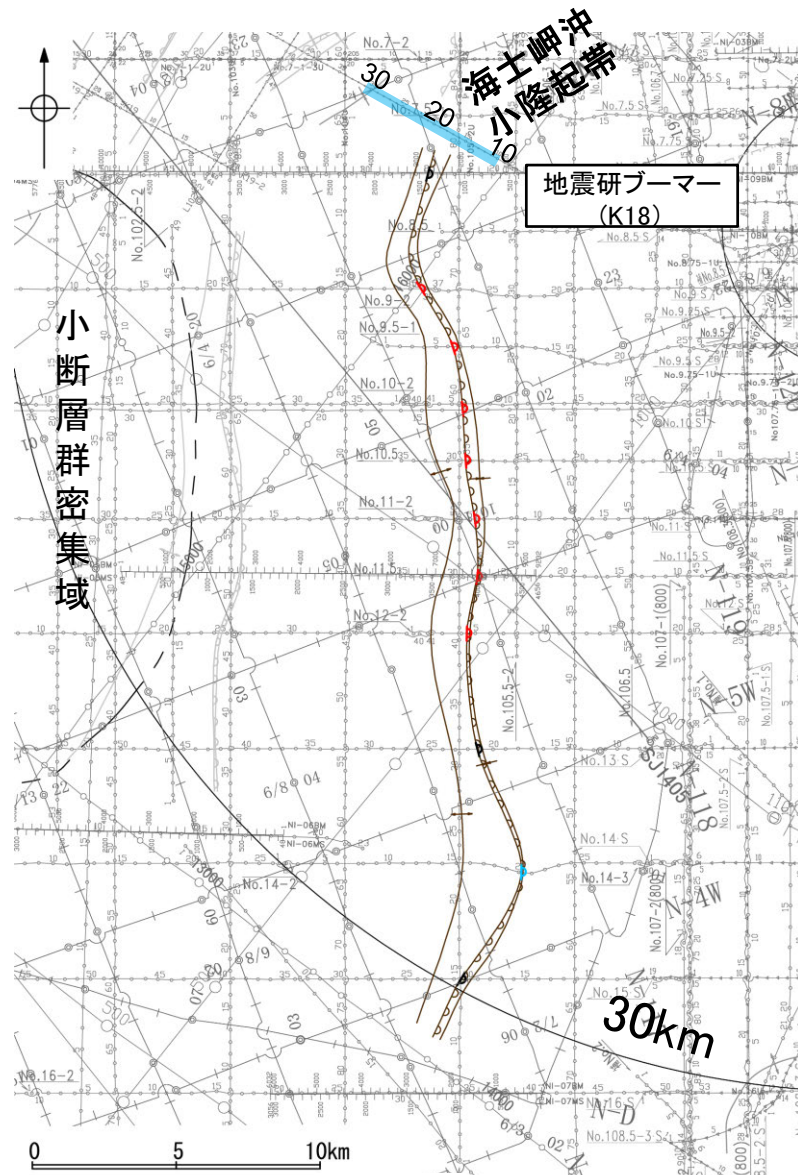
枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。



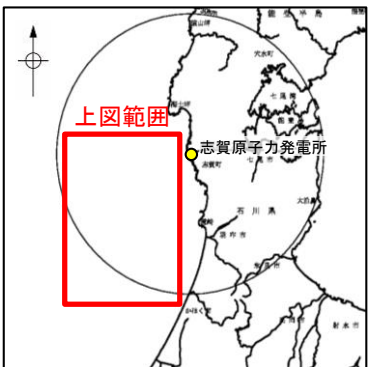
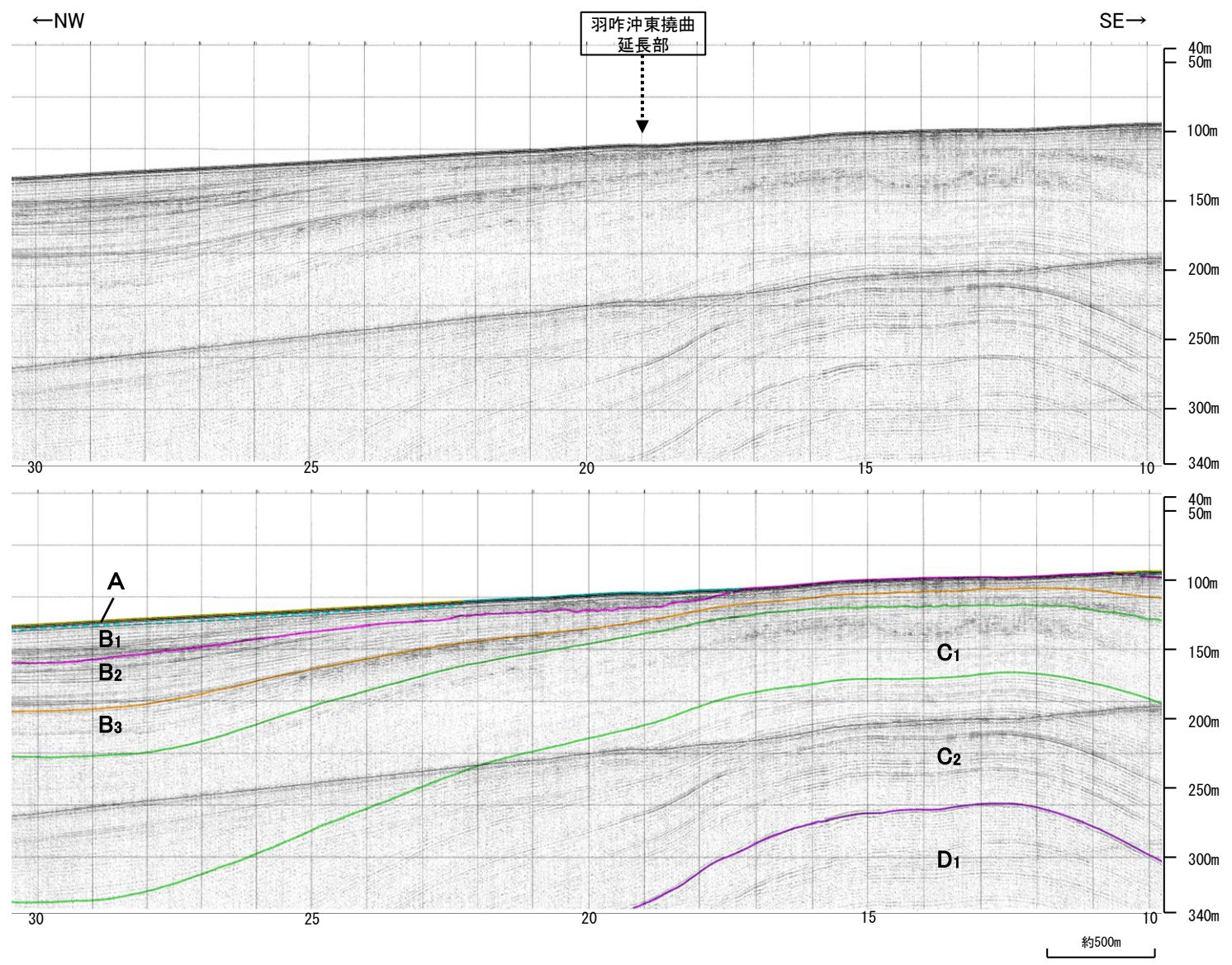


# 2.4.3 (4) 羽咋沖東撓曲の端部 —北端調査 K18測線—

○No.8測線で推定した撓曲の北方延長にあたるK18測線の測点19付近は、海士岬沖小隆起帯から南西に続く隆起部の北西斜面にあたり、分布する地層は沖側に向かって緩やかに傾斜している。  
○北方延長部付近に、羽咋沖東撓曲を示唆するような変位、変形は認められない。



位置図

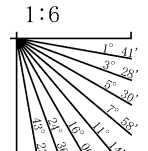


<p>対象断層</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>撓曲</li> <li>背斜軸</li> <li>向斜軸</li> <li>小断層群密集域</li> </ul> <p>(測線位置における活動性)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる</li> <li>B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない</li> <li>B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められない</li> </ul>	<p>対象外断層</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>伏在断層</li> <li>撓曲</li> <li>連続性のない伏在断層</li> </ul> <p>右図記録範囲</p>	<p>凡 例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>No. 8 調査測線 (北陸電力: スーパー・シングルチャンネル・約2450ジュール)</li> <li>No. 9.5 調査測線 (北陸電力: スーパー・シングルチャンネル・約360ジュール)</li> <li>No. 9B 調査測線 (北陸電力: ブーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)</li> <li>K17 調査測線 (東京大学地震研究所: ブーマー・マルチチャンネル)</li> <li>L102 調査測線 (産業技術総合研究所: ブーマー・マルチチャンネル)</li> <li>NI-06M 調査測線 (原子力安全・保安院: ブーマー・マルチチャンネル)</li> <li>NI-06MS 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)</li> <li>H-118 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)</li> <li>14 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)</li> <li>H3-1 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)</li> <li>SJ407 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)</li> </ul>
---	---	---

枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。

地質時代	地層名		
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
	鮮新世	前期	B <sub>3</sub> 層
		C <sub>1</sub> 層	
新第三紀	中新世	C <sub>2</sub> 層	
	古第三紀	D <sub>1</sub> 層	
先第三紀	D <sub>2</sub> 層		

・この図面は、東京大学地震研究所の海上音波探査の記録を北陸電力が独自に解析・作成したものである

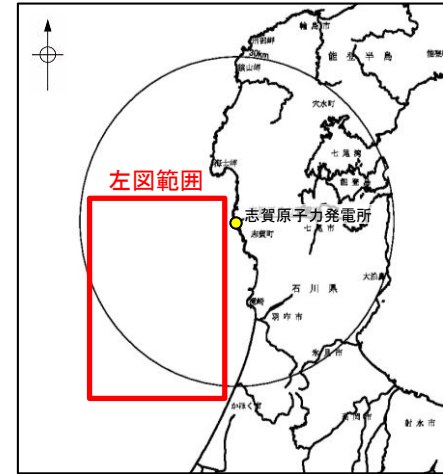
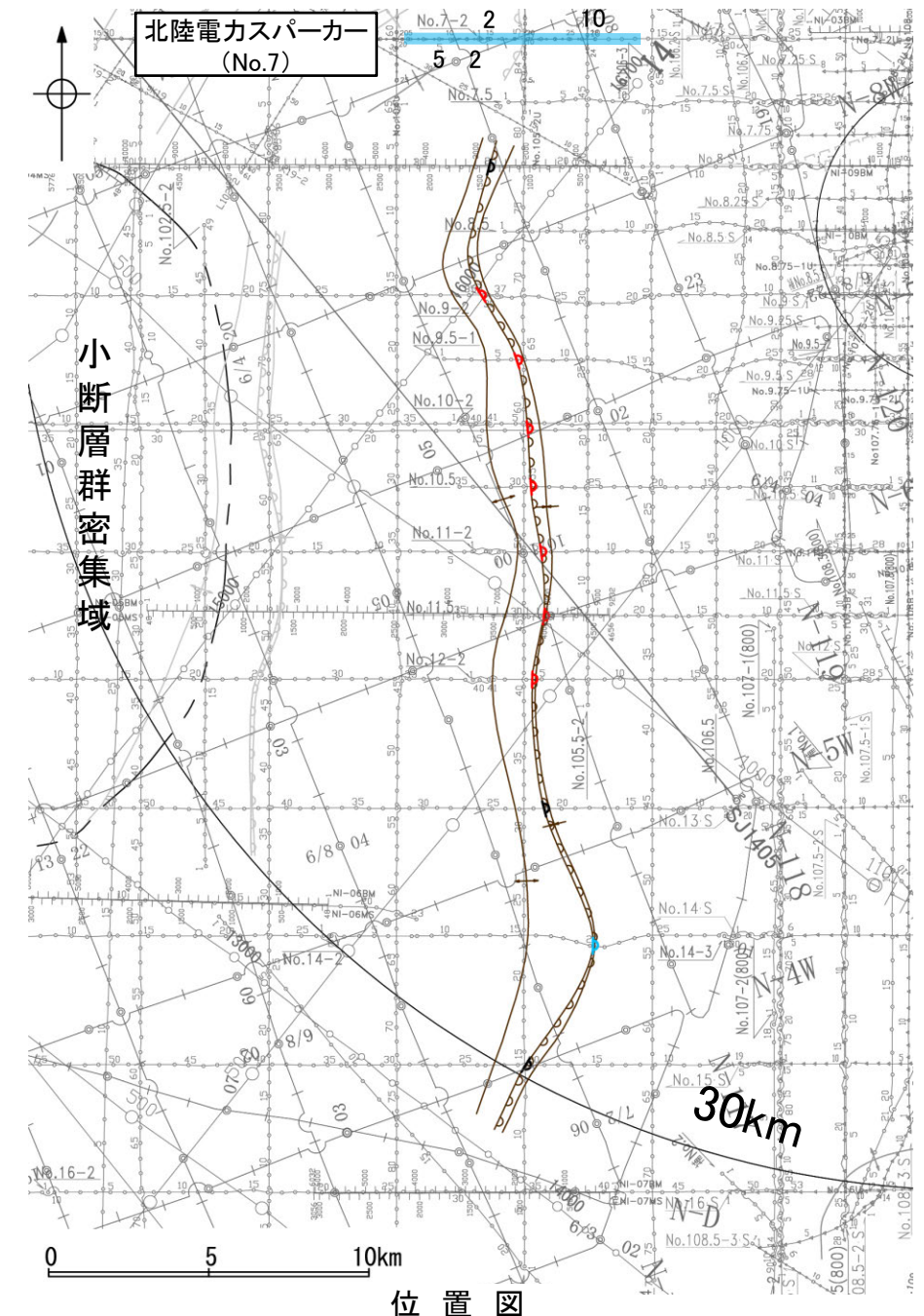




# 2.4.3 (4) 羽咋沖東撓曲の端部 —北端調査 No.7測線—

○K18測線のさらに北方延長にあたるNo.7測線において、羽咋沖東撓曲を示唆するような東翼が急傾斜で幅が狭く、西翼が緩傾斜で幅が広い非対称な褶曲構造は認められない。  
○測点5付近の西落ちの撓曲は、海士岬沖断層帯として別途評価している。

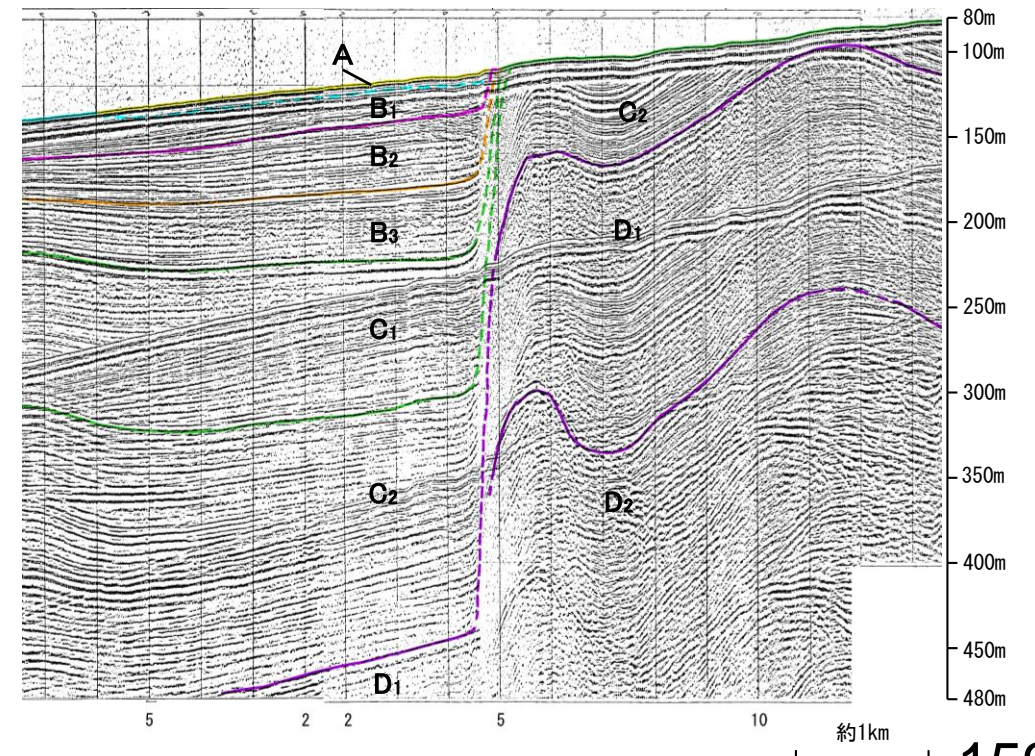
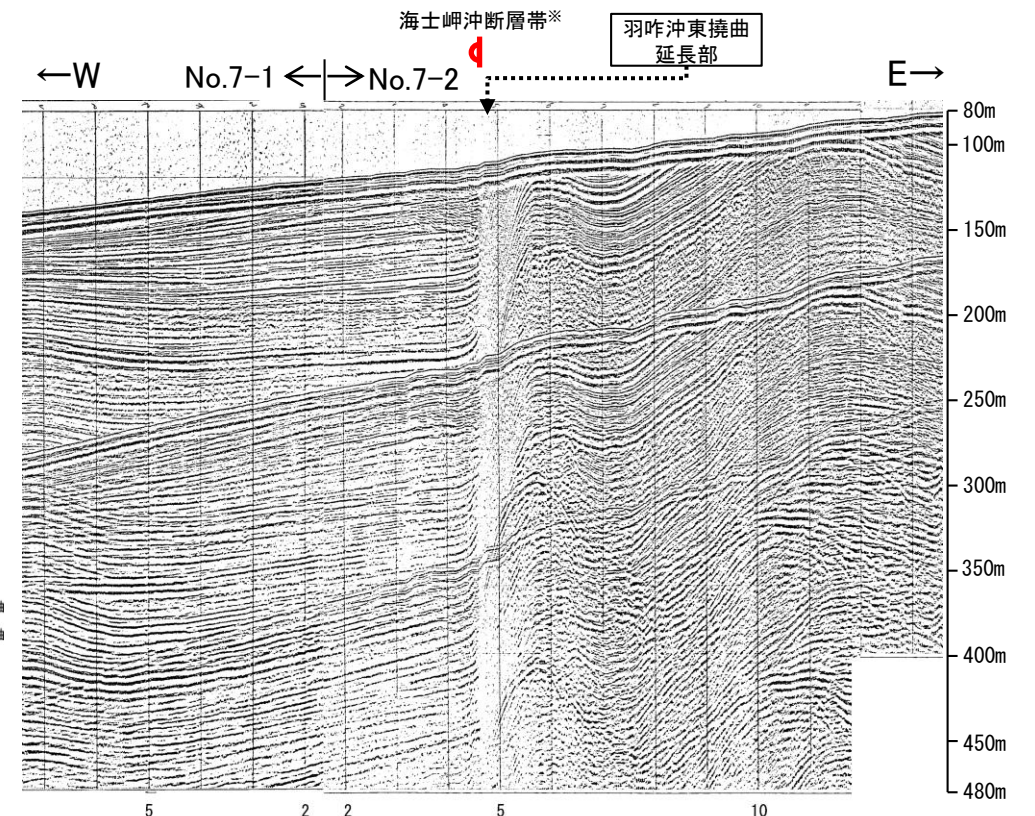
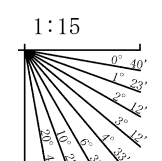
※海士岬沖断層帯の評価は2.4.1



- 凡例
- 対象断層: 撓曲, 背斜軸, 向斜軸
  - 対象外断層: 伏在断層, 撓曲, 連続性のない伏在断層
  - 小断層群密集域
  - 右図記録範囲
- (測線位置における活動性)
- B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる
  - B<sub>2</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない
  - B<sub>3</sub>層以上に変位、変形が認められない
- No. 8: 調査測線 (北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
  - No. 9-S: 調査測線 (北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約360ジュール)
  - No. 8U, No. 11B: 調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
  - K17: 調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
  - L102: 調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
  - NI-06BM: 調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
  - NI-06MS: 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
  - N-118: 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
  - 14: 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
  - H73-1: 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)
  - SJ1407: 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

地質時代	地層名		
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
		前期	B <sub>3</sub> 層
	鮮新世	C層	
		D層	
古第三紀	D <sub>1</sub> 層		
先第三紀	D <sub>2</sub> 層		

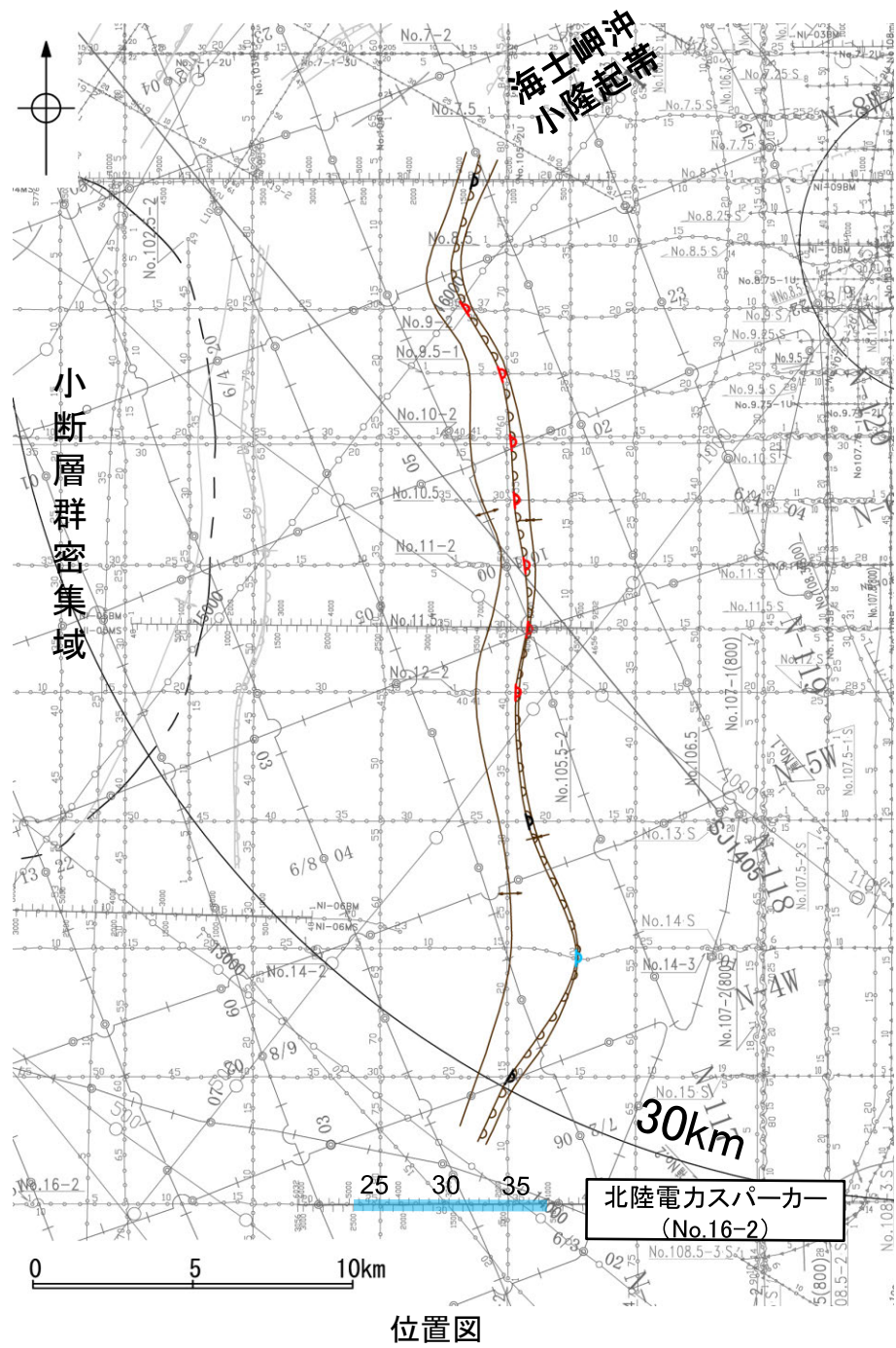
枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。



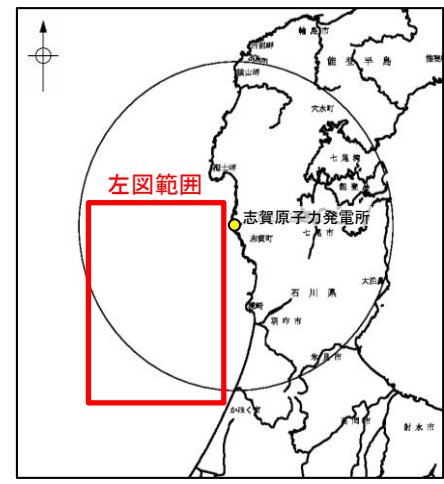


# 2.4.3 (4) 羽咋沖東撓曲の端部 —南端調査 No.16-2測線—

○No.15測線で推定した撓曲の南方延長にあたるNo.16-2測線において、いずれの地層にも断層等を示唆するような変位、変形は認められない。



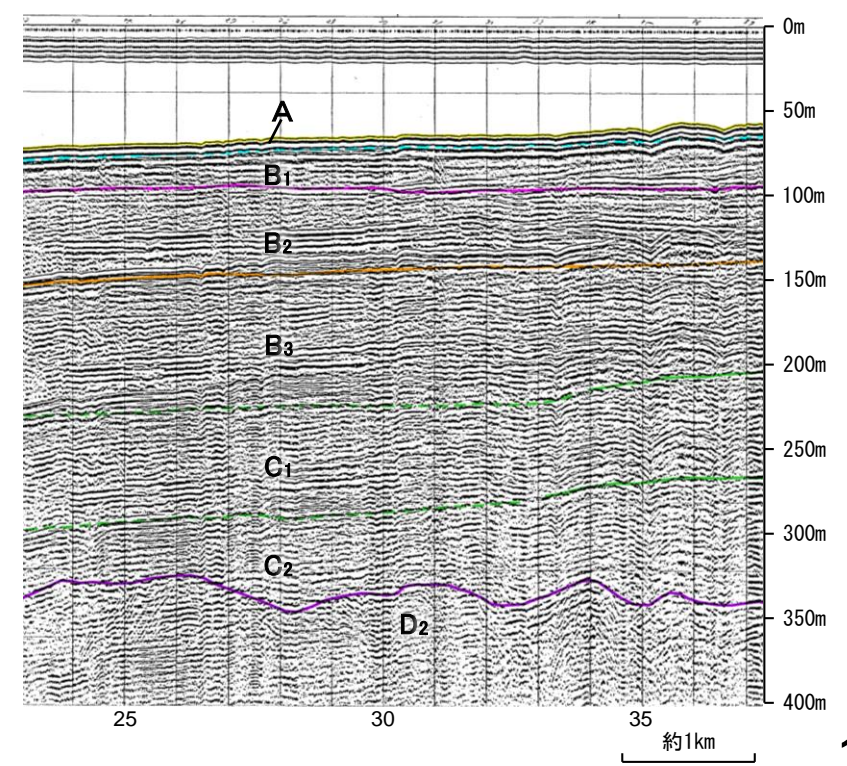
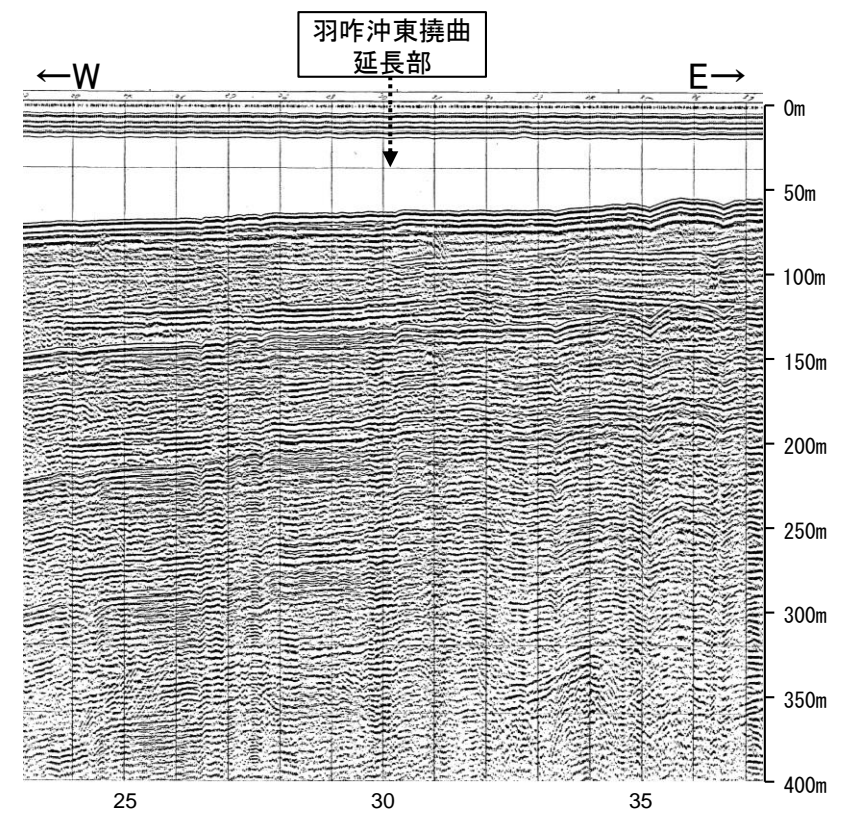
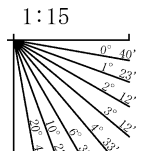
位置図



- 凡 例
- 対象断層: 撓曲 (curvature), 背斜軸 (anticline axis), 向斜軸 (syncline axis)
  - 対象外断層: 伏在断層 (blind fault), 撓曲 (curvature), 連続性のない伏在断層 (discontinuous blind fault)
  - 小断層群密集域 (dense area of small faults)
  - 右図記録範囲 (right figure recording range)
- (測線位置における活動性)
- B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる
  - B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない
  - B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められない
- 調査測線 (北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
- No. 8
  - No. 9-S
  - No. 8U
  - No. 11B
- 調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
- K17
  - L102
- 調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
- NI-06BM
- 調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
- NI-06MS
- 調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
- W-11B
- 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
- 14
- 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
- H73-1
- 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
- SJ107
- 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。

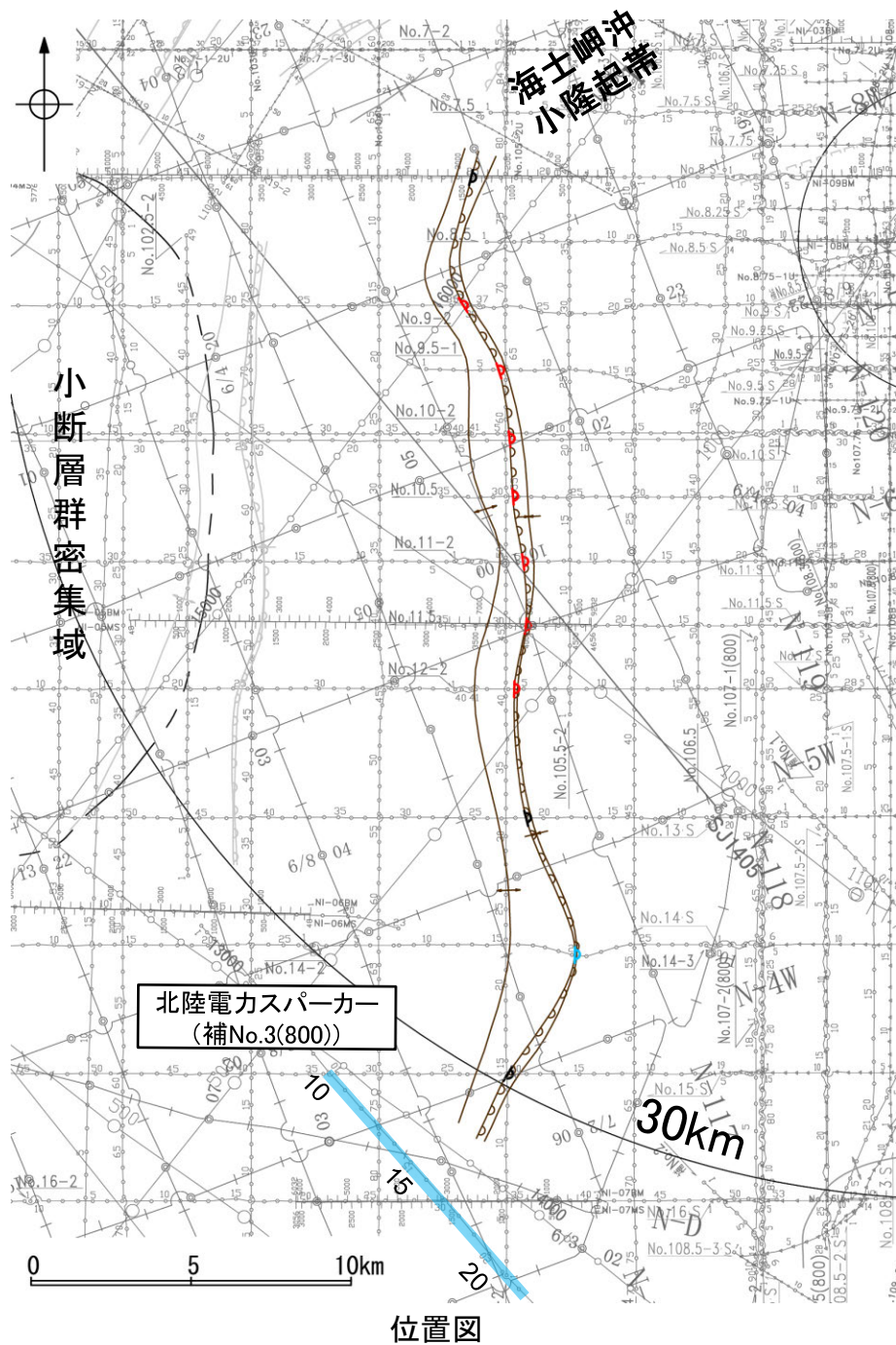
地質時代		地層名	
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
		前期	B <sub>3</sub> 層
	第三紀	鮮新世	C <sub>1</sub> 層
中新世		C <sub>2</sub> 層	
		D層	
古第三紀	D <sub>2</sub> 層		
先第三紀			





# 2.4.3 (4) 羽咋沖東撓曲の端部 —南端調査 補No.3(800)測線—

○No.15測線で推定した撓曲の南方延長にあたる補No.3(800)測線において、いずれの地層にも断層等を示唆するような変位、変形は認められない。



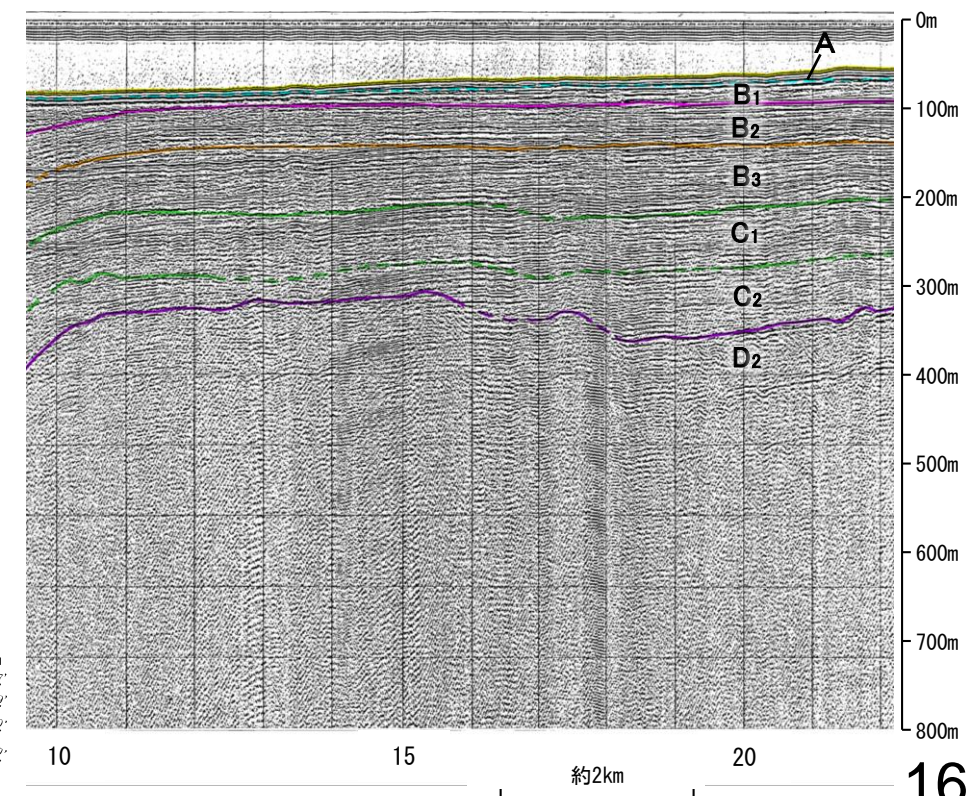
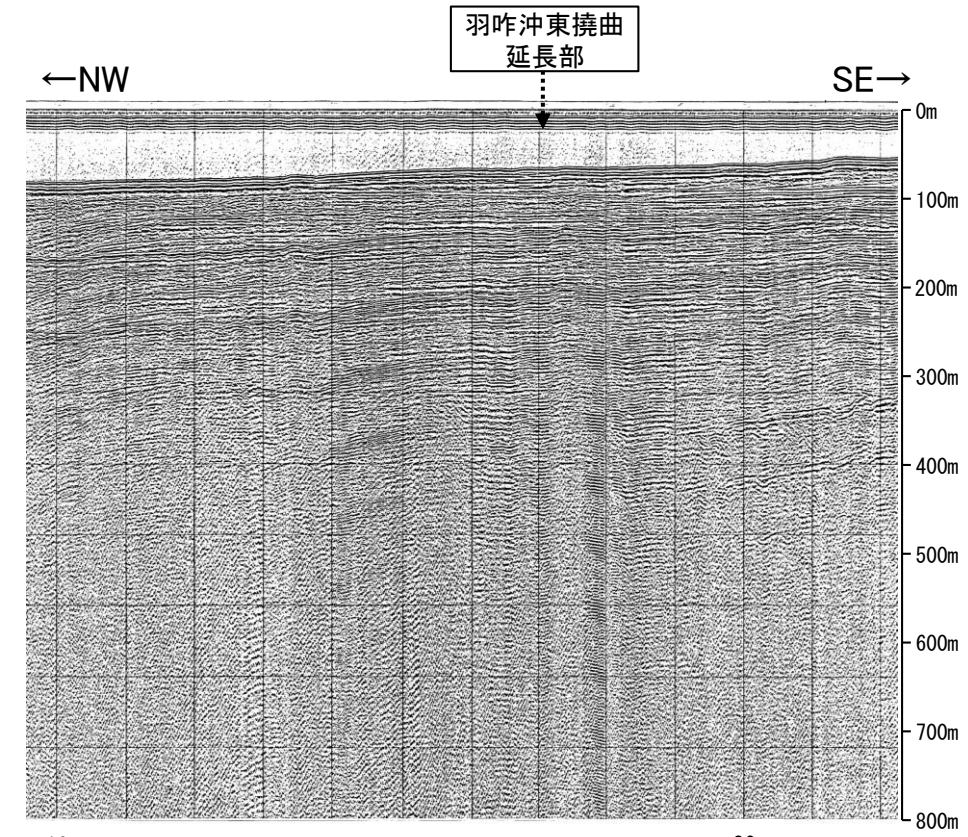
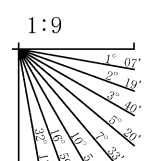
凡 例

対象断層	背斜軸	対象外断層	背斜軸
撓曲	向斜軸	伏在断層	向斜軸
		撓曲	
		連続性のない伏在断層	
小断層群密集域		右図記録範囲	

- (測線位置における活動性)
- B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる
  - B<sub>2</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない
  - B<sub>3</sub>層以上に変位、変形が認められない
- No. 8 調査測線 (北陸電力: スパーカー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
  - No. 9-S 調査測線 (北陸電力: スパーカー・シングルチャンネル・約360ジュール)
  - No. 8U No. 11B 調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
  - K17 調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
  - L102 調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
  - NI-06BM 調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
  - NI-06MS 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
  - N-118 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
  - 14 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
  - H73-1 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)
  - SJ1407 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。

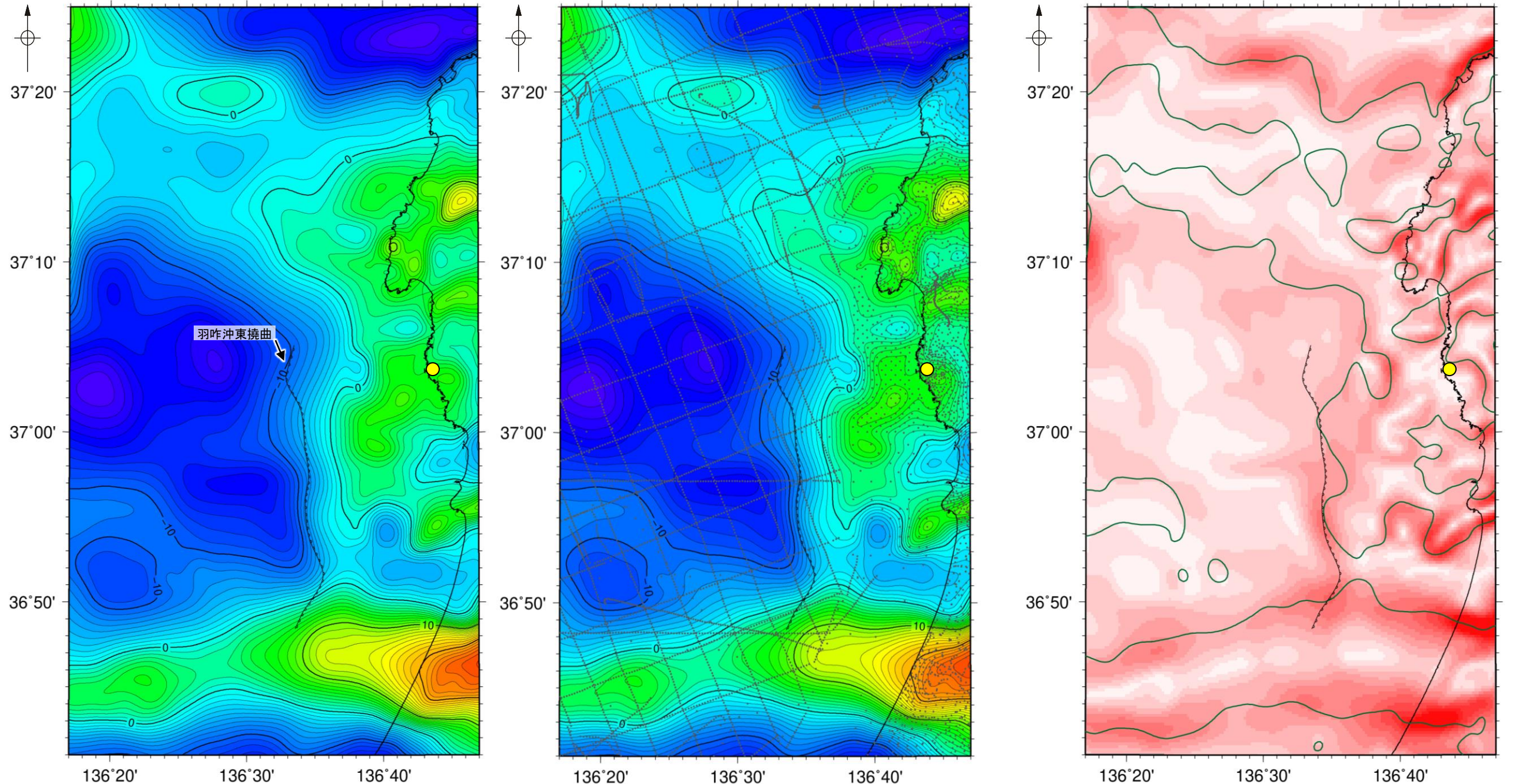
地質時代	地層名		
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
		前期	B <sub>3</sub> 層
	第三紀	鮮新世	C <sub>1</sub> 層
中新世		C <sub>2</sub> 層	
古第三紀	D層	D <sub>1</sub> 層	
	先第三紀	D <sub>2</sub> 層	





# 2.4.3 (5) 羽咋沖東撓曲周辺の重力異常

○羽咋沖東撓曲の深部構造を確認するため、ブーゲー異常図、水平一次微分図を作成した。  
 ○ブーゲー異常図及び水平一次微分図によれば、羽咋沖東撓曲沿いに重力異常急変部が分布するが、海上音波探査から推定される隆起側とは逆となる東側の重力異常値が高い傾向が認められる。岡村(2007a)によれば、羽咋沖東撓曲は、盆地反転構造であるとされており、この傾向はもとは西側低下の正断層として形成され、その後西側隆起の逆断層として再活動したことを示唆する。



・上図は、陸域は本多ほか(2012), 国土地理院(2006), The Gravity Research Group in Southwest Japan (2001), Yamamoto et al. (2011), Hiramatsu et al. (2019), 澤田ほか(2021), 海域は産業技術総合研究所地質調査総合センター(2013), 石田ほか(2018)を用いて、金沢大学・当社が作成した。

色スケール: mGal  
 -30 -20 -10 0 10 20 30

スケール: km  
 0 10 20

●: 測定点

仮定密度: 2,300kg/m<sup>3</sup>    コンター間隔: 1mGal

ブーゲー異常図(左図: 測定点なし, 右図: 測定点あり)    ● 志賀原子力発電所

・ブーゲー異常図は、対象とする断層の規模、調査密度を考慮し、平面トレンド成分の除去及び遮断波長4kmのローパスフィルター処理を行っている。

色スケール: mGal/km  
 0 1 2 3 4 5 6

スケール: km  
 0 10 20

— 鉛直一次微分値が0mGal/kmの等値線

水平一次微分図

・水平一次微分図は、左のフィルター処理後のブーゲー異常図を基に作成した。



---

## 2.4.4 羽咋冲西撓曲



# 2.4.4 (1) 羽咋沖西撓曲の評価結果

## 【文献調査】(P.165)

- 岡村(2007a)は、N-S方向に、第四紀向斜軸・背斜軸を図示し、これらはハーフグラベンが隆起した盆地反転構造であり、背斜構造の形状から、東翼基部に西傾斜の第四紀逆断層が伏在していると推定している。
- 国交省ほか(2014)は、羽咋沖西撓曲に対応する位置に、断層トレースを図示しているが、断層モデルを設定していない。
- 文科省ほか(2015)は、羽咋沖西撓曲に対応する位置に、震源断層モデルとしてKZ2(走向:184度、傾斜:60度、断層長さ:17.4km)を設定している。

紫字: 第1144回審査会合以降に変更した箇所

## 【活動性評価】

- 羽咋沖西撓曲は、東翼が急傾斜で幅が狭く、西翼が緩傾斜で幅が広い非対称な褶曲構造である(P.166)。
- 海上音波探査の結果、B<sub>1</sub>層下部、B<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層、C<sub>1</sub>層及びC<sub>2</sub>層に東落ちの変形が認められることから撓曲を推定し、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められると判断した(P.167~169)。

→羽咋沖西撓曲は、文献調査の結果、岡村(2007a)等から西傾斜(約60°)の逆断層と推定され、海上音波探査の結果からも、西傾斜の逆断層が伏在することが推定される。

⇒文献調査及び海上音波探査の結果、羽咋沖西撓曲は、走向がN-S方向、西傾斜(約60°)の逆断層と推定され、後期更新世以降の活動が否定できないと評価。

## 【長さの評価】

### ■北端(P.170, 171)

#### 【海上音波探査】

- No.8測線において、羽咋沖西撓曲を示唆するような変位、変形は認められない。
- No.8測線のさらに北方のNo.7-1測線には、筈波沖断層帯(西部)に対応する変形は認められるが、羽咋沖西撓曲を示唆するような変位、変形は認められない。

→No.8測線を北端と評価。

### ■南端(P.172, 173)

#### 【海上音波探査】

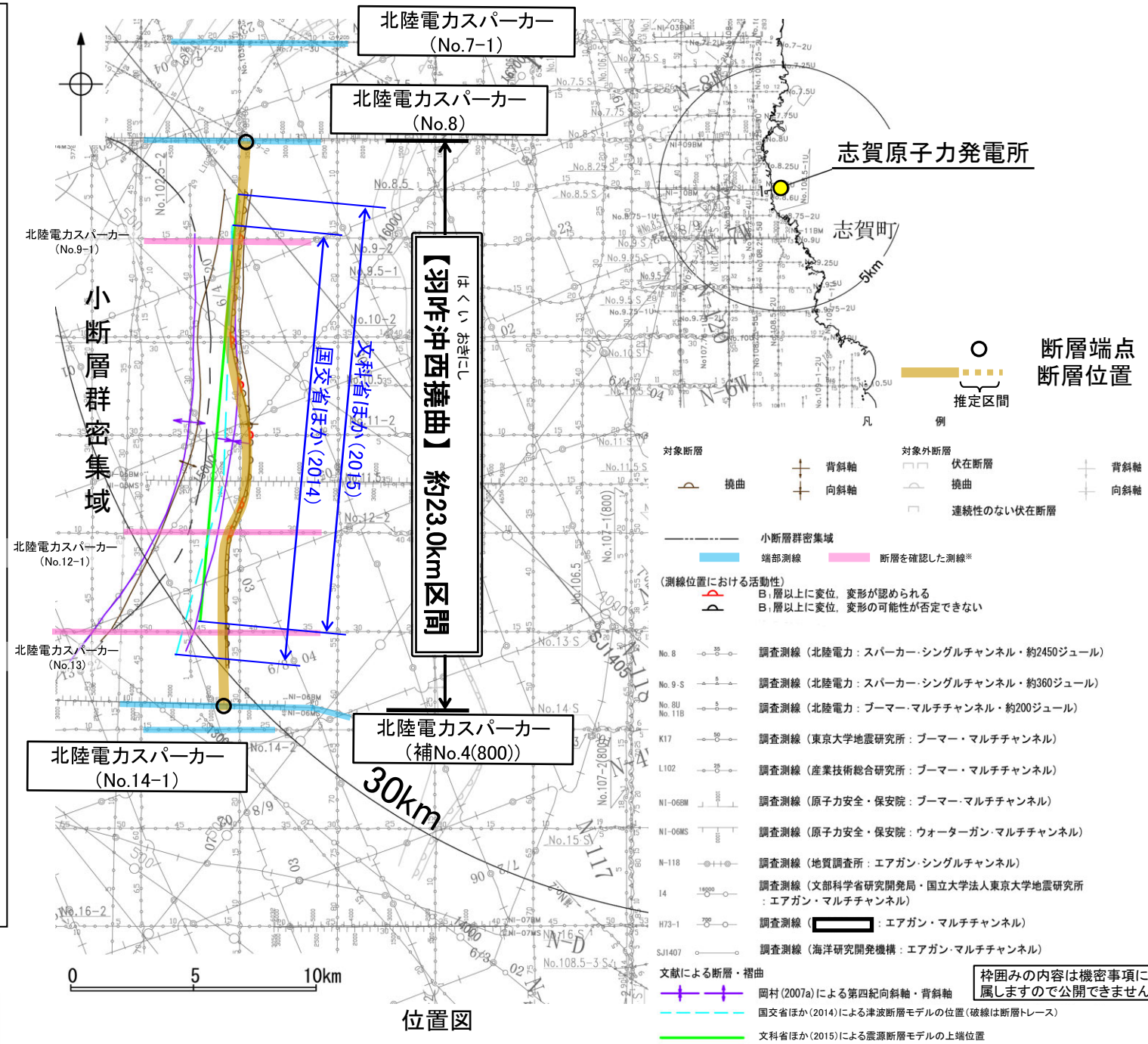
- 補No.4(800)測線、No.14-1測線において、いずれの地層にも断層等を示唆するような変位、変形は認められない。

→補No.4(800)測線を南端と評価。

### ■重力探査(P.174)

- 羽咋沖西撓曲に対応する重力異常急変部は認められない。

⇒No.8測線(北端)から補No.4(800)測線(南端)までの約23.0km区間を評価。



※: 以外の羽咋沖西撓曲を確認した音波探査記録はデータ集2

羽咋沖西撓曲は後期更新世以降の活動が否定できず、その長さとして約23.0km区間を評価する。

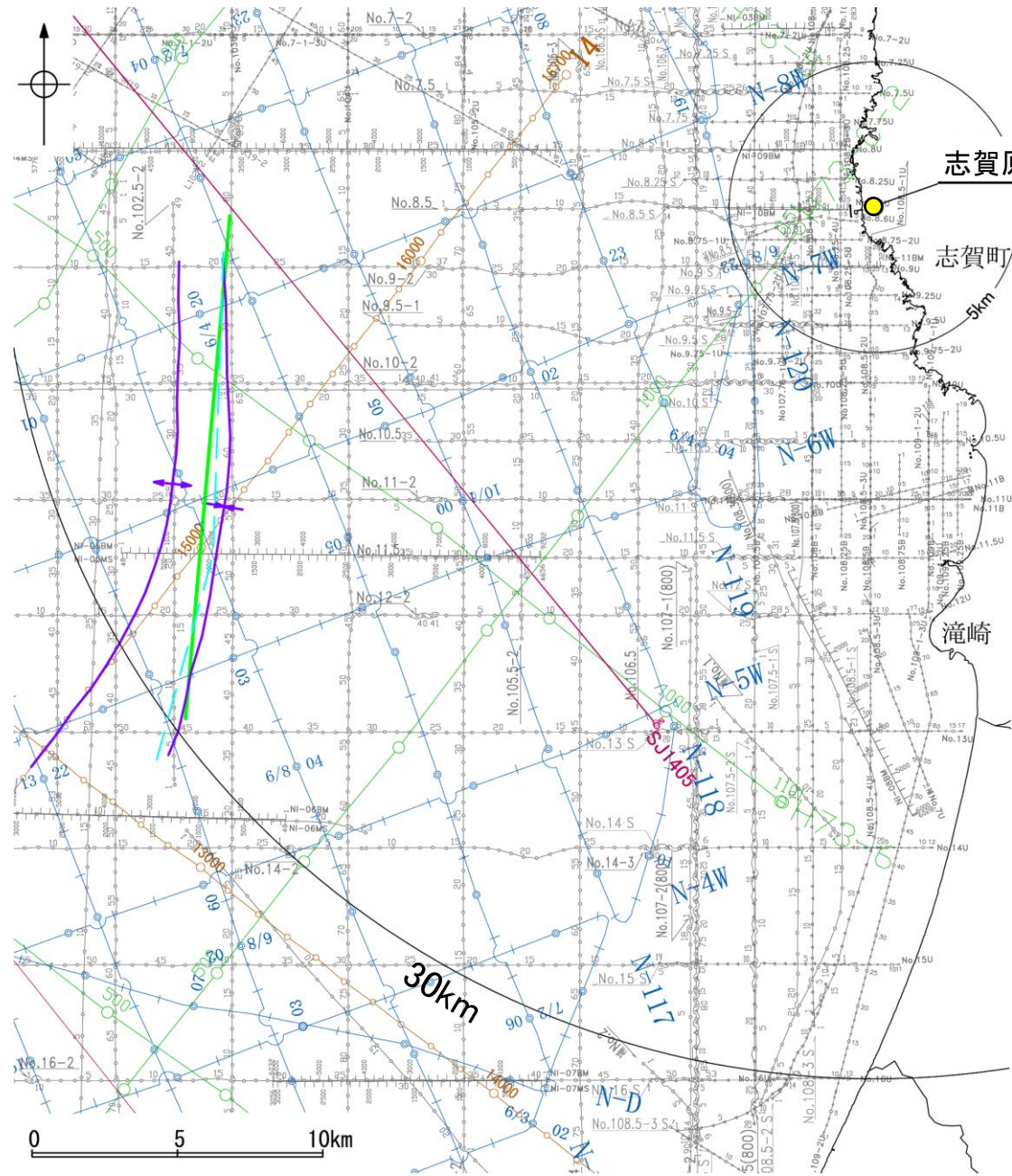


# 2.4.4 (2) 羽咋沖西撓曲の文献調査

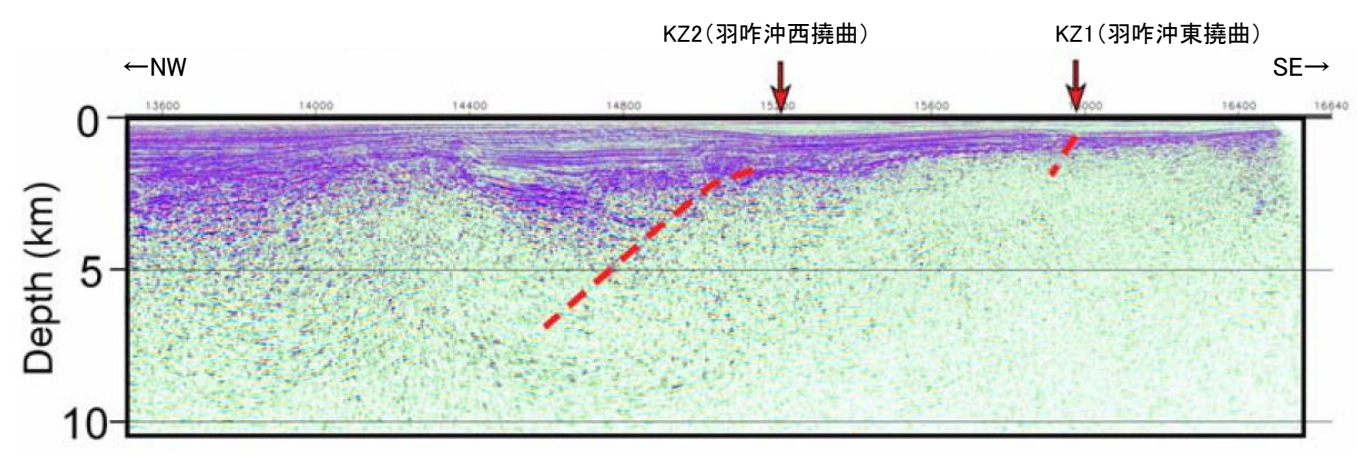
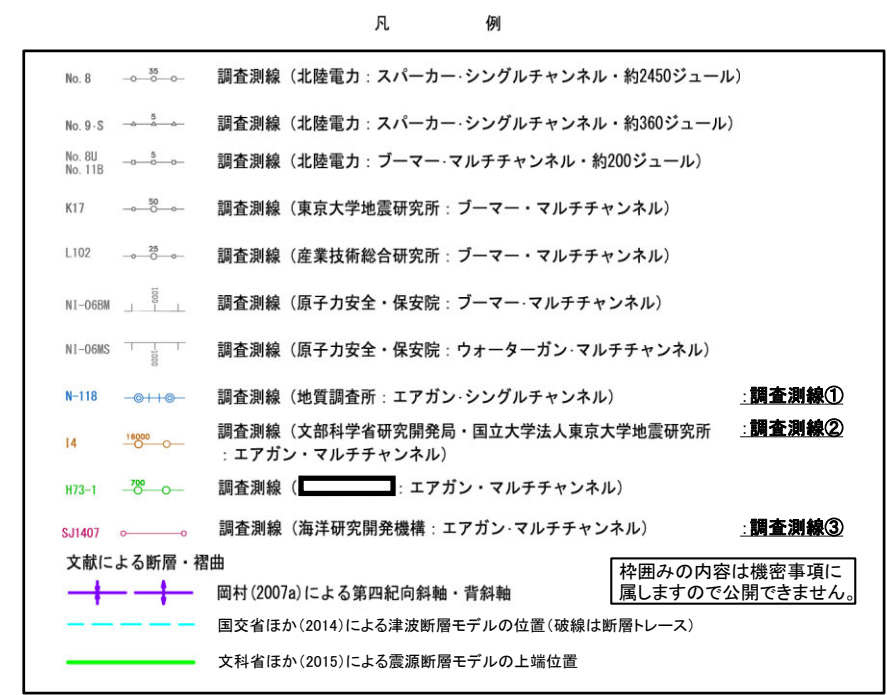
○岡村(2007a)は、産業技術総合研究所(旧地質調査所)による調査(調査測線①)から、N-S方向に、第四紀向斜軸・背斜軸を図示し、これらはかつてのハーフグラベンが隆起した盆地反転構造であり、背斜構造の形状から、東翼基部に西傾斜の第四紀逆断層が伏在すると推定している。また、岡村(2007b)は、この逆断層について、かつての正断層が逆断層として再活動した可能性が高いと記載している。

○国交省ほか(2014)は、羽咋沖西撓曲に対応する位置に、断層トレースを図示しているが、断層モデルを設定していない。

○文科省ほか(2015)は、文科省ほか(2014)による調査(調査測線②)の他、産業技術総合研究所による調査(調査測線①)、石油開発公団による調査及び海洋研究開発機構による調査(調査測線③)の結果から、岡村(2007a)が示した構造に対応する位置に、震源断層モデルとしてKZ2(走向:184度、傾斜:60度、断層長さ:17.4km)を設定し、佐藤ほか(2014)の調査から60°の西傾斜の断層と判断している。文科省ほか(2021)では、活動性の評価を確実性Cクラス(変形を受けている最新期の地層の年代が第四紀前期である可能性がある)としている。



位置図



14測線(赤矢印は断層、北東側はKZ1、南西側はKZ2とその延長)  
(文科省ほか(2015)に一部加筆)



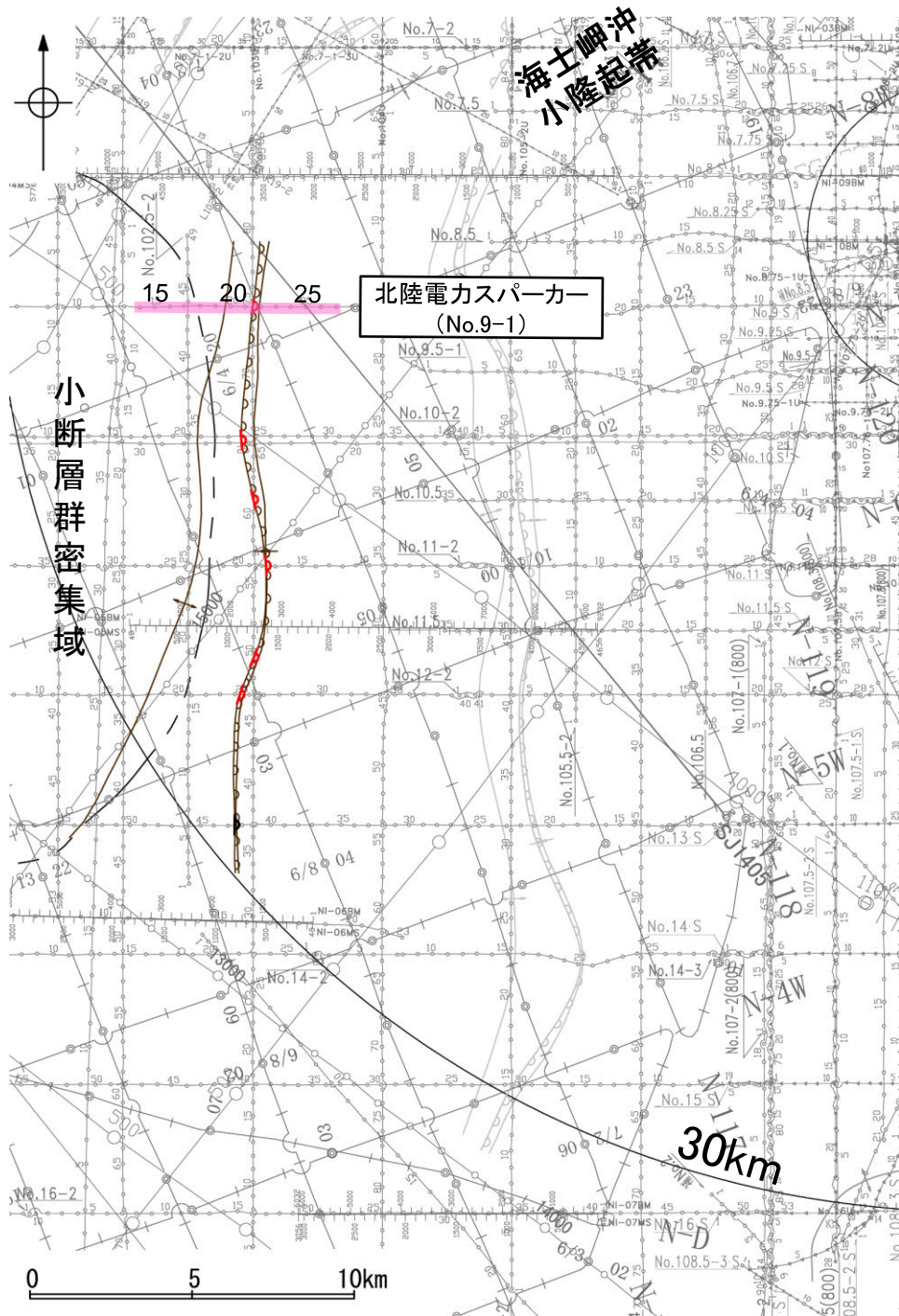




# 2.4.4 (3) 羽咋沖西撓曲の活動性 -No.9-1測線-

○No.9-1測線において、測点21.5付近でB<sub>1</sub>層下部、B<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層、C<sub>1</sub>層及びC<sub>2</sub>層に東落ちの変形が認められることから、撓曲を推定した。変形はB<sub>1</sub>層上部に及んでいないが、B<sub>1</sub>層下部まで変形は及んでいることから、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められると判断した。本撓曲は東翼が急傾斜で幅が狭く、西翼が緩傾斜で幅が広い非対称な褶曲であり、西傾斜の逆断層が伏在することが推定される。

紫字: 第1144回審査会合以降に変更した箇所



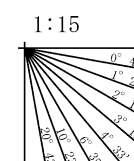
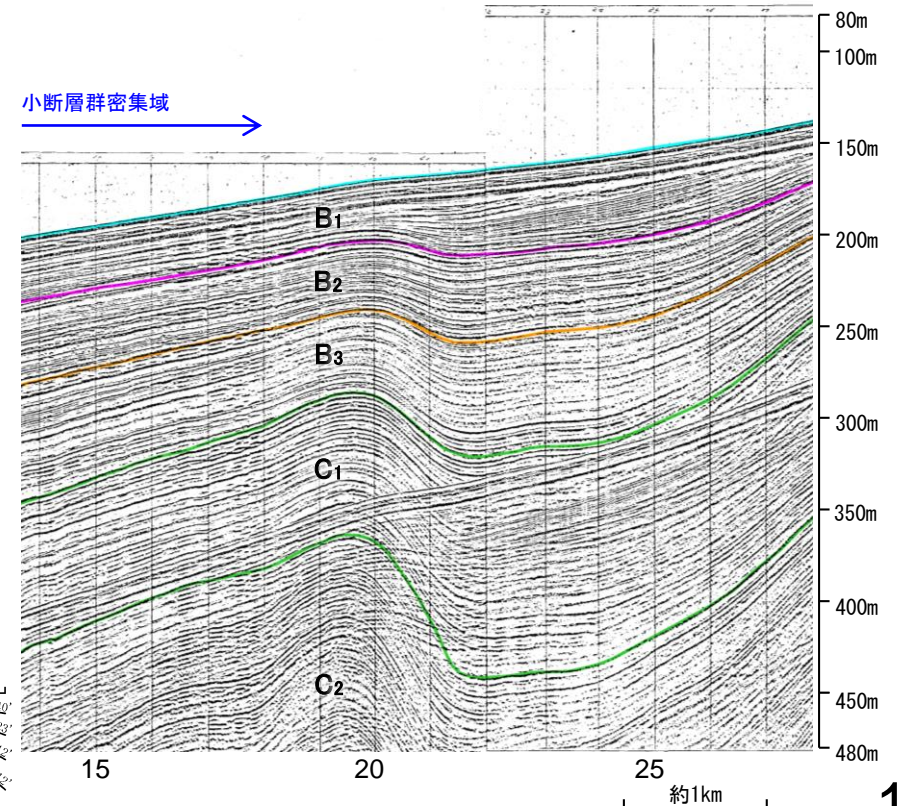
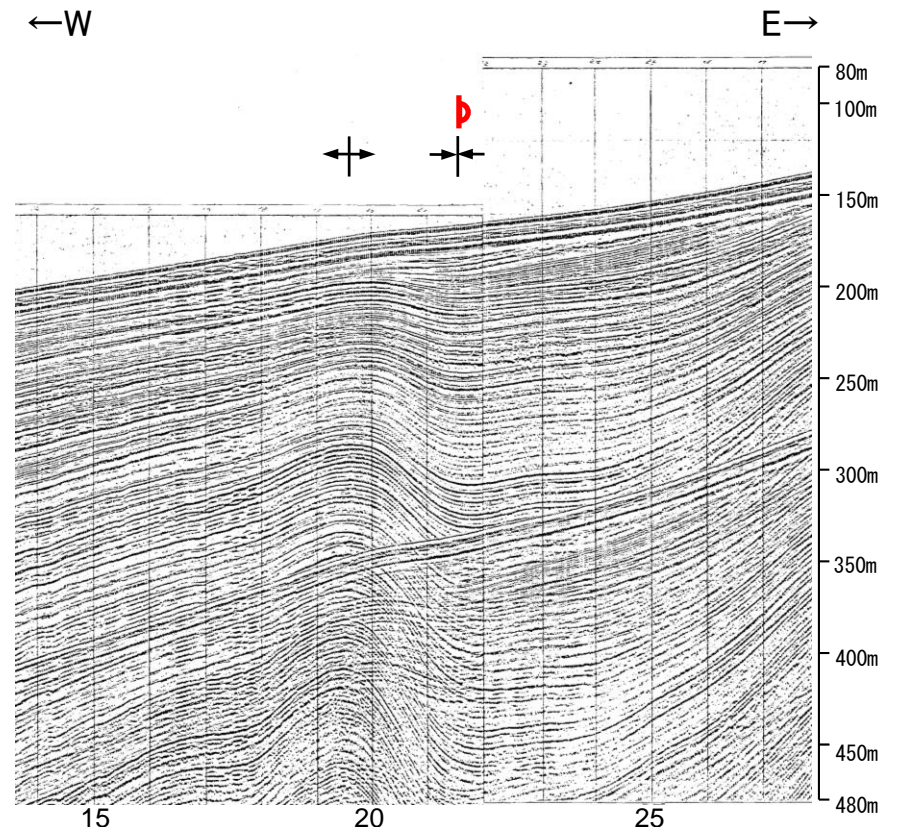
位置図



- 凡 例
- 対象断層: 撓曲 (curvature symbol), 背斜軸 (anticline axis symbol), 向斜軸 (syncline axis symbol)
  - 対象外断層: 伏在断層 (thrust fault symbol), 撓曲 (curvature symbol), 連続性のない伏在断層 (discontinuous thrust fault symbol)
  - 小断層群密集域 (small fault zone cluster symbol)
  - 右図記録範囲 (right figure recording range symbol)
- (測線位置における活動性)
- Red 'P' symbol: B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる
  - Black 'P' symbol: B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない
- No. 8: 調査測線 (北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
  - No. 9-S: 調査測線 (北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約360ジュール)
  - No. 8U No. 11B: 調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
  - K17: 調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
  - L102: 調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
  - NI-06BM: 調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
  - NI-06MS: 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
  - N-118: 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
  - 14: 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
  - H73-1: 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)
  - SJ1407: 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。

地質時代		地層名	
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
		前期	B <sub>3</sub> 層
	鮮新世	C層	C <sub>1</sub> 層
		C <sub>2</sub> 層	C <sub>2</sub> 層
中新世	D層	D層	
古第三紀	D層	D層	
先第三紀	D層	D層	



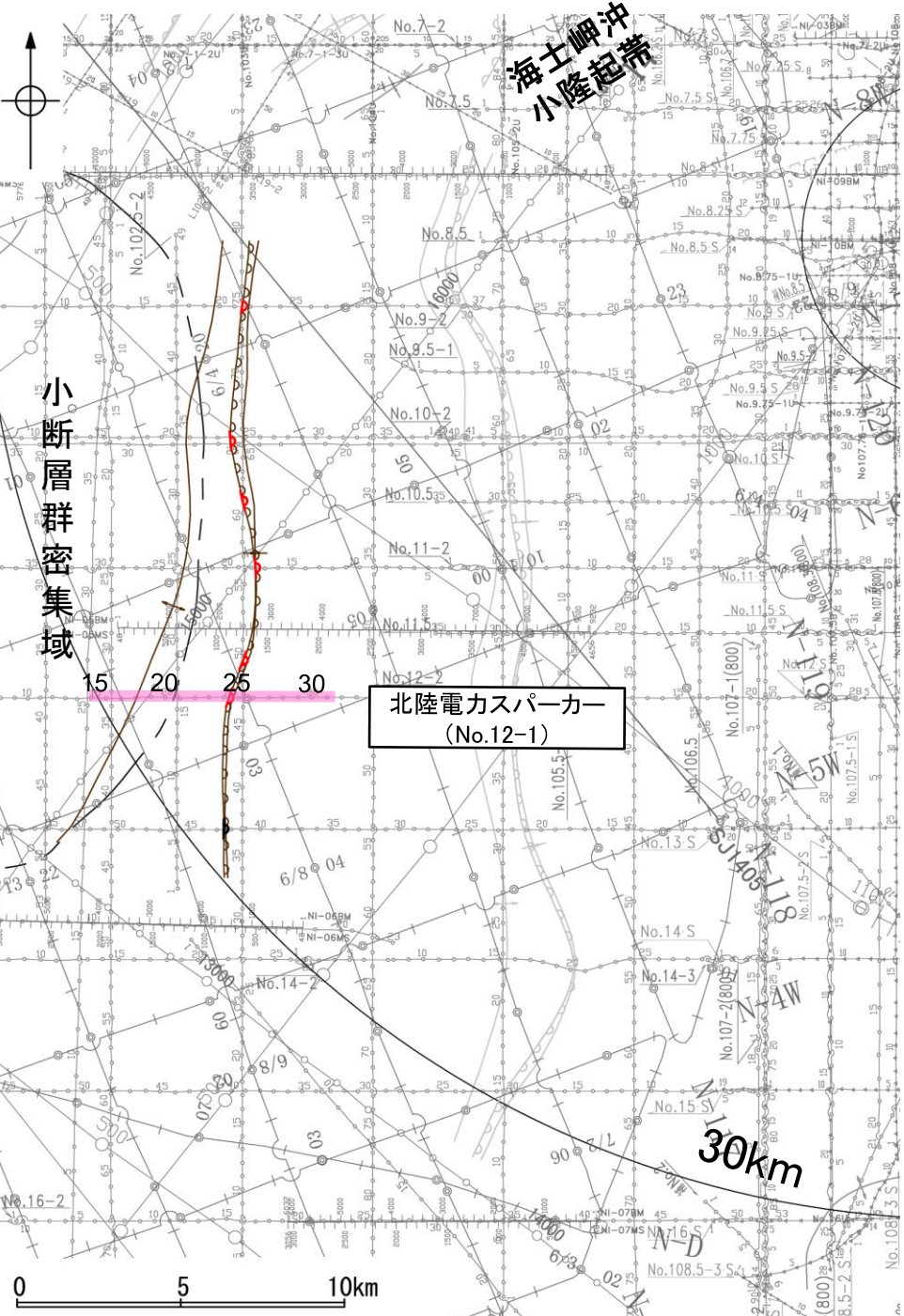


# 2.4.4 (3) 羽咋沖西撓曲の活動性 —No.12-1測線—

○No.12-1測線において、測点24.5付近でB<sub>1</sub>層下部、B<sub>2</sub>層、B<sub>3</sub>層及びC<sub>1</sub>層に東落ちの変形が認められることから、撓曲を推定した。変形はB<sub>1</sub>層上部に及んでいないが、B<sub>1</sub>層下部まで変形は及んでいることから、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められると判断した。本撓曲は東翼が急傾斜で幅が狭く、西翼が緩傾斜で幅が広い非対称な褶曲であり、西傾斜の逆断層が伏在することが推定される。

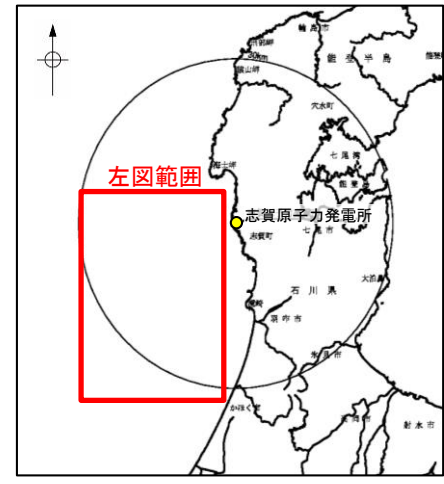
○なお、測点17~20付近で複数認められるわずかな地層の変位、変形は、小断層群であり、隆起運動に伴い、表層付近に生じた局所的な応力により形成されたものと推定され(P.337)、羽咋沖西撓曲に関連する構造ではないと判断した。

紫字: 第1144回審査会合以降に変更した箇所



北陸電力スパーカー  
(No.12-1)

位置図

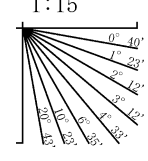


- |         |   |            |
|---------|---|------------|
| 対象断層    | 凡 | 例          |
| 撓曲      | + | 背斜軸        |
| 小断層群密集域 | + | 向斜軸        |
|         | + | 伏在断層       |
|         | + | 撓曲         |
|         | + | 連続性のない伏在断層 |
|         | + | 右図記録範囲     |

- (測線位置における活動性)
- ▶ B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる
  - ◀ B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない
- No. 8 調査測線 (北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
  - No. 9-S 調査測線 (北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約360ジュール)
  - No. 8U No. 11B 調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
  - K17 調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
  - L102 調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
  - NI-06BM 調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
  - NI-06MS 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
  - N-118 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
  - 14 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
  - H73-1 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)
  - SJ1407 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

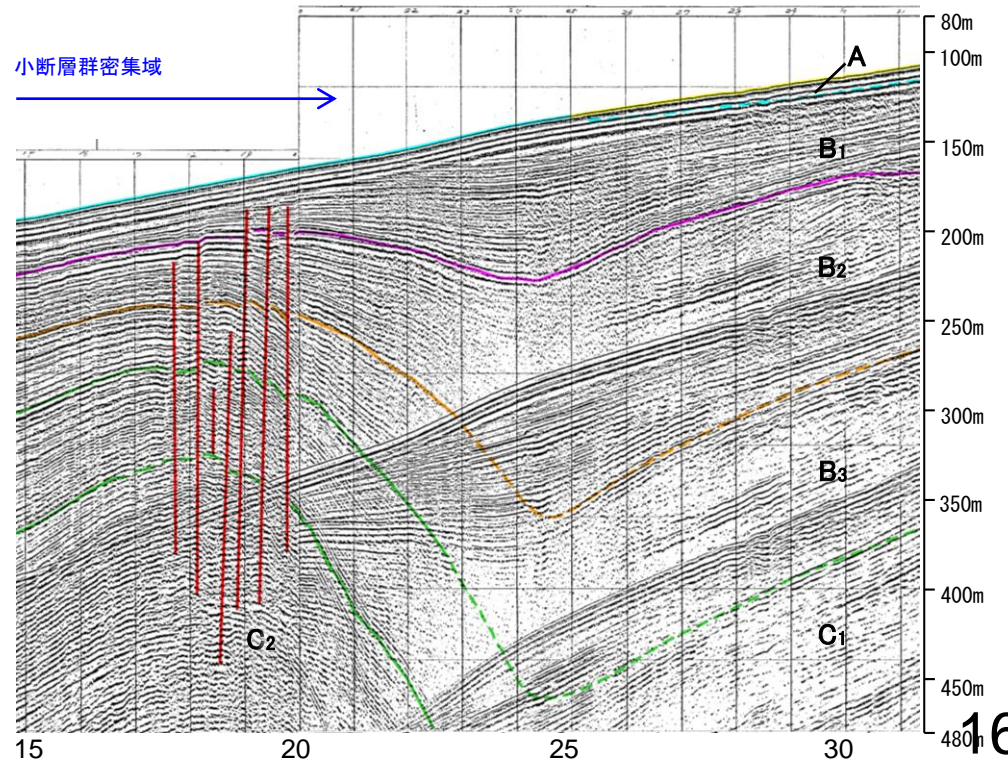
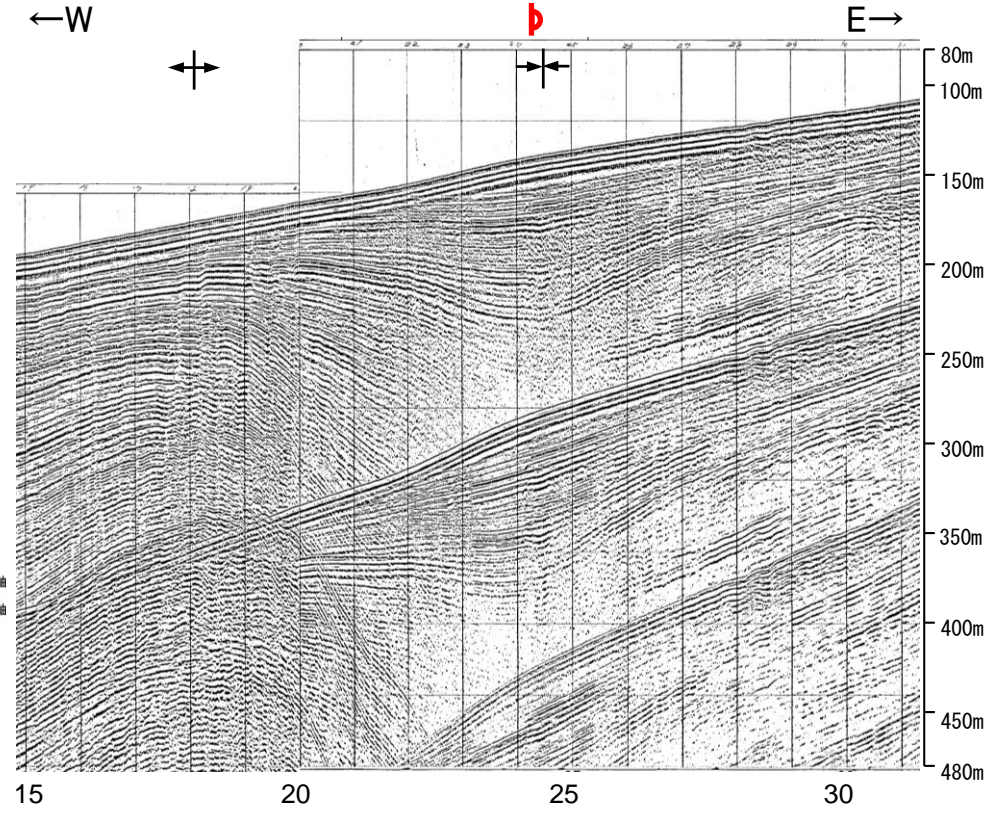
地質時代	地層名	
	第四紀	完新世
更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
	中期	B <sub>2</sub> 層
	前期	B <sub>3</sub> 層
新第三紀	鮮新世	C <sub>1</sub> 層
	中新世	D層
古第三紀		D <sub>2</sub> 層
先第三紀		D <sub>3</sub> 層

枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。



断層

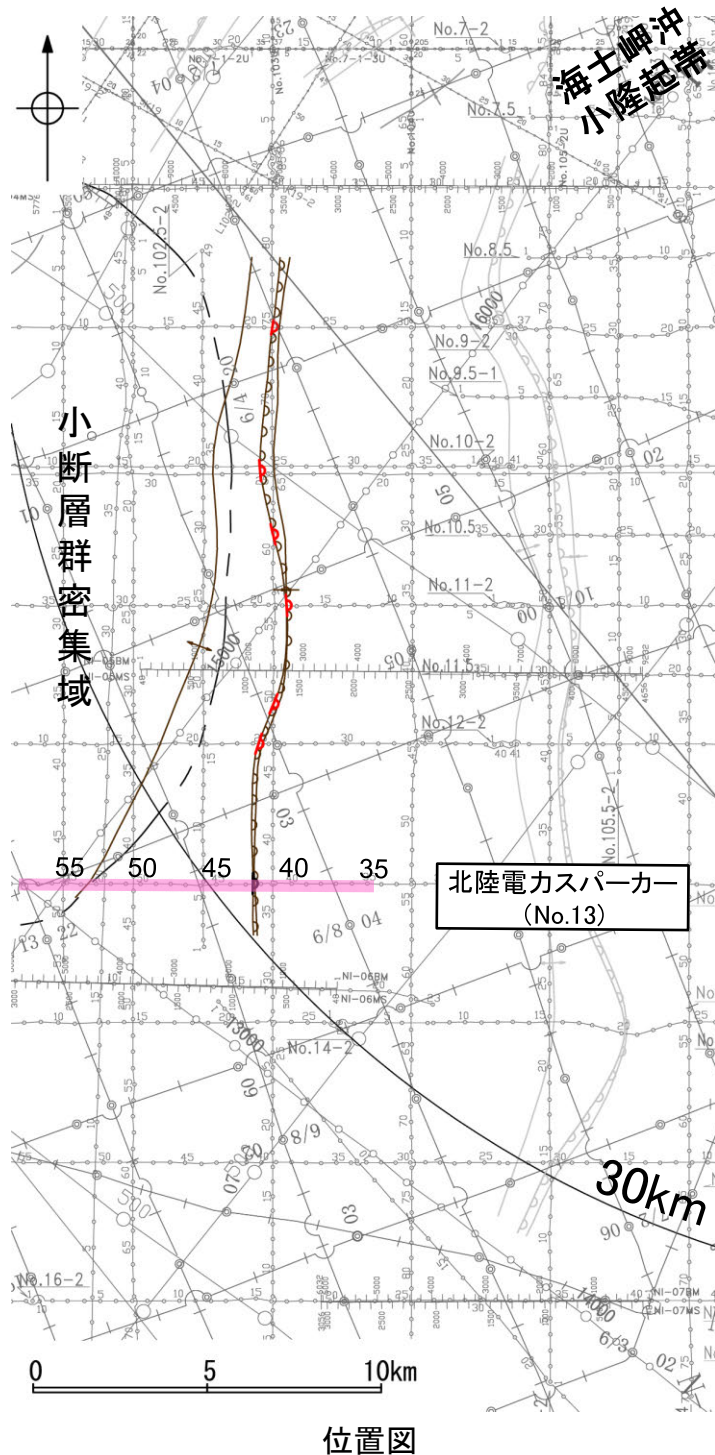
約1km



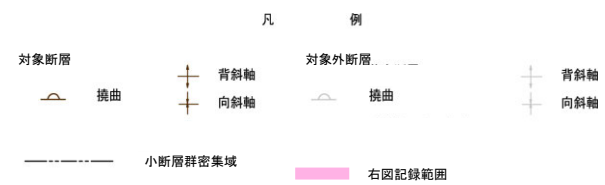
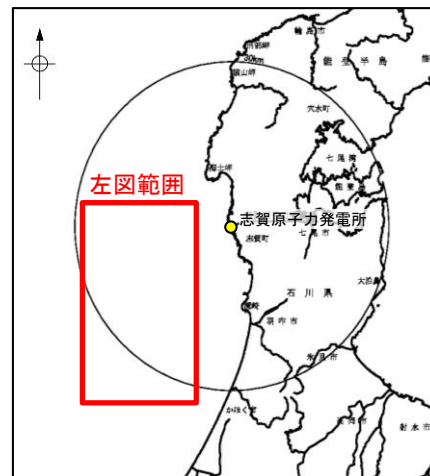


# 2.4.4 (3) 羽咋沖西撓曲の活動性 -No.13測線-

○No.13測線において、測点42.5付近でB<sub>2</sub>層下部、B<sub>3</sub>層及びC<sub>1</sub>層に東落ちの変形が認められることから撓曲を推定した。変形はA層及びB<sub>1</sub>層上部に及んでいないが、B<sub>1</sub>層下部及びB<sub>2</sub>層上部に変形が及んでいる可能性が否定できないことから、B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できないと判断した。  
○なお、測点53~55付近で複数認められるわずかな地層の変位、変形は、小断層群の一部であり、隆起運動に伴い、表層付近に生じた局所的な応力により形成されたものと推定され(P.337)、羽咋沖西撓曲に関連する構造ではないと判断した。



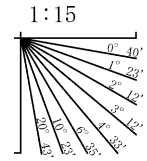
位置図



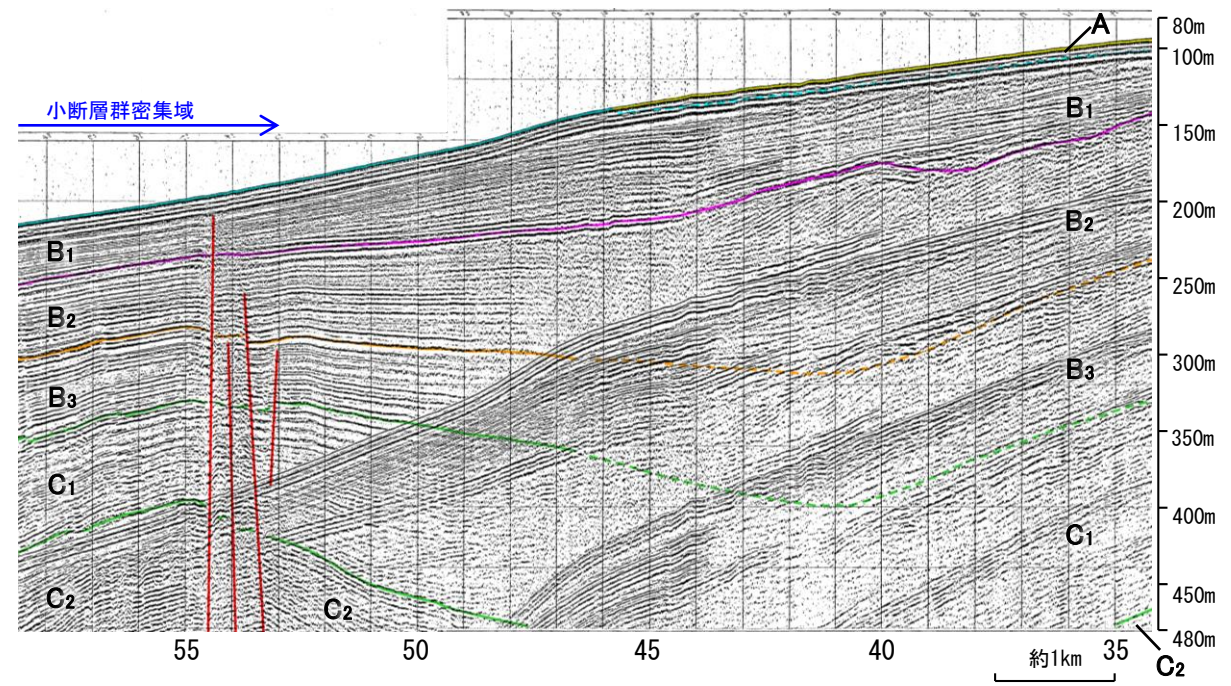
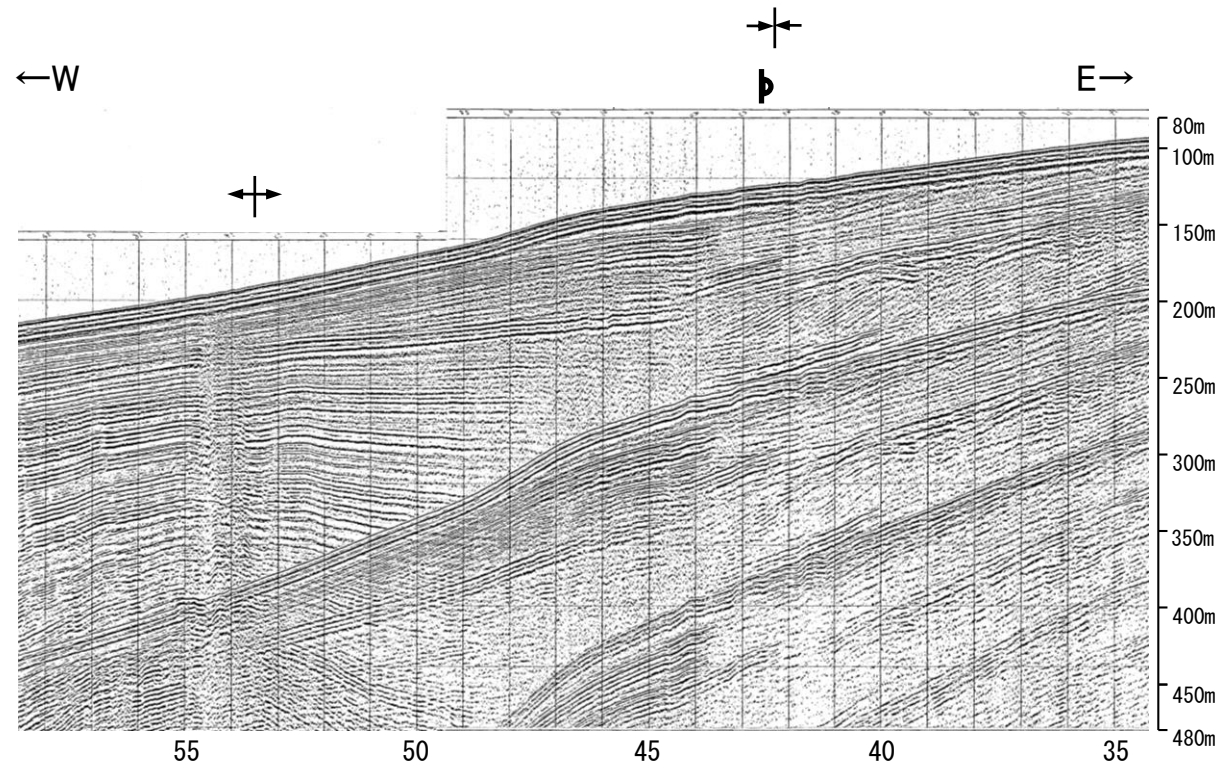
- (測線位置における活動性)
- △ B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる
  - B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない
- No. 8 調査測線 (北陸電力: スパーカー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
  - No. 8U 調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
  - K17 調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
  - L102 調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
  - NI-06BM 調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
  - NI-06MS 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
  - N-118 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
  - 14 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
  - H73-1 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)
  - SJ1407 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

地質時代	地層名		
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
		前期	B <sub>3</sub> 層
	第三紀	鮮新世	C <sub>1</sub> 層
中新世		C <sub>2</sub> 層	
		D層	
古第三紀	D層		
先第三紀	D層		

枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。



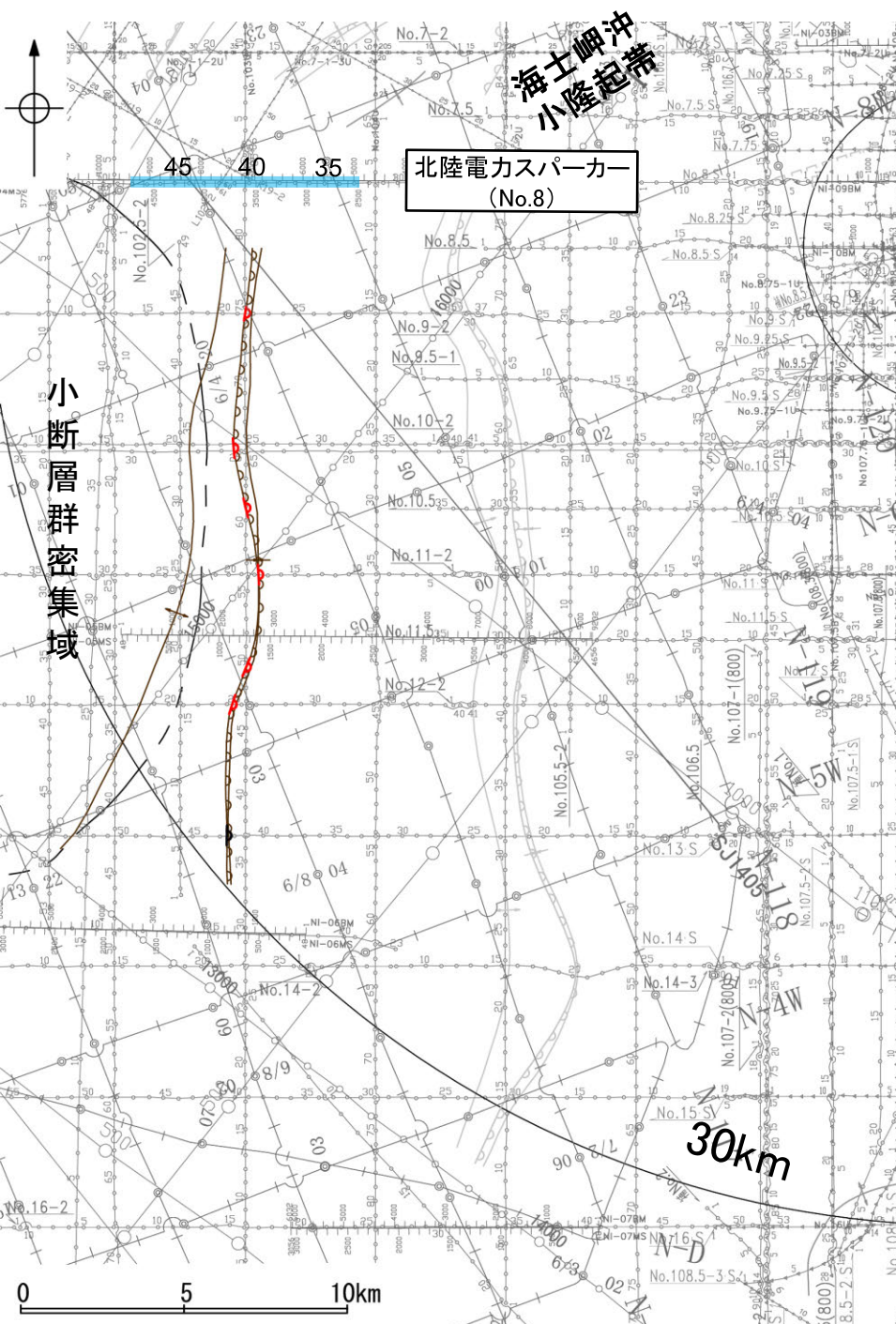
断層



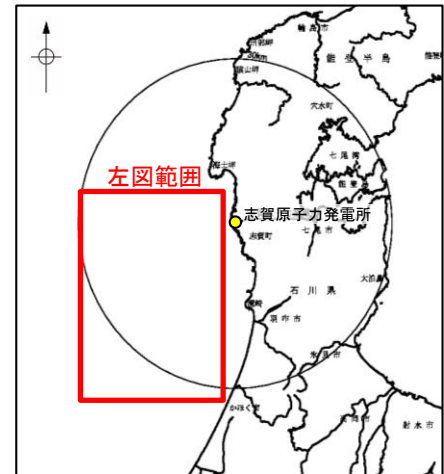


# 2.4.4 (4) 羽咋沖西撓曲の端部 —北端調査 No.8測線—

○No.9-1測線で推定した撓曲の北方延長にあたるNo.8測線において、いずれの地層にも羽咋沖西撓曲を示唆するような変位、変形は認められない。



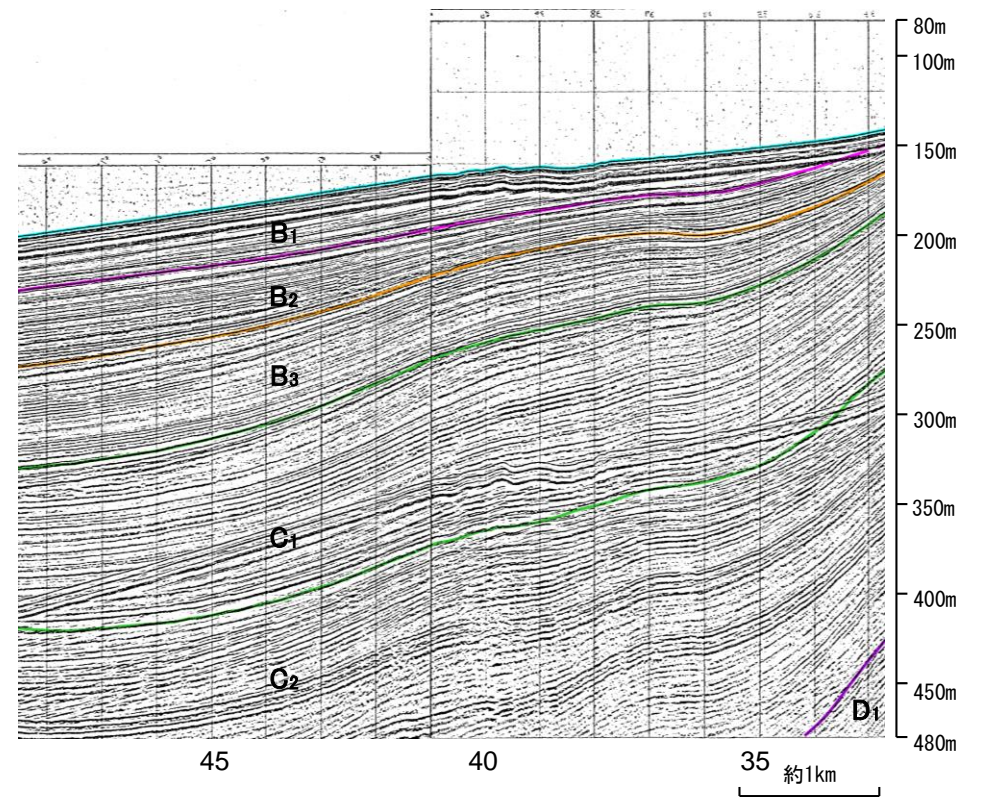
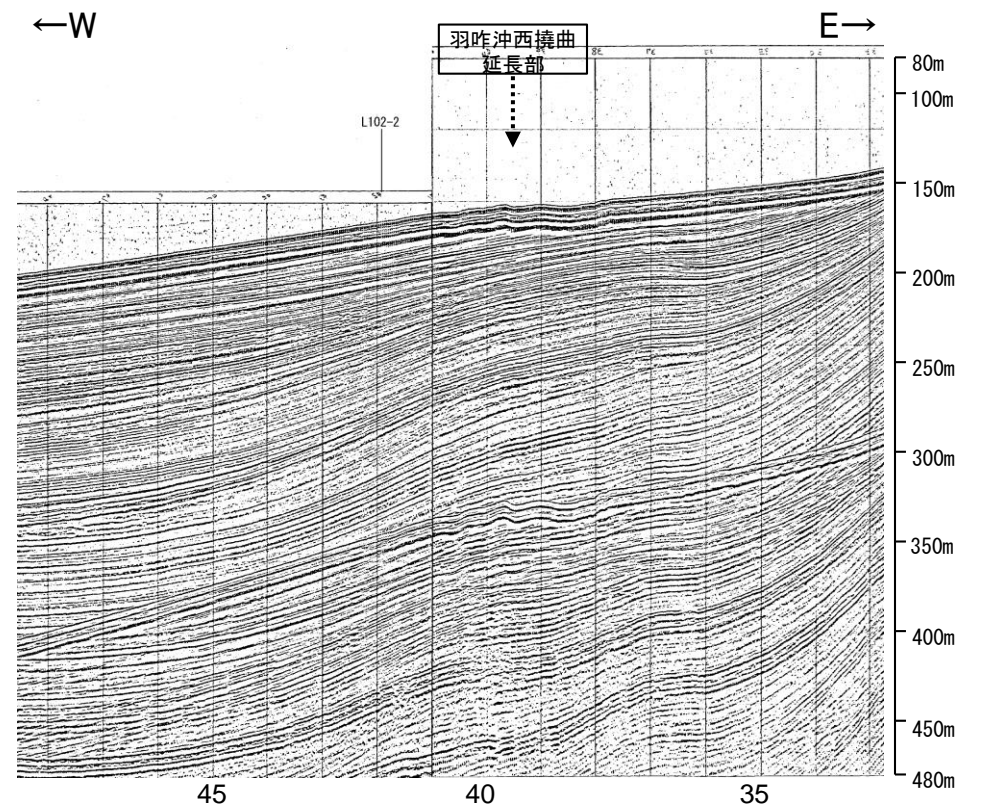
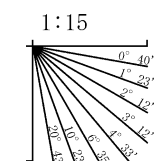
位置図



- 凡 例
- 対象断層: 撓曲 (curvature symbol), 背斜軸 (anticline symbol), 向斜軸 (syncline symbol)
  - 対象外断層: 伏在断層 (blind fault symbol), 換曲 (curvature symbol), 連続性のない伏在断層 (discontinuous blind fault symbol), 背斜軸 (anticline symbol), 向斜軸 (syncline symbol)
  - 小断層群密集域 (dense area of small fault groups symbol)
  - 右図記録範囲 (right figure recording range symbol)
- (測線位置における活動性)
- B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる
  - B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない
- No.8: 調査測線 (北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
  - No.9-S: 調査測線 (北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約360ジュール)
  - No.8U, No.11B: 調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
  - K17: 調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
  - L102: 調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
  - NI-09BM: 調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
  - NI-09MS: 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
  - N-118: 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
  - 14: 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
  - H73-1: 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)
  - SJ1407: 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

地質時代		地層名	
第四紀	更新世	完新世	A層
		後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
	鮮新世	前期	B <sub>3</sub> 層
			C <sub>1</sub> 層
			C <sub>2</sub> 層
第三紀	中新世	D <sub>1</sub> 層	
	古第三紀	D <sub>2</sub> 層	
先第三紀			

枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。

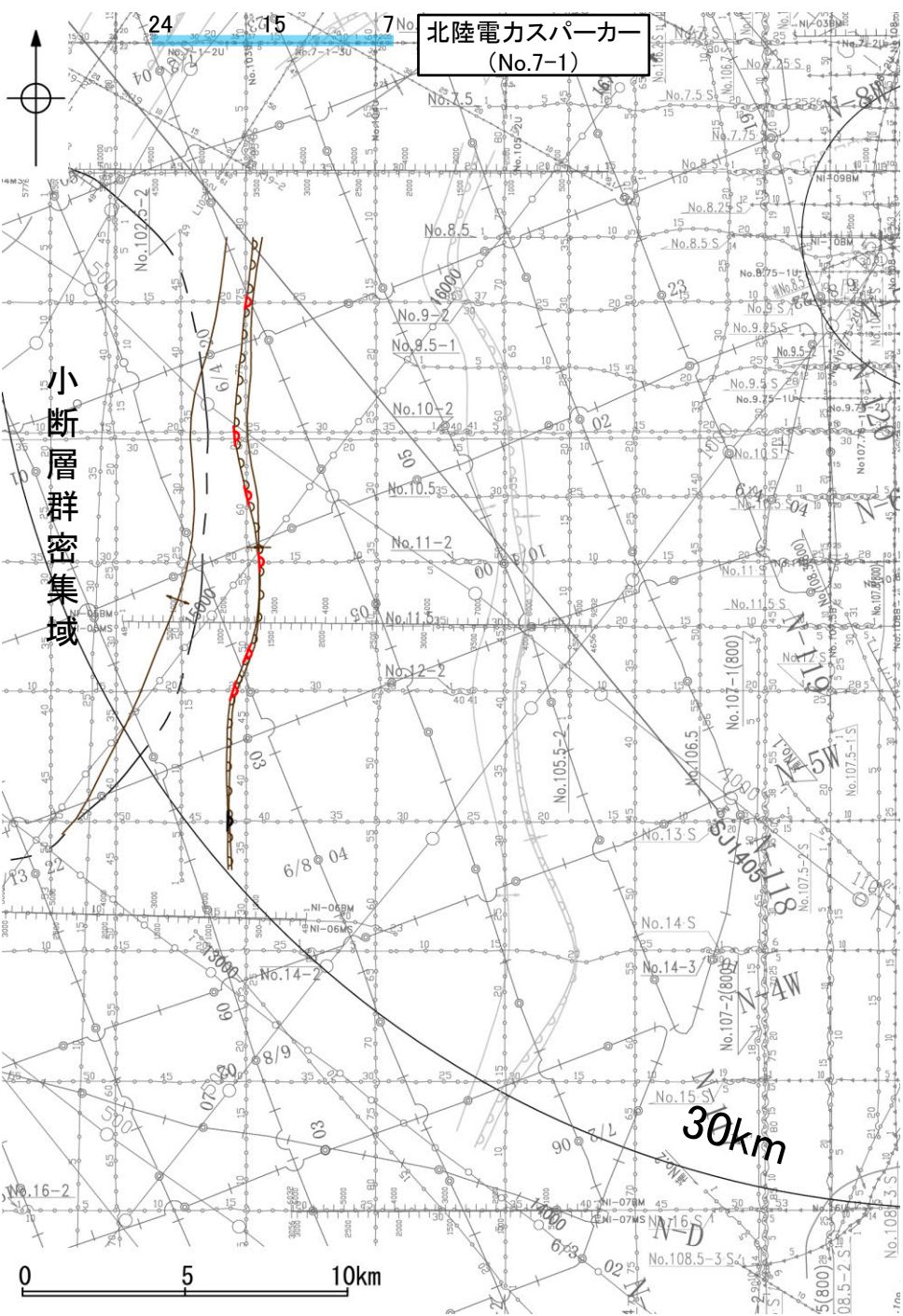




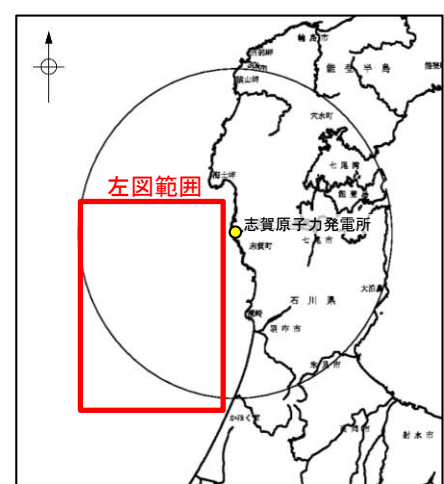
# 2.4.4 (4) 羽咋沖西撓曲の端部 —北端調査 No.7-1測線—

○No.8測線のさらに北方延長にあたるNo.7-1測線において、羽咋沖西撓曲を示唆するような変位、変形は認められない。  
○測点12及び測点24付近の西落ちの撓曲は、笹波沖断層帯(西部)として別途評価している。

※笹波沖断層帯(西部)の評価は、2.4.2



位置図



- 凡 例
- 対象断層: 撓曲 (Synclinal fold), 背斜軸 (Anticline axis), 向斜軸 (Syncline axis), 小断層群密集域 (Dense area of small faults)
  - 対象外断層: 伏在断層 (Blind fault), 撓曲 (Synclinal fold), 連続性のない伏在断層 (Discontinuous blind fault)
  - 青斜軸 (Blue anticline axis), 向斜軸 (Syncline axis), 右図記録範囲 (Right figure recording range)

(測線位置における活動性)  
 B<sub>1</sub>層以上に変位、変形が認められる  
 B<sub>1</sub>層以上に変位、変形の可能性が否定できない

- No. 8 調査測線 (北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
- No. 9-S 調査測線 (北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約360ジュール)
- No. 8U No. 11B 調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
- K17 調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
- L102 調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
- NI-06BM 調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
- NI-06MS 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
- N-118 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
- I4 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
- H73-1 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)
- SJ1407 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。

地質時代	地層名		
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B <sub>1</sub> 層
		中期	B <sub>2</sub> 層
		前期	B <sub>3</sub> 層
	新第三紀	鮮新世	C <sub>1</sub> 層
		中新世	D <sub>1</sub> 層
古第三紀	D層		
先第三紀	D層		

